女鑑

明治三十二年十一月二十日發兌

第百九拾柒號

東京國光社



女鑑第百九拾參號

目録

原公道の妻



女子の友とするところ

君子には朋あれど、小人には友なし。其の故如何と云ふに、小人の、好む所のものは利祿なり。貪る所のものは財貨なり。その利を同じうする時にあたりては、暫く相黨引し、以て朋となすといへども、其は僞りなり。其の利を見ては、先を爭ひて之に赴き、利盡くれば、交りうとくなり、遂には、反へて相賊害す。兄弟親戚と雖、保つ能はず。されば朋なし。其のしばらくも、朋とする所のものは僞りなり。君子はしからず。守る所のものも道義、行ふ所のものは忠信、惜む所のものは名節。之を以て、身を修め、則ち、道を同じうて、相益し、之を以て國に事へ、心を同じうて、共に濟ふ。終始一の如し。これ君子の朋なりと歐陽修の云はれけるが、誠にさやうにて、信ありてこそ朋あれ直にしてこそ友あれ。信ならず、眞ならず、僞り飾りて、何ぞ友を

得ん。朋は道と心とを同じうし、互みにあひ助け、互みに相益し、善なれば從ひ、惡あればいましめ、あまりたる所はうけ、足らはぬ所は授く。是信實の友なり。蒲生君平、平田篤胤とふかく交りけるが、一日、君平、篤胤を訪ひけるに、篤胤、之を迎へ、座に請じ、閑談數刻にして、たま〳〵山陵の事にうつりたり。篤胤、君平に問ひけるやう、君は、漢學を究め、我は國學を修めたり。君と我との如きは、學問の上より云はゞ如何名べきかと。君平直ちに、朋友なりと答へたりしからば、朋友の交りは、如何にせば善からんと篤胤重ねて尋ねたるに、更にも云はぬ事なり。意を隔てず、互みによきをすゝめ、あしきをいましめ、互みに助けあ、こそ朋友の道なれと答へたるに、しからば、君があらはしたる山陵志にあやまれる所あらば、おのれ、之を訂正せまほしく欲す。如何にと、篤胤の云ひけるに、君平よろこびつゝしみて敎をうけむといひき。後山陵志を訂正せしは、篤胤のあつき力による所多しとぞ。かくてこそ、誠にうつくしき友の交誼にして、友の德もかくてぞ見らるべきなる。あはれ、いま、つら〳〵女子の友とする所のものを見るに、かやうのもの少し、さては、小

人の如く利を友とするか。しかのみにもあらず。たゞ飾りを以て友とするなり。總じて女子は、其の身を飾ざると同じく、言葉をかざり、心をかざり、つゝしみを飾る。かざりは、僞りのもとゝなるぞかし。おのれよき人に思はれて、人によろこばれんなどとて、友のあしき事を見るもいましめず。ひたすらに、人を尊びほめ、又、己、謙遜をよそほひ、或はつゝしみをよそほひて、知りたる事をも敎へず。見亙せば麓ばかりに咲きそめて花も奥あるみよしのゝ山。奥あるはよけれど、のぼれども〳〵、ろの奥を見せざらんとするは、友の友誼にあらず。互ひに隔てなく語り、へだてなく交り、善はすゝめてあひ助け、惡は諫めて相しりぞけ、一身を修め、人を修め、率いて世を修む。之友の道、友の德なり。又、女子は、さやうにつゝしみをてらふかと思へば、又きむづかしく、こまかき心に、少しの言の葉の違ひを心の中にとがめ、口には出さで、憎しと思ひ、人の過ちを、心の中に笑ひ、其の人にはかくして、中なかに、他の人に相告げ、甚しきは、夜叉の如き心をひめて、ほさつの如き和らぎをてらひて交る。かゝれば、上は容貌うるはしく、言葉やさしく、互みに敬し、互

みにしたひて、如何にもうつくしき友誼と見ゆれども、信實、心よりの友はまれにて、心中には、中〱にあざけり、笑ひ、のゝしりにくみ、うらむさへ、往々あるやうなり。女子、又、朋なきか、小人と同じきか、あはれ耻づべき事なり。四海皆、兄弟とも云ふことあり。こを見そなはさん姉妹たちよ、今よりは、互に心よりうつくしく交はりたまひてよ。



論説

日本女子今後の覺悟（九）

三輪田眞佐子

上に述つるがごとく、體育は必要にして、秋毫ばかりも、弊害なきものなるに、あはれ、舊來の習慣と、或然の杞憂とを以て、今日、これを、われ人の望むがまゝに實踐する

ことを能はざるは、かへす〲遺憾なるわざにこそ。なほ、更に讀者の注意をひかまほしければ、左に體育の必要なる所以をものせん。

第一　人生の福祉　　凡そ、人生の福祉となるべきもの、いと多からんも、身體の強健は、其主なるものならん。若し生涯疾病を友とせんには、たとひ巨萬の黄金白金を積まんも、以つて肉體の欲を買ふに足らざるべし。況んや秋の紅葉も、身の健ならざる人は、冷風膚にしみて、獨、無常の歎を增さしむるのみ。春の櫻花も苦を知らざる人にこそ樂しけれども、病蓐にある人をして、單に悲哀を大ならしむるならんかし。

これに反して、健全なる人には、粗食もなほ、甘を感じ、襤褸もなほ、暖を覺え、四方の風色を見るにつけて何ものか快樂の種ならざらん。わきて日時の人事は繁忙ならんも、健康の功にて、多々益々辨ぜんが。外の見る目に知られざる愉快を得るなるべし。されど、人生の福祉は、をさ〲身體の健全に勝るものはあらじ。然るに、世の婦女を見るに、比較上、男子よりも、疾病多きがごとし。これおのれが、女界のため怨とするところなり。

第二　日時の重任　　熟ら女子の本務を考ふるに、男子の事務と相異なりて、その本領は、家政にしあれば、さながら、日月星辰の運行して、間斷なきがごとく、家政は、寸陰片刻も間斷あることなし。たとへば、父兄の職を外に執るものは、一定の休日もあらん

なれども、家政を主どる婦女は、老いたる父母の養あり。幼き兒童の育あり、あるは、來る客あり。將た行きて訪ふべき家ありて、つかのまも、これを放棄することを能はざるべし。

然れども、主婦にして健全を失はんか。などか、斯かる間斷なき任務に堪へん。さりとて、輭弱なる體質の人は、止むを得ず。家政を見ること疎略に趣く外なき。思ふに、かゝる家庭は、なべて不整頓を極むるのみならず。他人に對する相應の交際さへ怠り遂には、暗夜に燈を失はんがごとく、婢僕、その勤を破り、育兒、この道を誤り、漸々家政衰退するならん。

第三國民の强弱　女子の輭弱なる弊害は、その、一身の不幸に止まらざるべし。必ず、子孫に遺傳するならん。されば、子孫の福祉を祈るものは、傍ら、子孫のために、身體の壯健を謀らざるべからず。更に、その餘弊は、子孫の不幸に止まらず。國民、一般の不吉となるべし。

現今は、世界の各國、その强弱を爭ふ秋なるに、我帝國々民の身體は、その强とならんも、弱とならんも、一に母たるべき婦人の體質に關係する道理を知らば、敢て、强健を謀るは女子の國家に對する責任となるべし。

既に、女子の體質は、國家の運命に關係するを知らば、社會一般の急務として、女子の體育を奬勵すべし。聞くならく、大日本體育會には、不日女子の體育場を新設して、この欠を補はんとかや。實に仰望すべきわざになん。

まことや、今日の女子教育法を考ふるに、專ら智育に厚きが如し。これに次ぎて、德育を尊ぶ形勢となるめりと雖も、その實踐に至りては、疑はしきがごとし。更に、その體育を見んか、殆どいまだ、その道を開かざるものと言ふも可なり。蓋し、以上の三育は相待ち相寄るべきものなれど、共に當を得て均齊を失ふべからず。而るに今日、その體育を、比較上、冷澹にするは不可なり。おもふに人は、精神を尊びて、身體を賤むより、自然、かゝる傾向を生ずるならん。されど精神と身體とは相分離すべからざる次第は、前回にものしたるごとくなれど、決して、體育を怠るべきにあらず、切に本末の順序より言へど先づ身體を養ひて、然る後、精神を修むべしと言はゞ言ひ得ん。

さて、體育は、運動の奬勵の如き、積極的の法方と、傳染病を避くる如き、消極的の方法と相待つべきものなれども、詳細は他日に讓るべし。なほ拙著、女子教育要言の體育編をも參酌してよ。

義理づく

隨菴生

義理づくとは、其の行爲の義理に中りて、宜しきを得るを言ふにあらずして、茲に或る事件あるに際りて、他の勸誘によりて、已むを得ずにか、若しくは、自己の體面を保つに必要なりと信ずるが爲に、不本意ながら、之に赴くものをいふ。彼の賤しき業を營む輩の、往々義理のために、何くれの見物にゆくといひ、或は、何某の義理にて、何を爲る等いふ義理も、即ち、義理づくの義理と、全く、同じ格に用ゐられたるなり。文字の上と會話の上とに、用ゐる義理の意義の相違せること何ぞ夫れ、斯くの如く甚しきや。

方今、この義理づくといふことの世に行はるゝこと、非常に熾なるものにして、特に婦人の間に在りては、世間萬般のこと、皆この義理づくを以つて、上中下おしなべて、處理せむとするもの多し。是極めて、世のために喜ばしからぬことなり。

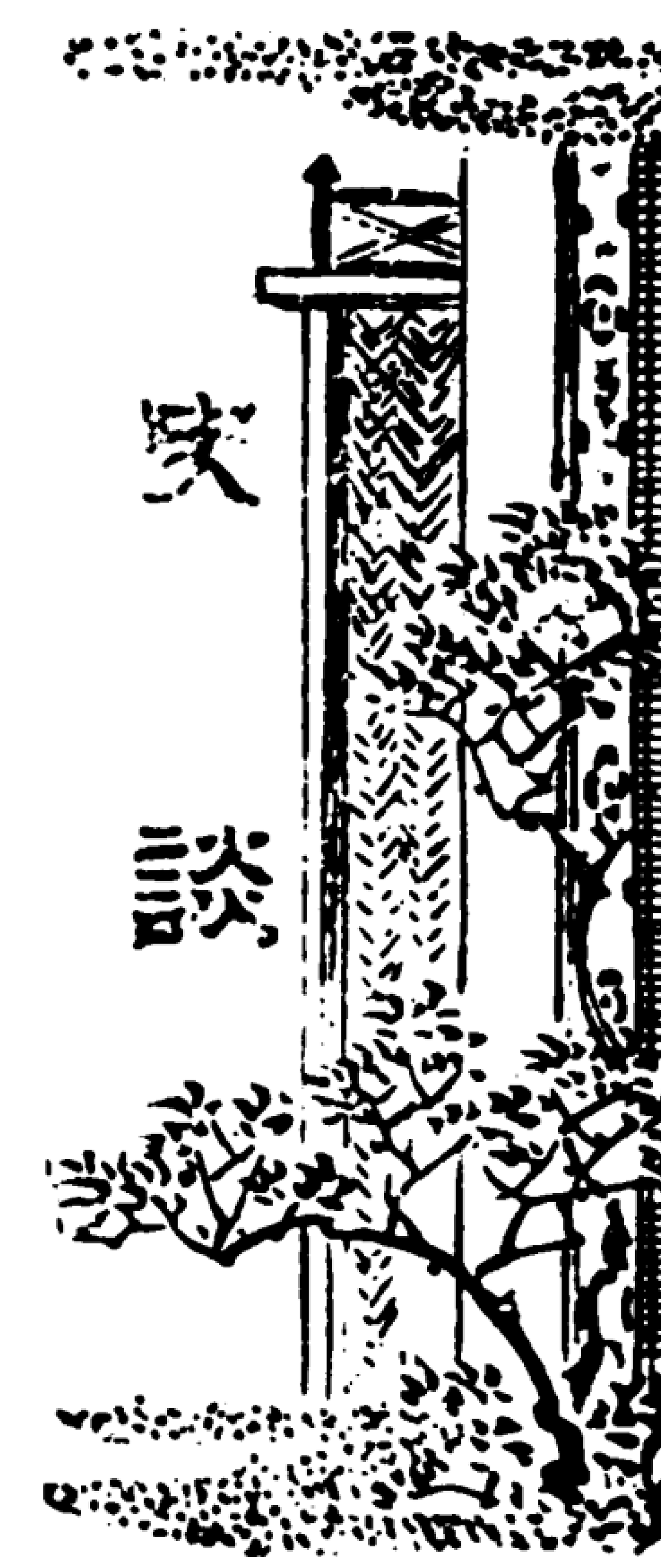
寒風肌を刺すばかりの時にありて、ことに其の凛冽を極むる橋上を擇び、如何に貸借せしものとはいへ、幼き兒を轉しおき、故に悲鳴せしめ、時に或は、辛うじて寢入らむとするをさへ、密と抓り起して、泣かしめ、敢て酒肴の料を貪らむとする猾婆の前には、我愛兒の教育費を節減せる者、父祖の孝養の資に充てむとする、大切なるをさへ、投

じて、快とする慈善家多きにも拘はらず、彼の養育院育兒院、其の他、種々の慈善事業にして、最も世人の奮發せざるべからざる種類に對しては、所謂義理づくの出資、義理づくの出席者を除けば、殆ど全く見るべきもの無き程なりといふ。是、一は眞に慈善といふことを解する人尠きにも因るものなるべけれども、多くは、義理づくの流行跋扈を極むる餘弊なり。文明の進歩、國運の隆昌は、余輩をして、世の諸嬢に望むところのものを多からしむ。即ち、養育せらるべき道を失ひたる孤兒、教育の資を絶たれたる貧民、或は、天災地異のために、非常の苦境に陥れられたる人々等を愛育扶助する方法を立つること、其の他、一般の教育衛生等についても諸嬢に待つところの者、甚だ多し。然れども、今日の如く義理づくの斡旋盡力にては、朝に起しても、夕に仆れ、遂に効果を得る能はざるべきを疑ふのみならず、之を托することの極めて、不安なりとの憂慮を止むる能はず。

又、世には、楊子の尖頭に布帛をつけて、障子の棧の塵芥をだに殘さじとつとむる潔癖家多し。然れども、惡疫流行すべき時に先ちて、大清潔法を行はしむるに、凡そ情實を言ひ立て、迷惑なりとの意を洩さゞるものなき程なりといふ。是等も、公共的精神のいまだ發達せざるによるといへども、唯義理づくにて、已むを得ずに、之を行ふのみにて、

各自に危害の迫り來らむことを知らざるが多し。

最も甚しきは、冠婚葬祭の大禮にさへ、この義理づくの、跋扈することとなり。朋友の贈答も、義理づくなり。親子の禮も、義理づくに之を行ひ、夫婦の大節も、亦義理づくにて、保たるといふ。心の誠より出づるにあらずして、何んぞ其の行ふところ、人道に合ふことあらむや。斯くの如きは、實に人心腐敗の極なり。其の弊害、今更に擧ぐるに及ばざるべし。唯この惡風習の流行跋扈、あまりに久しきに亙りたるが故に、何時しか、相慣れて奇怪とするものもなく、然ばかりの弊害に堪へて、苦痛を感ぜざるに至りしなり。彼の疾病は、起る始に、非常に疼痛を感ずる時よりも、漫性に陷りて、左まで、疼痛を感ぜざる時にいたり、身體に及ぼす危害は、寧ろ甚だ大なり。猛省せずして可ならむや。婦人は、東西古今を問はず、其の心識明ならざるもの多しと稱せらる。然る上に、猶斯る惡習の、而かも一の條理なく、又極めて、放縱自由に陷りやすき範圍にのみ居りて、世間萬般のことを、行ひ慣るゝが故に、其の心いよ〳〵明を失ひ、其の識ます〳〵少くなるなり。余輩は、速に、斯の惡風習を除却し盡し、世間に對する平生のことは勿論、最も多く諸孃の斡旋盡力を要するところの、彼の慈善事業のため、敎育衛生のために、誠實の助力を與へらむことを、希望の至りに堪へざるなり。



原公道の母

有馬祐政

原公道、名は善、號は念齋、「先哲叢談」の著者として有名なり。かれ敢て、學者を以て、稱ふべきほどの人にはあらねど、能くその祖父公瑤（雙桂と號す）の家學遺風を承けて、謙虛篤實、とりわけ修史記傳を好み、嘗て「史氏備考」一百卷、「賢相野史」四卷等を編し、その志も、その業も、決して凡庸の徒の企て及ぶ所にあらず。單に、之を、かの「先哲叢談」に徵するも、かれが功勞の尋常ならざるを知るべきなり。その母は、土井侯の臣秋田重信となん云へる人の娘にして、十六歲の時、原氏に來り嫁つぎぬ。夫敬仲、そが父公瑤の祿を襲ひて、唐津侯に仕へ居りしが、病痾のためにとて、骸骨を乞ひしも允されず。されど、猶も歎願して已まず。その餘りに强請なりしかば、終に罪せられて、獄に囚はれ、剩さへ、士籍をさへ削らるゝに至れり。はじめ、その致仕する際、秋田氏、鄉家に歸省したりき。時に鄉の兩親、與にかの女に逼りて、曰へらく、「曩の日、原氏の子才行あり、而もその祿二百石なりしを認めて、之を擇びて、女を妻はしたるなり。しかるに、そが世を嗣ぐに及んで、祿半を減せられ、そのうへ、今、はた、辭を乞ふとは、自ら、その量を揆らざる者と謂はざるべからず。而もなべて士たらん者は、恒祿なくては、衣食すべきやうなし。その溝壑に轉死せんと、方に近きにあり。是の故に女か〻る者に嫁つぎゐて、永く患難を受けんよりも、早く、之を去て〻、更に良匹を求めんに若かじ」と勸めけり。秋田氏これを聞きつゝ、覺えず、噓唏涙を零し、え堪へで、遂に口を開きて曰はく、嗚呼父君や母樣や、今に至りて何爲れぞ、かか

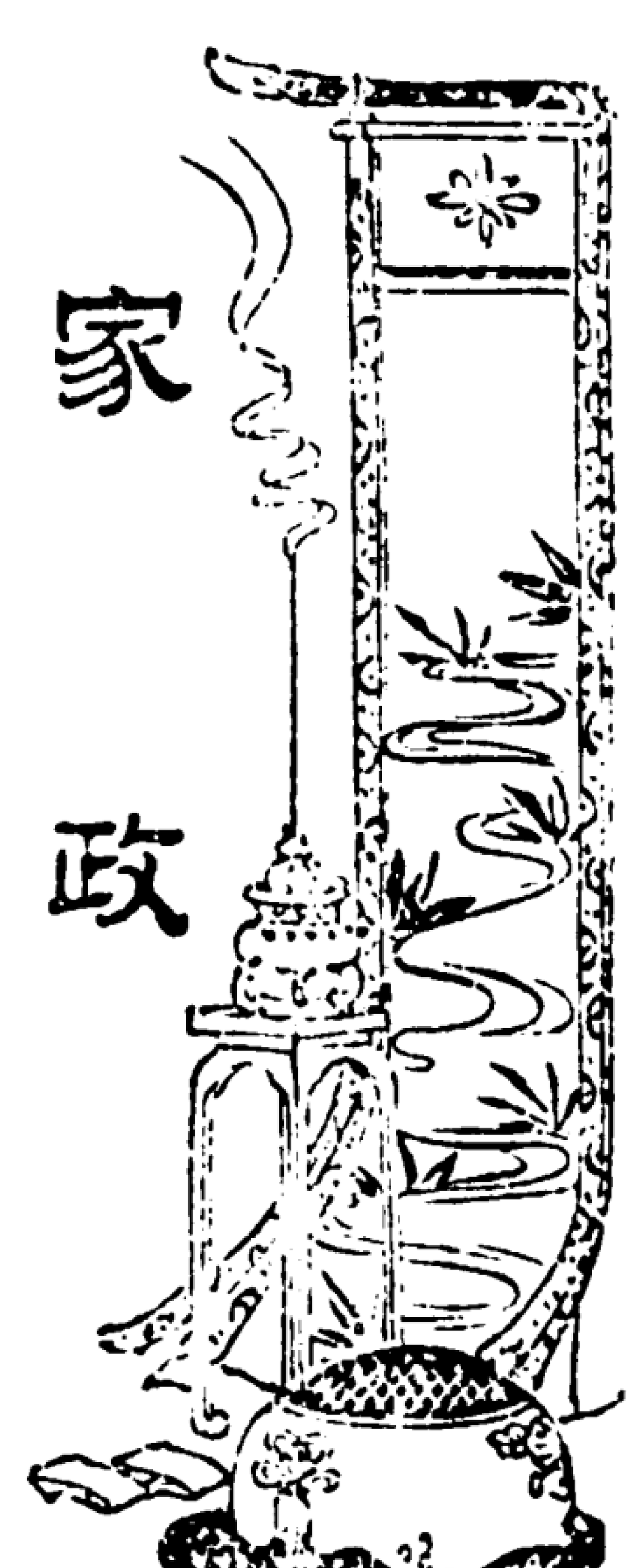
るあさましき言の葉をばのたまひつるか。妾は女子の常理は、二庭を踏まずとこそ聞きつれ。又、先、舅の、しば〳〵古來の烈女の物語りせらるるたびに、あるは苦を嘗めて、あるは死を致して、以てその貞操を易へざりしを敎へられたりしを忘れじ。それのみならで、今、夫より、妾に去れよと云はれもせざるを、妾自身より、奈何ぞ、まづそを去ることを求めて他に適くなど欲すべけむ。しかも、また、肯んじがたきふしは、祿ある時は、之に配つぎゐ、祿なきに至りぬれど、卽ち、之と離る、不義のこと、誠に、之より大なるものなし。たとひ他家に適きて、身に錦繡を纒ひ、口に粱肉を啖ふとも、かくのごときは、豈妾が願ふ所ならんや」とありけれど、兩親も終に、その賢き志を奪ひ、その正しき節を挫ぐにせんずべなかりき。さはあれど、猶、愛を垂れては、をり〳〵睽離を謀り合ひしも、亦、いかんともするとなくして止みたりけり。而して、その夫に事ふるや、二十有八年、恰から一日の如く、禮あり儀あり、儼乎として、孟光の德を具ふ。又、その姑に侍べるや、孝養いさゝかゆるかせにせず。その始めて、江戸に來りて、市中に僑居するや、比隣の人々うちよりつゝ毎に相たゞへて曰へるやう、かの新來の家、姑と婦と恩情の篤く密やかなるに依りて考ふれど、必ず、その夫は贅婿にして、妻と母とは、眞の親子なるべし。さなくば、その二人が相互に意を盡くし、情を悉すこと、那麼かくの如きを得んや」と、以て、かの女が、平生を想見するに足れり。その夫に從つて、將に古河を辭せんとするの日に當りて、號泣して、天に禱りて曰はく「請ふ、蚤く妾か命を奪へよ。父母をして、永く、世を同じうしゐながら、再會期するなきことを憂へしむるなかれ。若し、之を得べからざれど、每年、一兩反は、必ず、父母に見ゆるを得て、假し播を去れども去らざるが如からしめよ」と、やがて江戸に出で、夫敬仲幕府の仕籍に加はりてより、このかた、果して、しば〳〵父母に會ふことを得て、その志の

如くなるに臻れり。是に於てか、その父母共に、自ら前日の失言を悔い、當時の痴情を恥ぢたりとなん。人心誠なれば、神明、之を祐くるとは、げにかゝることをや云ふらむ。その子公道の、父に隨ひて、句讀を習ふ時、常に督責して、學に勵ましめ、夫逝かりて後は、寡居、善く家政を治めて、公道をして、すこしも他故を顧みず、專ら意を學術に注ぐを得せしめたりき。公道が甞て箕裘を墜さゞりしは、主として、この母氏の焦思苦身の賜ならずんばあらず。かの女死に至るまで、全く佛敎を信ぜず、珠數を手にしたることもなく、亦、佛號經名を稱へたることもなし。嘗て、曰ひけらく、「男雙桂先生は儒宗なり。その子敬仲先生も、亦、儒なり。その子公道も、亦復、俗士にあらじ。之が婦たり、之が妻たり。はた、之が母たる者、焉くんぞかの天堂地獄の說を信ずべけん」と、思ふに古今得易からざる　賢婦良妻、兼、慈母たる人と謂ふべきかな。

安部則任の妻

山本正周

安部則任の妻は、姓氏詳ならず、康平中、則任、源義家の爲めに破られ、將に打死せんとしける時、其の妻も、妾ひとり生くるに忍びず、いで死出の御供せむとて、兒を抱き、淵に投じて死しけりとなむ。



茶の湯

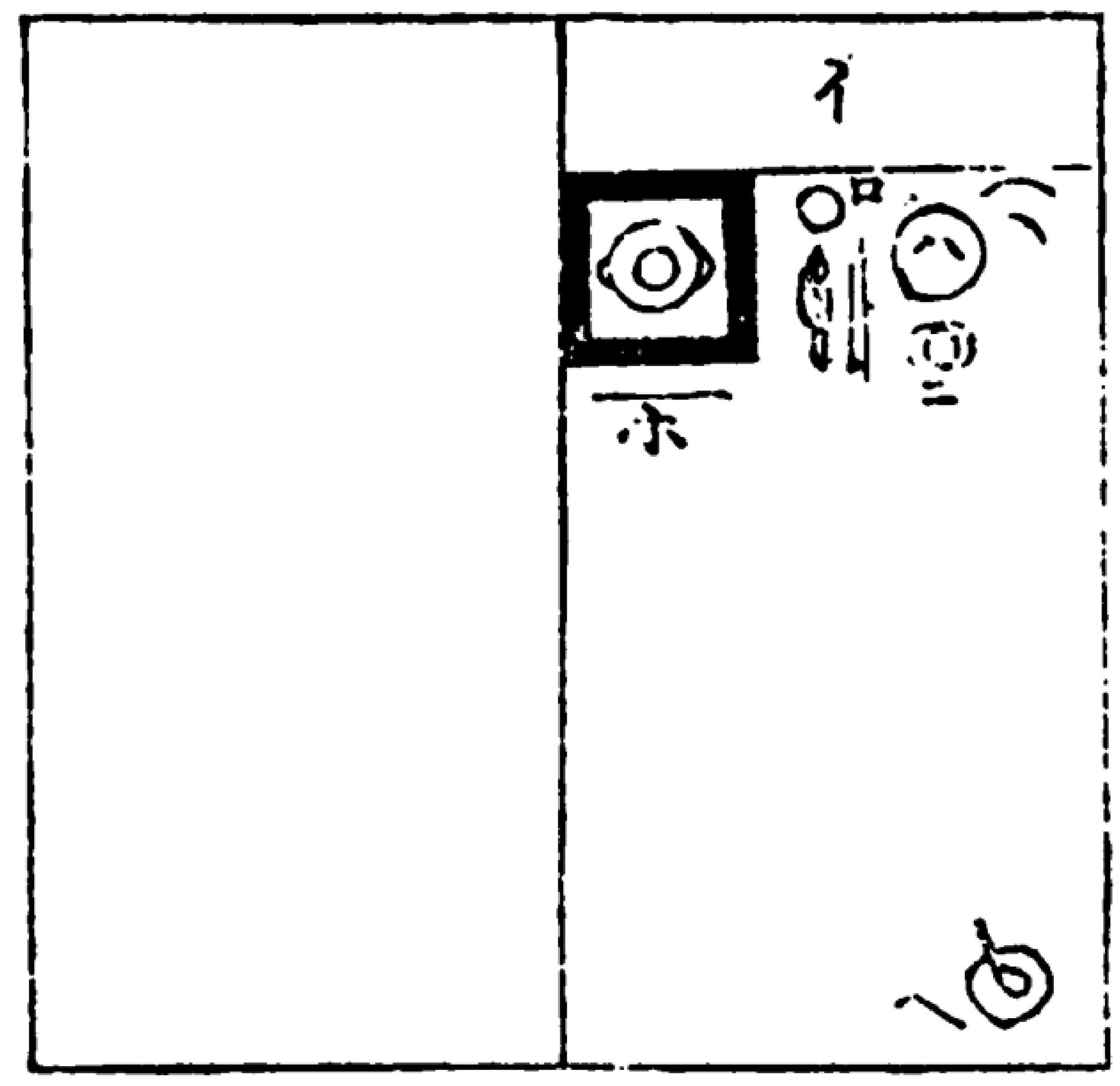
茶禮初學（承前）

孤峰菴礫仙齋不美

關　葦雄

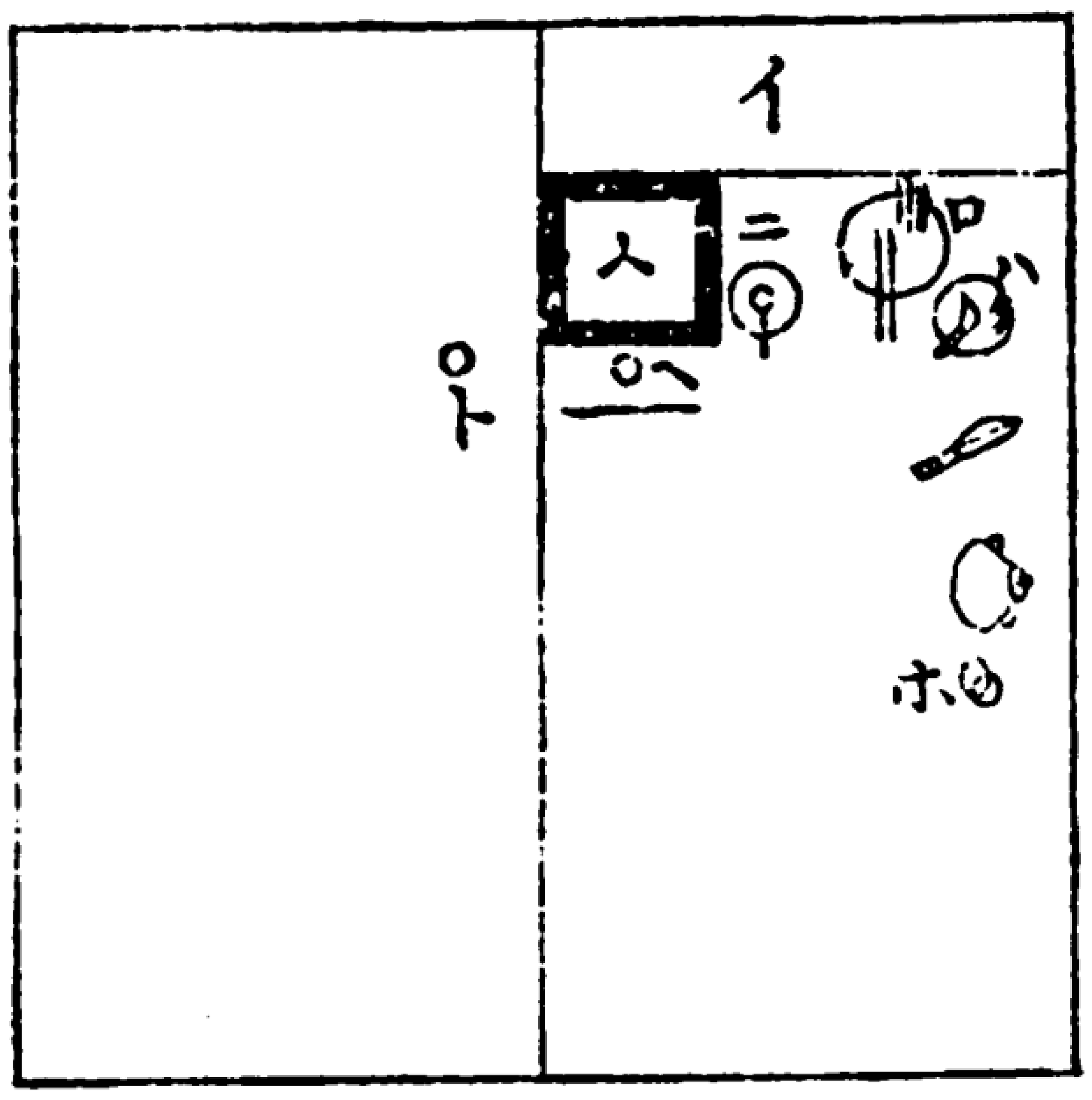
向切左手前或逆手前とも云ふ

第一圖　炭手前



イ、向板　ロ、香合　ハ、炭取　ニ、クワン　ホ、居前　ヘ、枝炭

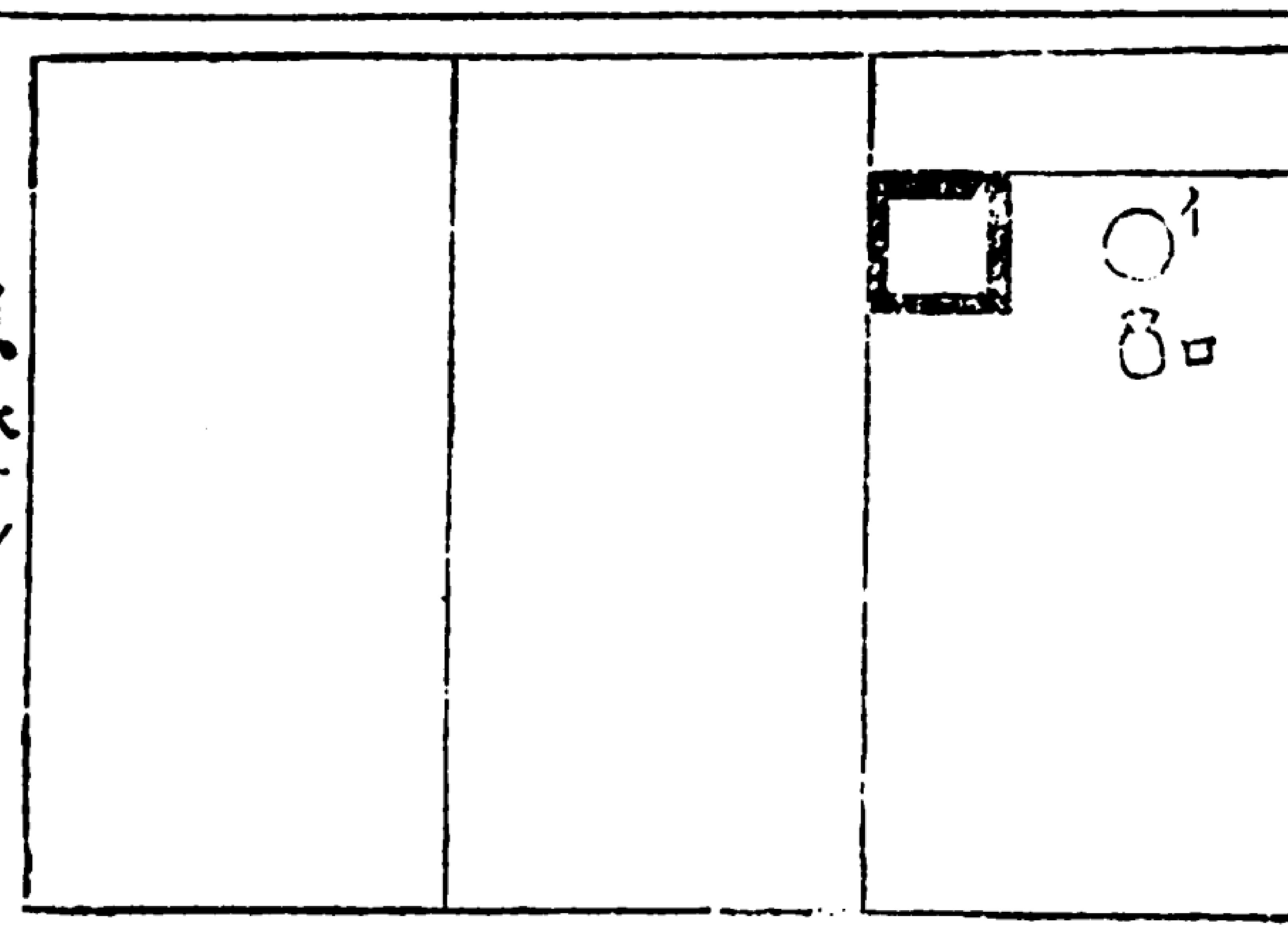
第二圖　同



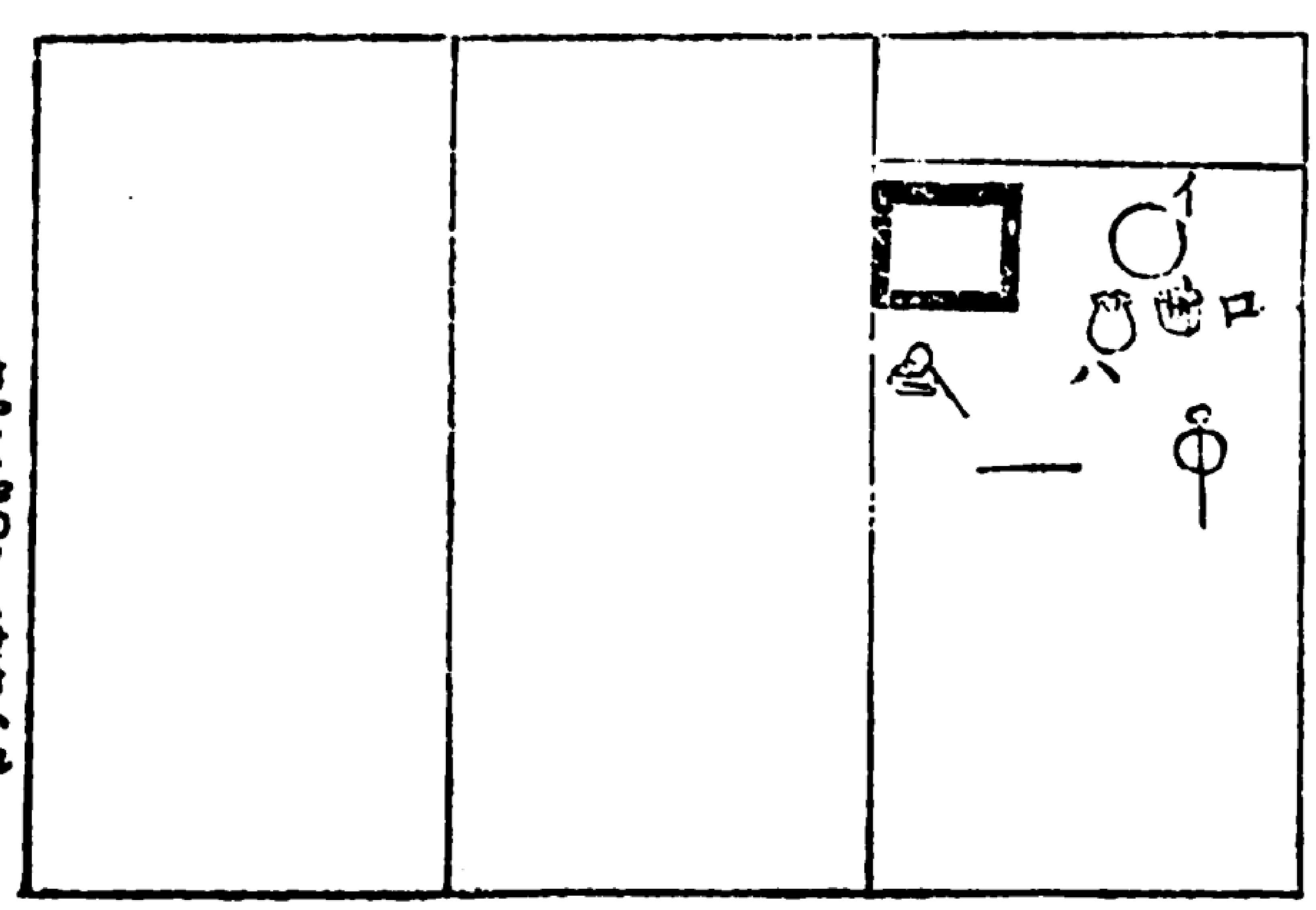
イ、向板
ロ、炭取
ハ、炮鋒へ枝炭假置ノ時此の所
ニ、灰マク時炮ロク
ホ、クワン
ヘ、香合蓋
ト、香合

香合客より返す時、此の反對と知るべし。

第三圖如斯濃茶入を飾り、客を迎へ入る。



イ、水サシ
ロ、茶入



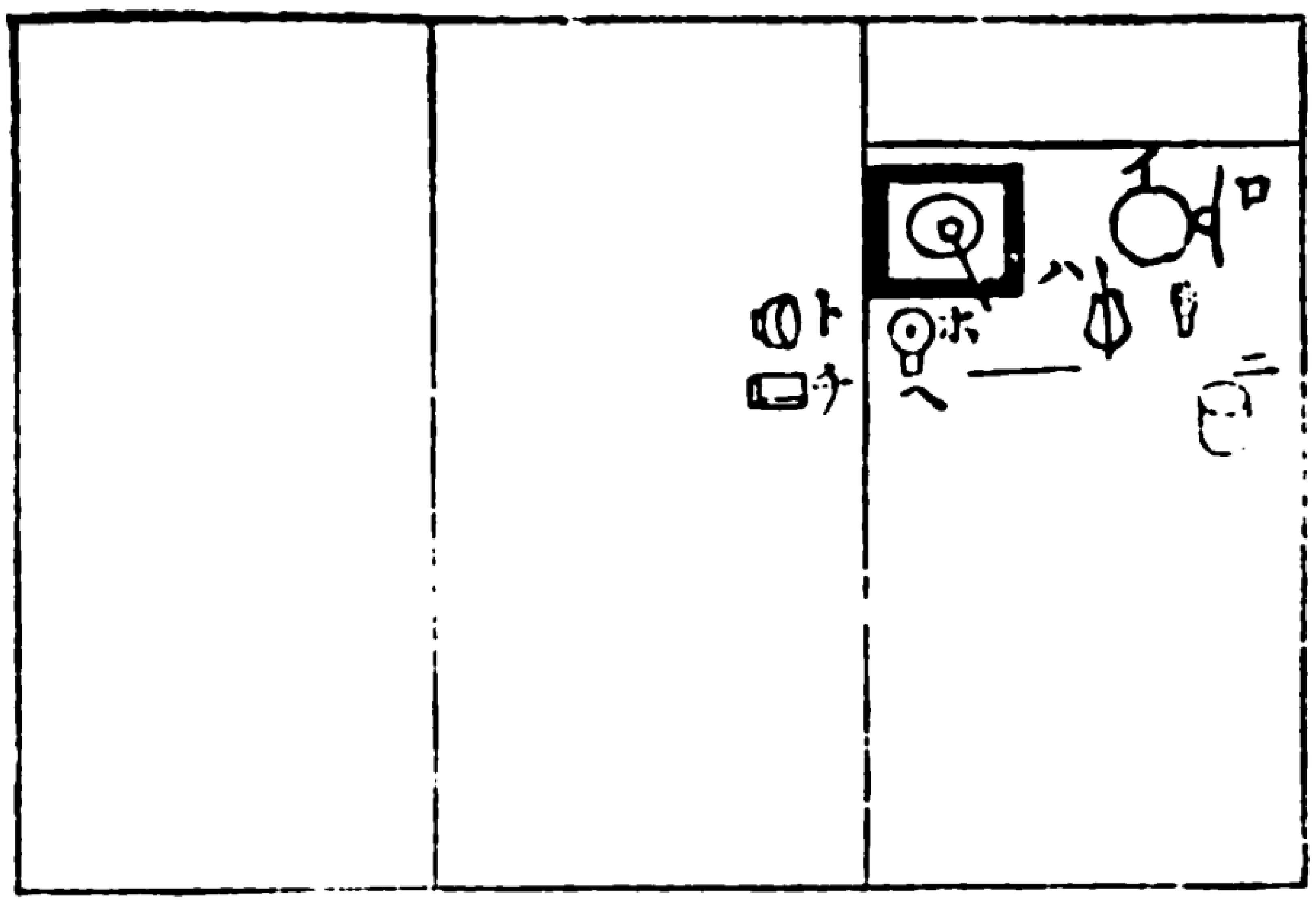
第四圖は客各席入して、亭主出柄杓を蓋置へ据ゑ、主客へ一禮して、濃茶を点る手前に着手せんとする處の圖なり。

イ、水サシ　ロ、茶碗
ハ、茶入

第五圖

點茶して、濃茶出したる時の圖

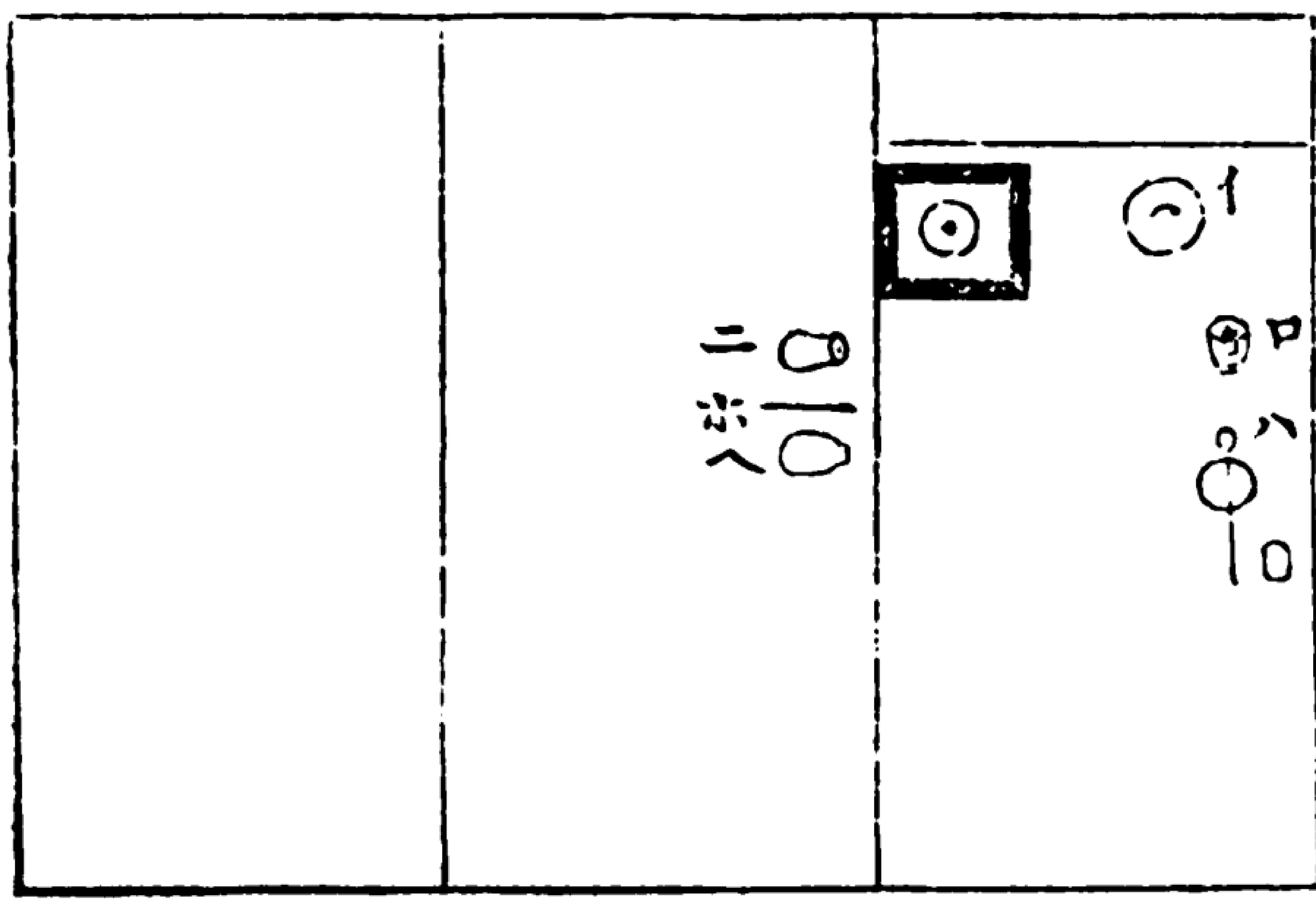
イ、水サシ　ロ、ロフタ
ハ、茶入茶杓　ニ、ホコシ
ホ、カマフタ　ヘ、フタオキ
ト、濃茶　チ、フクサ



茶碗返すは、此の反對と知るべし。

第六圖

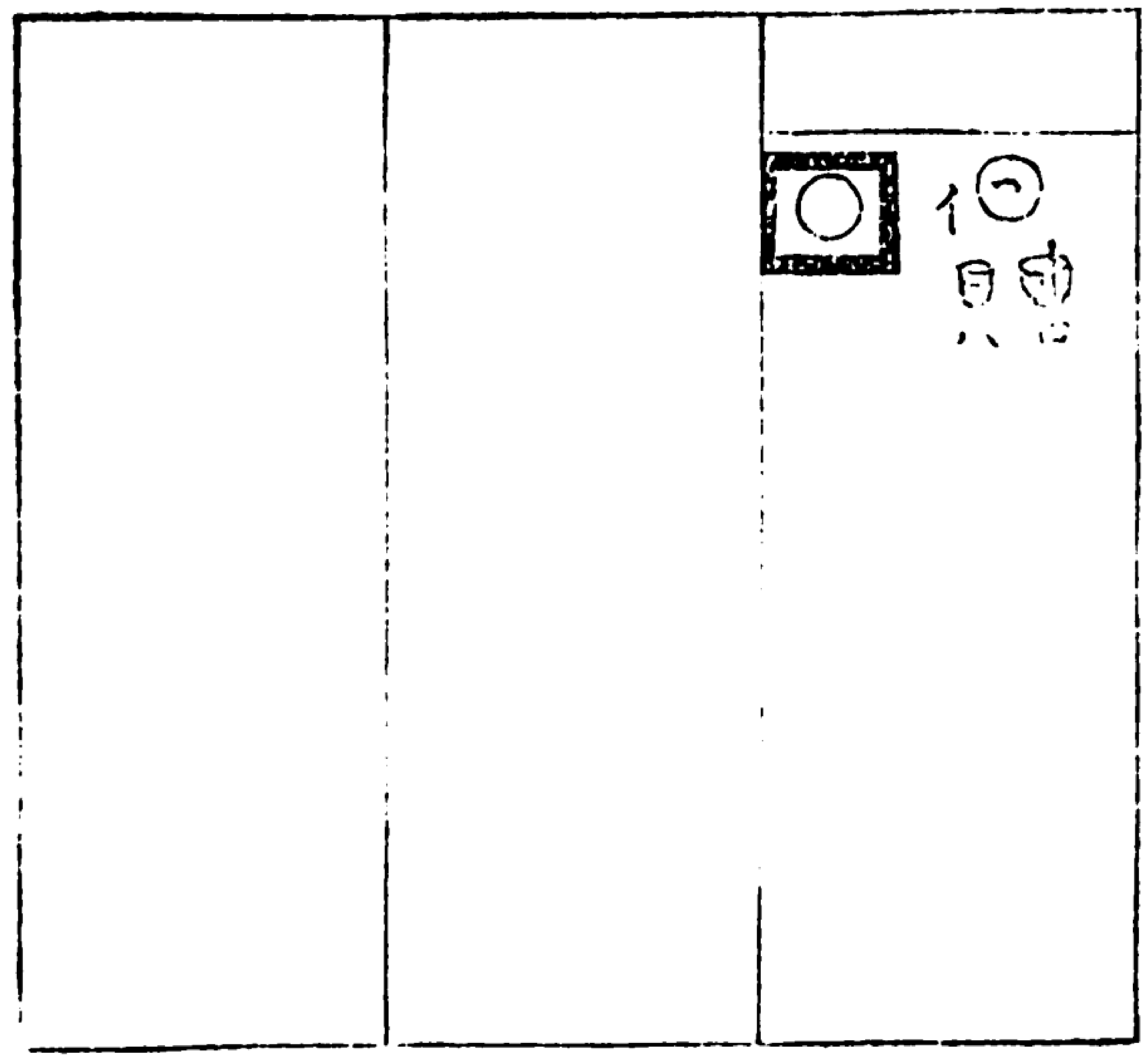
イ、水サシ、ロ、茶碗假置
ハ、コボシ柄杓蓋置
ニ、茶入
ホ、茶杓、ヘ、フクロ



跡仕舞茶入茶杓袋所望ありて則出したる所の圖標又客方より返す時は此反對と心得へし。

不羨曰、此の向切逆手前は、是迄縷々教授せしを塾視せられし孃媛等は解し得らるべけれど、尚、爲註意指教すべし。先、第一、此手前は帛紗を、右の腰の間に差狹むべし。始め茶碗を持出で、、水指の正面に座し、右手にて、右の膝頭の邊に假置し、茶入を右にて、些少左の方(但し客付)へ寄せ置、右手にて、茶碗を取、左を添持直し、右手にて茶入と置合すべし。𦉪持出る時も、右手にて持出べし。次に居前衣紋を直し、柄杓を準へ、右手にて、蓋置を出し、正面を能見て、左の方、圖の處へ置付、柄杓を引き一禮して后、點前に着手する事指圖の通り、茶を點たらぞ、右手にて、茶碗を取上げ、茶の點方、濃薄を點驗し、左手にて、客方へ出す。又、添る帛紗も、右にて、懷中より出し、左手にて茶碗の右に出す。其它は逸々指圖に付けて知るべし。

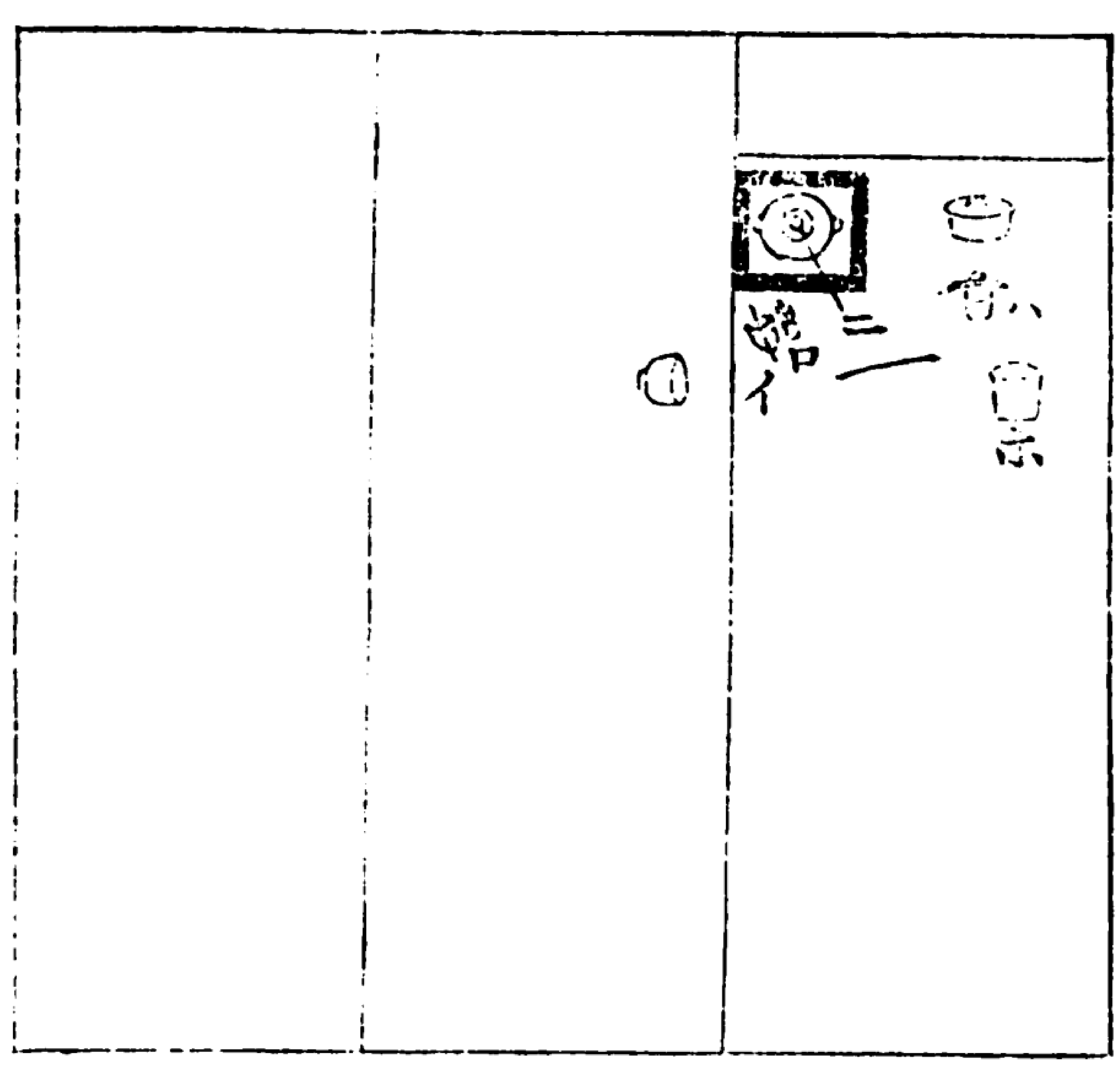
第七圖



イ、水サシ
ロ、茶椀
ハ、棗

此の逆手前に限り流し點と云ひて、居前を客の方へ斜に向て、第八圖の如く薄茶入、茶筅を左の方へ、縁より三ッ目離し、置合す。是も、正直に無レ之居前の如く流して、可レ置、又、柄抄をも引事なく、飜に掛たる儘、點前に係り釜の蓋を取に臨み、柄杓を右にて取り、左手に、例の如く準へ、右手にて、飜の中の蓋置を取り、水指の前指圖の處に置き付け、釜の蓋を取べし。又、仕舞水を指たらぞ、柄抄を準へ、蓋置を飜の跡へ置付け右手にて、柄抄を飜へ、掛くべし。而后に水指の蓋を締て、後に茶碗を左手にて取り、右手を添へ、篤と持直し、右手にて、棗を持ち、一膝廻り、正面に直座して、右手の棗を水指の左の方に置き、左手に持たる茶碗を、右手に持直して、水指の右に置合し、夫より、右手にて、柄杓を取り、左手へ持籠み、又、蓋置を右手

第八圖



イ、薄茶入上ニ茶杓
ニ、茶筅
ハ、釜ノ蓋
ロ、柄杓手ノ往ナリニ引
ホ、コボシ

にて、取左の手柄杓の下へ持添へ、右手にて、飜を持ち、右へ、引廻りて、入事如レ例、又、出て右手にて、茶碗を取り左手へ、持替右手にて、薄茶入を持立て、右へ廻り入べし。又、水指も同じ、亦、客方薄茶入を請ふ事あらば、濃茶の時の如く、棗茶杓を出すべし。

女禮

薄茶出し樣

有住常子

先、臺に据ゑてまゐらせ、下座に扣へ居り、客のみをはらば、すゝみ出で、茶わんを臺に下ぐべし。引方は、いつものごとくなり。濃茶薄茶、一法は、一体禮家のさしづすべきにあらず。茶道のものゝ心えにまかすべし。されば、湯水までの心ゐをいふべけれども、傳書ともに、此の名目ある故、いさゝかわきまへ置なり。

菓子出し樣稽古の仕方

ふち高に盛り、三方、又は、足打に据ゑ、兩手に持出で、正面なれば、右の方、よこ座なれども、上座に、七目に置き、本膳へ向ひ、一すゝみして、前へ引出し、下座へ取のけ置き、其のあとへ菓子を据ゑ、一膝下りて、本膳の足に手をかけ、前に引き、右手をふちにかけ、左手を足の中に入れ持ち、二膝引きて、右に立ち、右足より、三足引き、右に廻り、靜に御勝手に入るなり。又、常に、差上る御茶菓子は、もし箱等にてふたあらば、次の間にて、ふたをとり、持ち出るものなり。

濃茶出し樣

先服紗を四ッにたゝみ、角を向ふにして、茶わんの下にしき、臺に据ゑ、兩手にて、持出づべし。もつとも、菓子を引き、其後にまゐらすべし。此のこい茶と云へるものは、茶會と云ものゝ、はやり出たる頃より、さやうおうのあとにつく習はしとなれり。當時、飯後に、濃茶を出す樣、主人の手前にて、持參の時は、客人手水をつかひ、無口に成りてつゝしみて戴き、是をのむ

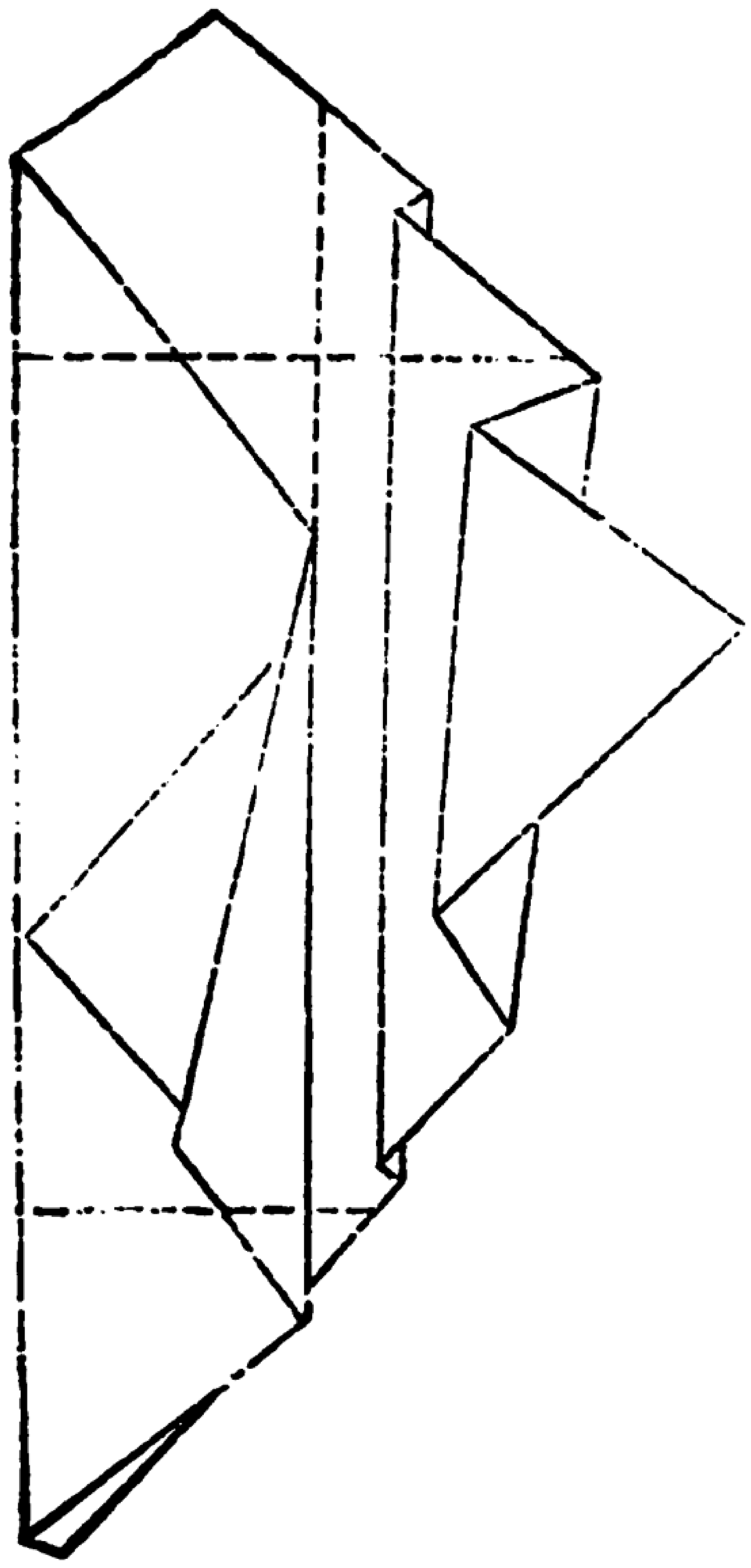
なり。一向茶會の禮のごとし。引樣は、一たん次へ引き、樣子見斗ひ、立出で、いつものごとくにすゝみ出で引なり。

折方

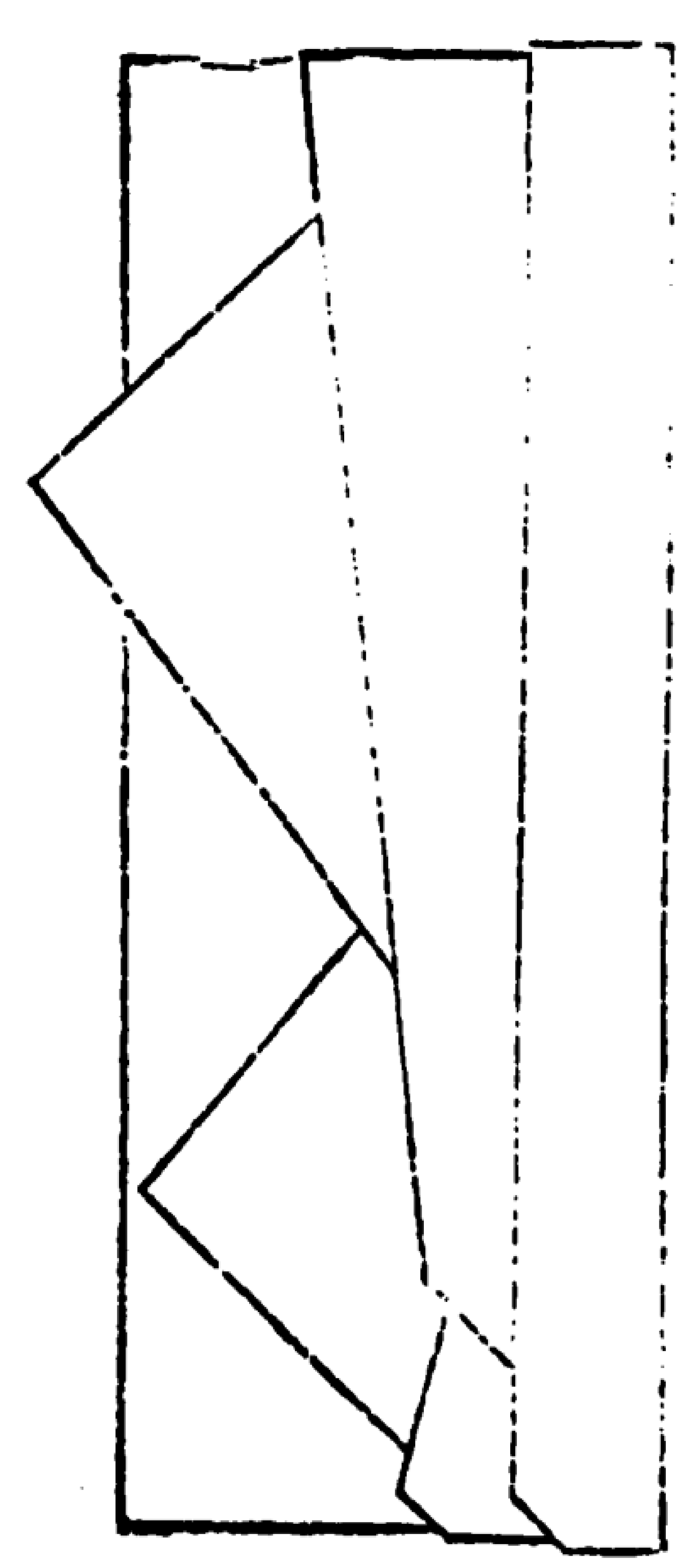
有住くわう子

はさみ包、

第一圖



第二圖



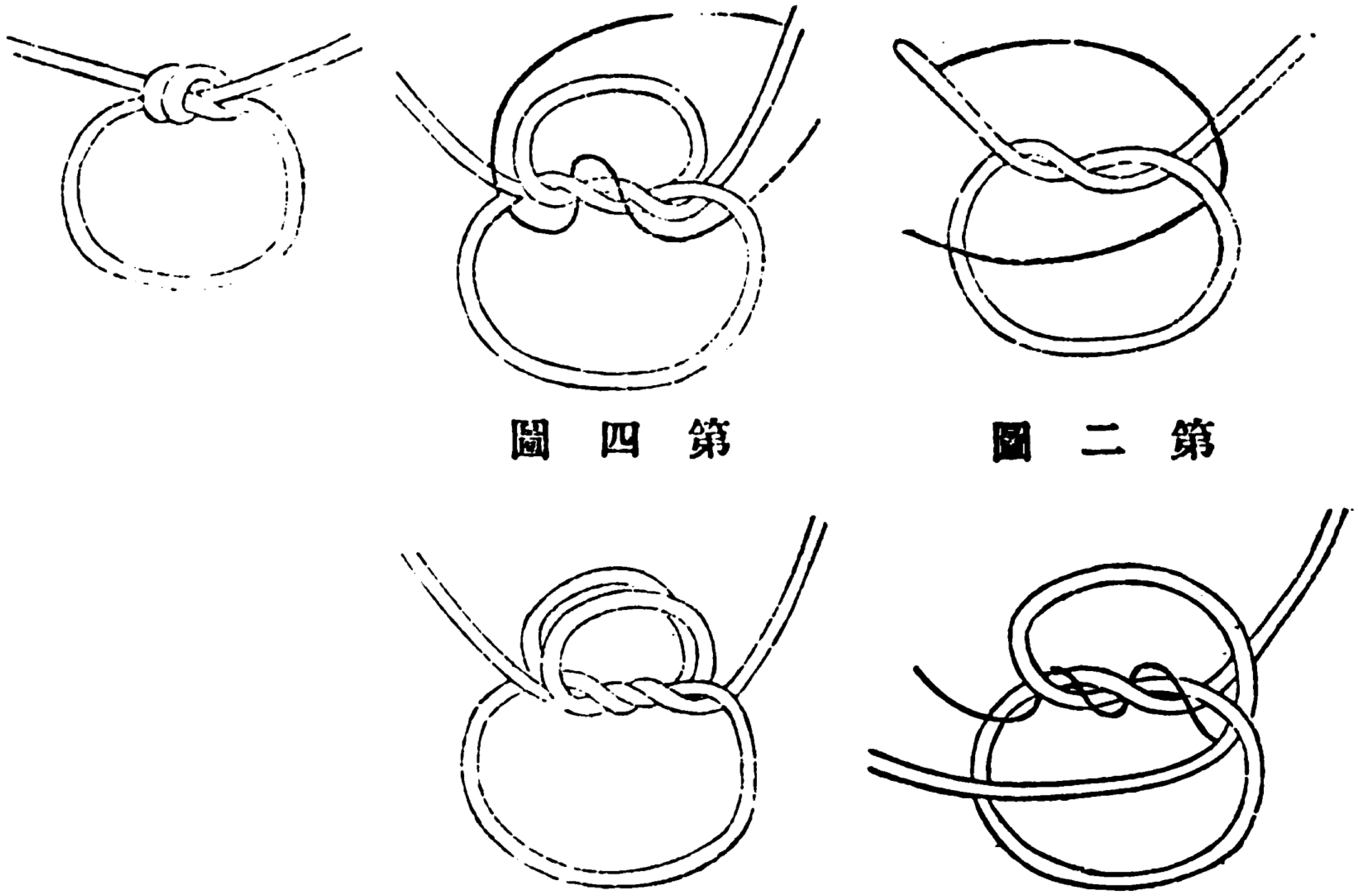
常に用ゐる品なり。包方、此の如し。水引かくるなり。

結方

中島義一

八方珠形

古は、鞭などに用ゐたりき。當節は、男女とも羽織の緒に多くは用ゐる事は、諸人の知る處なるが、又、箱の紐短き時、此の結びか、又は、眞の寶珠結を用ゐて相應するものなれど、至極便利の結び方なり。

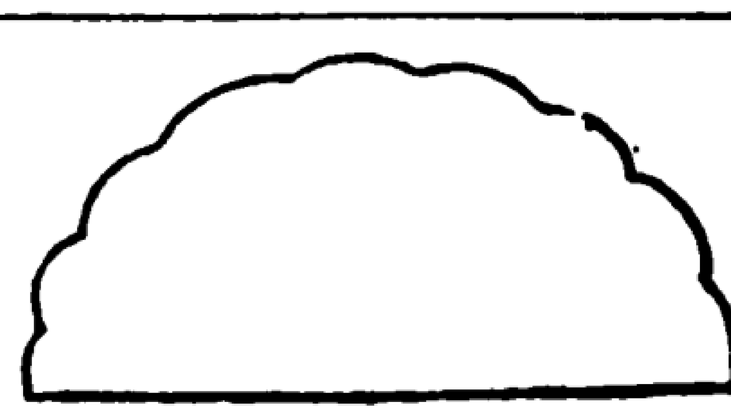

第一圖　第二圖　第三圖　第四圖　第五圖

或説に平人のむらに用ゆとあり。又、一名、草の寶珠結なりと。

たちぬひ

西山たい子

菊水

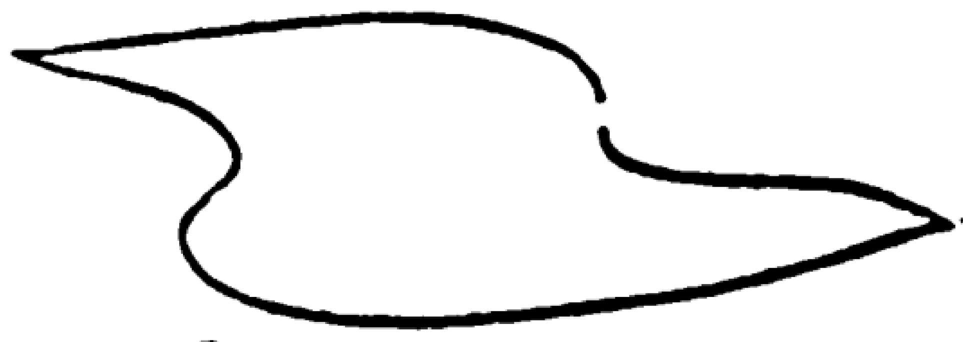


背負ひ守り

まづ厚紙をかやうの形に切り、綿少計を入れ、切を被せ、其上に糸をかけ、即ち*



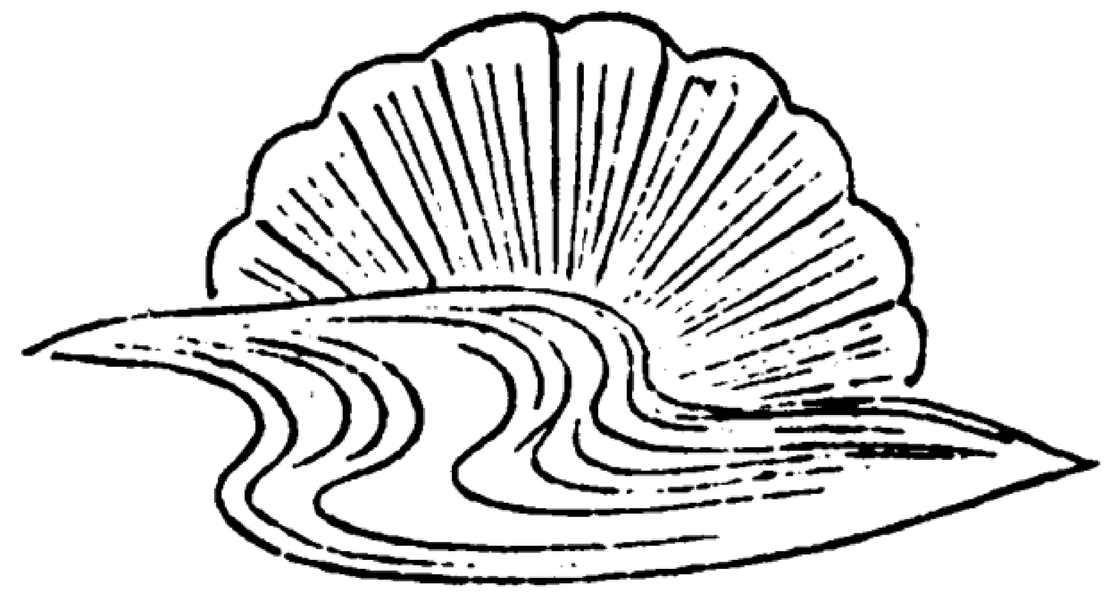
*かやうに瓣の如し、また、厚紙にて、◎



◎水の形即ち、上圖の如くにきり、之にも綿少計を入れ、切を被せ、水の流を墨にて畵き、菊と合すべし。菊は黄、白、紅等、何色にてもよろしく、水は浅黄、水わさぎ、なるべく水色したるものを

よろしとす。また。菊の瓣に墨にて。三すじ四すじ畫きたるよろし。圖を見てわきまふべし。

出來上りの圖

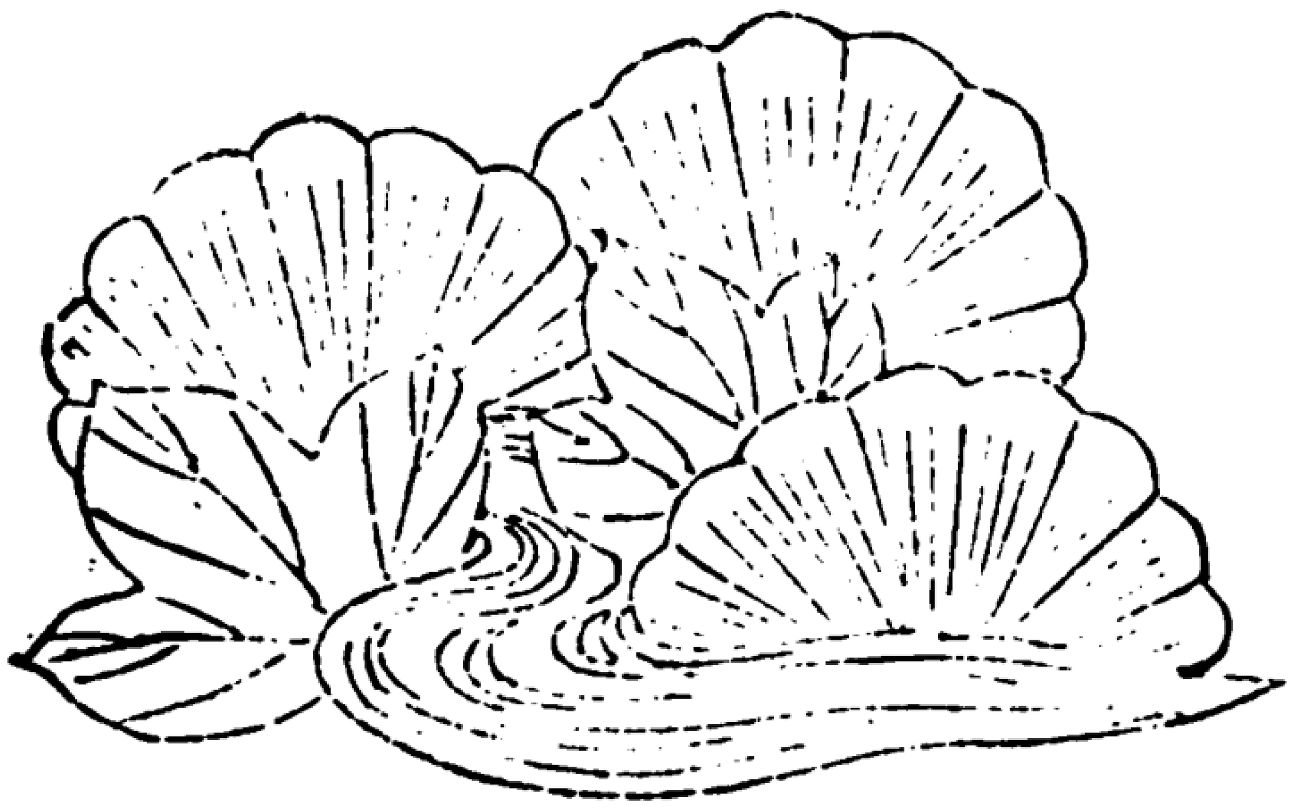


また、今少し、にぎはかしく造らんと思はゞ、之を重ぬるなり。前の如き菊を三つばかりつくり、又、葉の形、即ち、※



の形のものを二つつくり、之には、ごく少しく綿を入れ、又、水を前の如くつくりて組み合するなり。圖を見て推すべし。

その圖



但し、重なりあふ所には、綿をひくゝ入るべし。總じて、何物にても、重なる所はひくゝすべし。花の色は、いろ〳〵に見立て、なるべく、うつりをよくすべし。葉のすじは墨、畫具にて畫きたるもよろしく、又、丁寧に。糸にてかゞりなど、まことにうつくしく、よき細工となるべし。

だいどころ

漬物作り方

淺漬

淺漬は、まづ大根を洗ひ、葉と根を切り去り、四斗樽、一個に、鹽二升、糀二升の割合にて、漬込べし。壓石は、なるべく、貫目重きをよしとす。又、出したる度に、壓石をおくべし。壓石ゆるむ時は、味變るものなり、但、麹なき時は、糠にて漬るもよろし。

切漬

大根の葉を切はなし、長さ二寸程にきり、是を、拍子木にきり、葉は一寸程にきり、鹽麹を能程にふり、漬

込、十四日間にて、食すべし。

蕪菁の千枚漬

大蕪菁を、薄く輪切になし。一枚つゝ、鹽をふり、桶に漬け、壓石をおき、上部に、水のあがるを見て、其の鹽水を捨て、別の、器にうつし、唐辛子、二ッ位に切り、間に投れ、又、壓石をおき、四五日間にて、食すべし。

澤庵漬

澤庵漬は、先づ大根を洗ひ、葉と根を切はなし、日光に干し、縮緬皺の、よりたるを、度とし、鹽と糠とを變せ合せ、四斗樽の底に、前の糠を敷、其上に、大根をならべ、其の上に、糠をふりて、だん／＼に、漬込むなり。其の割合は、極暑をも越さしむべきものは、大根百本に、鹽七升、糠三升、次は、鹽六升、糠四升、次は、鹽五升に、糠五升、次は、鹽四升に、糠六升、次は、鹽三升、糠七升、次は、鹽二升に糠八升、是は、最も薄鹽にて、凡四五十日も經れば食するを得べし。

菜花園

冬の草木くさ〴〵（二）

○枇杷の花　白き花にて、九月より咲きはじめ、本月盛にて、臘月までもある花なり。葉は四季ともに散らず、實は五月なるなり。花の頃より、實の熟するまでの間、凡、十月ばかりなる故、自然とよく熟して味ひよし。

狂　　遊野

くものすにいとをかけてぞひわの花
　はらり／＼と落る木からし

○室の梅　室咲、室の温氣をかりて時ならざる花をひらく。

俳　　李四

室を出で面ふせなり花の色

○榧の花、木を烟として、蚊やりとするゆゑにかやと

いふ。油をとる物は、いぬかやにて、食ふべからず。小木にて、よく實を結ぶ。

俳　　　立　市

いつはらぬよしの丶雪に榧の花

同　　　山　川

山主が榧の花見や霜の朝

○散紅葉　紅葉散、葉紅散りて物を染むる冬なりと御傘に出たり。

哥古今

この川に紅葉は流るおく山の
雪けの水ぞ今まさるらし

同千載　　　賴　政

都にはまた青葉にて見しかども
紅葉ちりしく白川のせき

○麥蒔　漢土は、秋種を下せとも、本邦十一月頃に下して五月頃、黄熟す、是、亦、早中晩の異有り。日本後紀稱德帝大臣吉備に勅ありて、天下の百姓に大小の麥を種しむといへども、其の時をうしなひ、遂に不成、其の後嵯峨帝、弘仁十一年、冬嗣公に勅ありて、今より八月に蒔べしと、是より時を不失といへり。

俳　　　朔　平

むきまきや留守には目くら一人なり

○枯蘆　詩には寒蘆といふ。

哥　新古今　　　西　行

津の國の難波の春は夢なれや
あしの枯れはに風わたるなり

同　　　成　通

ふゆふかくなりにけらしな難波江の
あをはまじらぬ芦の村立

同　同　二條院讃岐

難波がた汀の芦は霜がれて
なたの捨て舟あらはれにけり

○枯柳　枯柳は、冬柳と同じ心にて柳のかれむとも枯柳ともよめり。

歌　落葉

霜がれの冬の柳は見る人の
かつらにすべてもえにけるかな

○落葉　諸木の葉風にちり行くをいふ。又、木の葉のちり落たるをもいへり。立田川には流もせきあへぬばかりちりみだれぬともいへり。

○冬木の櫻、かへり咲の花にはあらで、冬咲くさくらなり。

○雪の下　花は四月なり。鴨足艸と同物なるべし、葉は、冬も盛んなり。雪といふ名によつて、李とするり。

○柊の花　和名ときはいらもき、秘藏に出づ。いらとは苛なり。葉に刺有る故にいふ。

十一月手入すべきもの（２）

收種すべきもの

茶子　櫨　薏苡仁　橘　柚　柑　橙　梔子　金橙
橄欖

澆灌すべきもの

牡丹　芍藥　水仙　山茶　石榴　揚梅、枇杷　橘
橙　柑　柚　香櫞　栗

培壅すべきもの　凡て、寒を畏るゝ花木は、根上に皆土を壅ふべし。

整頓すべきもの

菖蒲　一船旗倶に窖内に藏すべし。夾竹桃虎茨は、倶に温室に入るべし。芙蓉の條は、長さ尺許りに斫り、藁に包み、向陽の土坑内に藏し、來春二月の頃出して扦すべし。

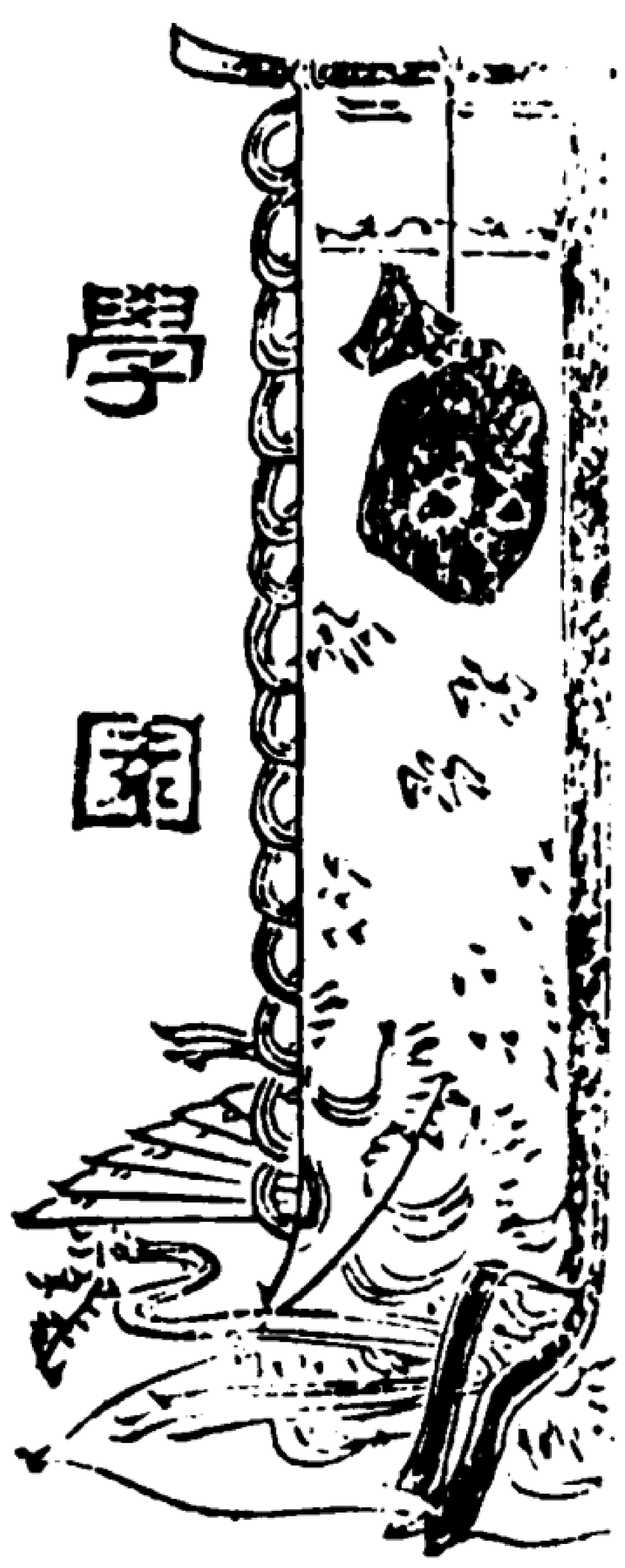
松竹躑躅の類は、枝條は繩にて卷き、或は釣りて、雪の爲に壓折られざる防ぎを爲すべし。

來春移植すべき、諸般の果苗、又は、砧樹は堀揚げて、其の命根を截り、根端を剪み、假植し置き、來春植出すべし。

栗を長くかはらせぬ法

是は、誰も、御存じの事と思ひますが、こゝにたやす

い仕方がありますから、一寸申します、先つ大いところを御買なされて、少しも傷のないのをよりて、水に漬けまして、五日ほどたちましたならば、とりわけて、一日ほど、天日に干し、川より乾きたる砂の、ごく細き所をとり來り、先つ、桶のそこに少々しき、其の上に、栗を一つならべになし、又、砂を栗の上五分どかり敷き、この樣に順々に滿つるなり。して濕氣のなき所に置けど、翌春まで、極安全なり。何時にても、入用の折上より取出して差支なし。



學園

秀歌集（四十九）

塩井正男

いかにせむこぬ夜あまたの郭公
またじと思へば村雨のそら

○これは、藤原家隆朝臣の歌なりき。○いかにせむ。俗にどうしやうと思ひまどひたる心なり。此の句は、一首の末にをきて見るべきこゝろなり。時鳥をまたじとおもふこゝろと、をりから村雨の空にて、ほとゝぎすの鳴くべきけしきにて、また待たるゝこゝろとの二つにて、どうしやうかと思ひまどひたるなり。○こぬ夜あまたの。來たらぬ夜の數多になれる時鳥にて、待てども〳〵、時鳥は來たらずしてのみ、數多の夜をかさねたるこゝろなり。○またじと思へば。モー待つまいとおもへどなり。ほとゝぎすの待てどまてど來たらぬゆゑに、モハヤ待つまいとおもふとなり。こぬ夜あまたのほとゝぎす待たじと思ふといふ詞もこゝろも、すべて彼の「たのめつゝこぬ夜數多になりぬれど待たじとおもふぞ待つにまされる」といふ歌をとりたるにて、それは、待てども人の來ぬをうらみての歌なり。それを、今待てども來ぬ時鳥

の上に取り用ひたるなり。○村雨の空。村雨の空にて、時鳥の鳴くべき空なるに、もしや來るかと、又心よわく待たるゝといふ意なり。それを、たゞに村雨の空といへるのみにて、その意をふくめきかせたるなり。村雨とは、和名抄に、白雨(和名無良左女)とあり。一叢づゝ強く降りすぐる雨をいふ。

○一首の意は、待てども、ほとゝぎすは、來ぬ夜數多になりたれば、モー今宵は待つまいとおもへば、折りから空は村雨の降りかゝりて、ほとゝぎすの鳴くべき夜のけしきなるに、もしや今宵こそは來たらめやと、また心よわく待たれもする。どうしやうかといへる意にて、來ぬ夜數多のつれなさは憎く、モー待つまいともおもひ、また、をりから村雨の空にて、さすがに思ひ捨てがたく待たれもするに、どうしやうかとおもひまどひたる心なり。古歌を取れるさま、誠に面白く、本歌どりの妙をつくし得つ。その意匠もおもしろくして、自からおだやかに、その詞づかひも、おもひきりて、花やかにして、なほ、すなほに含蓄多き語句の遣ひざまなど、誠に其の道を得たりりといふべし。

○

我が心いかにせよとて時鳥
　雲間の月のかげになくらむ

○これは、皇太后宮太夫俊成の歌なり。新古今集夏歌の部にあり。○後徳大寺左大臣家に十首歌讀み侍りけるによみてつかはしけるなり。○我がこゝろ、わが心をといふ意なり。○いかにせよとて。俗にどうしろとてかといふことなり。月下ほとゝぎすのなくね、いよ〳〵あはれの身に染みて、さま〳〵おもひ亂るゝ感情の、限りもあらず、やる方なきばかりなるより、そも〳〵、わがこゝろをどうしろとて、時鳥は月下に鳴くのかと、わざといぶかりとへる心もちなり。貫之が家集に「足曳の山邊に居れば白雲のいかにせよとかはるゝときなき」といへるいかに

せよとかに仝じ。これにはわがこゝろを略したれど、これは白雲のたえずかゝるに、いよ〳〵おもひ亂るるこゝろのやる方なきよりいへるなり。○ほとゝぎす、ほとゝぎすはといふ意に見るべし。○雲間の月のかげ。雲間の月の光りなり。雲間の月の光りに時鳥が鳴くとは、をかしきやうなれど、このにといふ詞は、にて、とか故にとかいふ意にはあらずして、その時に、或は、その中に、それと共にといふ如き意にて、二つの物の一處にまじはる時に用ふる詞にて、雲間の月のおぼつかなくあはれに光りわたり、をりから、時鳥の鳴くけしきなり。あはれなる月下、あはれなるほとゝぎすの聲するさまなり。なほ、春の巻に、能因法師が「山里のはるの夕ぐれ來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」といひたるにに仝じ。本居翁が、これを難じたる、心得がたし。また、石原主が月のかげにといふも、月にといふもおなじことなりといはれたるも、なほいひ足らじ。にの意、よく見わくべきなり。○啼くらむ。鳴くのであらうかといふことなり。

○一首の意は、そも〳〵、時鳥は、我がこゝろをどうしろというてか、雲間の月のものあはれに光るが中に、さもかりかなしげにさへ鳴くのであらうかといふことにて、雲間の月の光り、ものあはれにおぼゆる夕ほとゝぎすのなく音、あはれに身にしみて、いよ〳〵思ひ亂るゝ感情のやる方なきをいへるなり。我が心いかにせよとてと切にうち出て、雲間の月のかげになくらむとあはれなるけしきを、なだらかにいひとゞめたる、調の緩急よく整へ得て、こころは切に、けしきはいうに、あはれによくかけあはせたりといふべし。本居翁は、此の歌、初めの二句の意の切なるにあはせて、下はさしもあらず、上下かけあへりともきこえずといはれたれど、下は優にあはれ深きけしきをのべ、上はそれによりて、動く感情の切なるをいへるにて、自からなる調にして、

豈かけあひなしといふべきかは。いうなるも、急なるも、其のいはむとする所に從ふ事にして、さわりてこそ、いうにも切にもあるべき詩の品を得べきならずや。

漢文學講義（二十二）

大林弘一郎

十九、圓山應擧　　菊池純

これは、國史畧三編の中より拔き出でたるなり。純の小傳は、さきに、記し出しれけり。

應擧。初名仙嶺。後改應擧。字仲選。稱主水。丹波穴太人。早歲入京師。學畫於石田友汀。嶄然見頭角。其畫不必泥規矩。直以造化爲粉本。別開生面。凡花卉鳥獸。皆寫其眞。設色之精。意匠之妙。剴備周密。不遺餘力。遂爲一代宗工。名喧都鄙。蓋暗學西洋畫法。不作墨影。當時人皆爭倣之。平安畫格於是一變。

此の一段には、應擧の畫風の、別に一派をなせることをのべたり。

應擧は、初の名を仙嶺といひ、後に、應擧に改めたり。字を仲選といひ、主水と稱したり。生れし所は、丹波の國の穴太村なり。年若くして、京師に來り、畫を石田友汀の許にて學びたりき。(こゝに、友汀とかけるは幽汀の誤なるべし。そは、扶桑畫人傳などにも、石田幽汀の子を友汀といへる由を記し、又、幽汀は、應擧の師たりし由に見えたれぞなり。幽汀は、京の人にて、名を叔明といひ、初、鶴澤探鯨といへる畫家に就きて、狩野の畫風を學び、後に、一家の畫風を開き、頗、緻密なるものを巧にせし人なり。應擧が名を、四方に著すに及びて、嘗て、その師たりし故を以て、幽汀の名も海内に顯れたりきとぞ。天明六年五月廿

五日歿しき。）

應擧は初藤原姓を唱へ居たりしが、後には、源氏に改めたりき。又、仲均、僊齋、鴨水漁夫などの號もありき。

さて、石田の弟子となりて、修行を積み、大に、人にすぐれ、頭角をあらはしけるが、その畫ける所の畫は、必しも、畫の法則ばかりに泥みかゝはらずして、天然の實物を以て、手本となし、別に、一派の風を開けり。規矩とは法則のことなり。規は圓規にて、圓きもを　作る定木なり。矩は、さしがねの如く方形の定木なり。印を捺すものに印矩あり。即、その形のさしがねに似たるよりいへるなり。造化とは、天地の萬物を造作し、變化せしむるよりいへる語なり。即、天然物をいふなり。粉本とは、畫の下書、模本等をいふなり。即、ひながたなり。

花鳥の圖など、皆、實物を寫生し、その彩色の精密なると、意匠の巧妙なるとは、その畫を見て知るべし。剴備周密とは、その用意の緻密にしてぬけのなきことなり。餘力をのこさずとは、別に力を用ゐるべき餘地なきをいふなり。かゝれば、應擧は、遂に、一代の宗工とも仰がれ、畫工の宗として、名を都鄙にあげたりき。

應擧が寫生によりて、一派の畫風を開きしは、もと、ひそかに、西洋畫の法を採用して參考に供し、たゞ、墨影、即、陰影を施さずして、日本畫と調和し、こゝに、圓山派を起したるなり。されば、當時の人は、その新しき風を喜びて、爭ひ競ひて、之を摸するに至り、平安の畫風これより一變したりきとぞ。

嘗欲レ畫ニ睡猪一。未レ審ニ其狀一。有下一老婆自ニ矢背里一負レ薪來者上。因叩ニ其狀一。婆曰。不レ記也。他日有ニ睡猪一。應ニ速報一レ之。君宜ニ來觀一。居月餘。婆急來告曰。今旦有ニ野猪一睡ニ臥竹中一。仲選大喜。

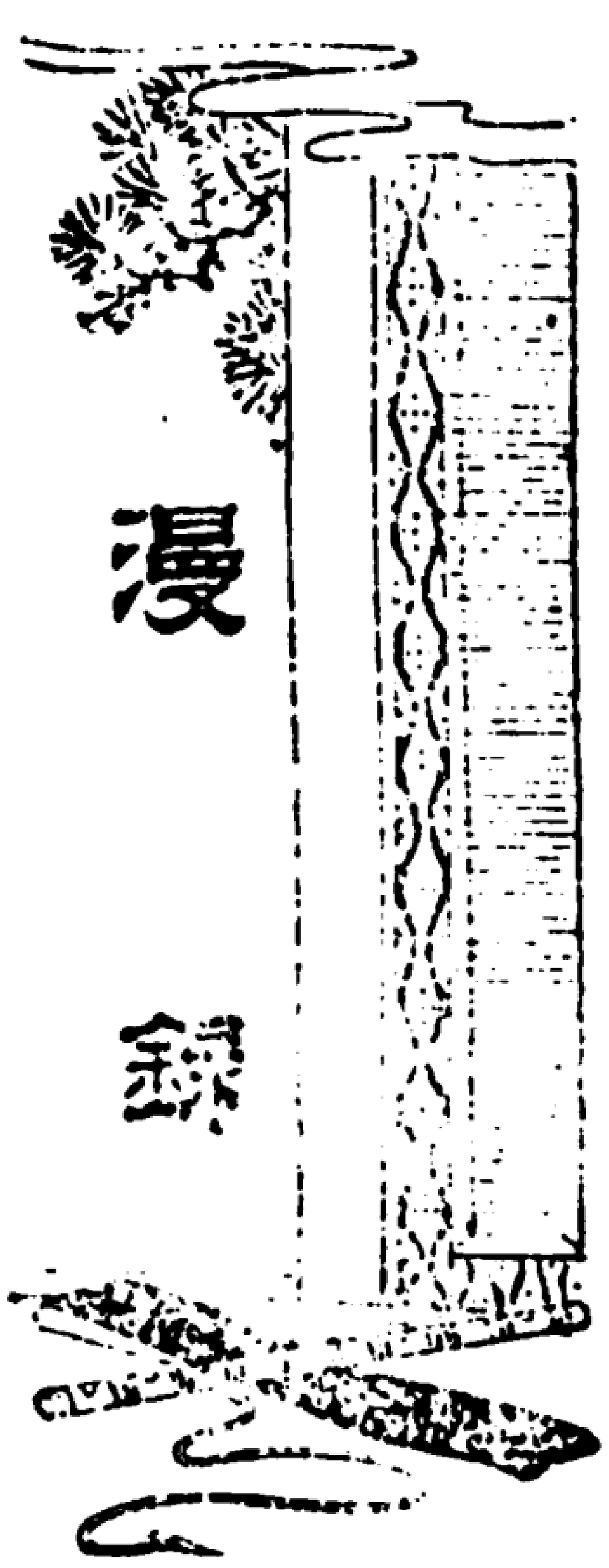
拉二三門人往觀細描其狀。自以謂能寫其神。會有老農夫自鞍馬來。乃出圖示之曰。何有可議乎否。農夫熟視久之曰。畫則佳矣。獨惜其未眞耳。仲選詰之。農夫曰。此死猪耳。非生猪也。至若生猪雖睡時頸毛怒張。有可怖之狀。此圖雖佳。未見其能然。故曰。此死猪耳。非生猪也。應擧感悟。因詳問其狀。更寫之以示農夫。農夫抵掌曰。是眞猪也。後老婆來曰。前日睡猪。閲一夜死。仲選曰。果然。因語以農夫言。

此の一段の話は、應擧の技術に熱心なりしことをあらはさんとてわげたるなり。この事實は、瀧澤馬琴が、著作堂一夕話の中にも見えたる名高き話なり。

此の時、應擧、眠れる猪をゑがかんと思へども、未、そのありさまをくはしく知らざりき。矢背の山里(大原の近邊なり。)あたりより、薪を頭に戴き賣りに來れる老婆について、その有樣を尋ねければ、老婆は「常々、心がけぬ事なれば、覺え申さず。その内に猪の睡れる時あらば、早く報じ申さん。その時、先生來りて見給へ。」といひしが、その後一月ばかり程經て、老婆、いそぎ來り申して曰はく「今朝、猪の竹藪の中にて睡れるを見出でたりき。」應擧大に喜びて、門人、兩三人を引きつれて往き、細にそのさまをうつしかへり。之を畫きて、自、心の中に無比の上出來なりと思ひ居たり。たまたま、鞍馬の山里より來れる農夫あり。應擧、猪の圖を出し、農夫に示して、いふやう「かくても、なほ、評すべき點あるか。」と。農夫は、つらつら、この圖を見て、さていへらく、「畫としては、難ずべき所はなかるべし。ただ、猪の眞物と見えぬは惜しむべし。」と。應擧、之をききて、心得ぬことと思ひ「何故ぞ。」と農夫に問ひければ、農夫答へていふやう「こは死にたる猪に

て、生きたる猪のすがたにあらず、生きたる猪は、睡れる時にも、頸のあたりの毛はさか立ちて、怒れるさまをあらはし、恐るべき様子あるものなり。されど、この圖には、さるけしきは見えず。畫は工なれども、眞物にあらざれど、死にたる猪にて生きたるにはあらずと申しつるなり。」と。ありしかば、應擧も、感悟して、詳に、其のありさまを聞きおき、更に寫し改めて、また、農夫に示しけり。こたびは、農夫は、手をうちて、賞して曰はく、「かくてこそ、眞の猪なりけれ。」とて感じけり。その後、老婆來りていふやう、「前日の猪は、病にかゝれるにやありけん、一夜をへて死にき。」と。應擧いふやう、「果して、さかありしならん。」とて、さきの農夫が話をなしけりとぞ。（未完）





神國女訓抄（五）

山口道貫

然るに、女に限り、罪深きことは、何事なるぞや。惡をなせど、男も、罪深く、惡をなさゝれば、女も、罪なし。罪は、つもるといへる辭にて、我を善なりと思へど、覺えず、日々惡事のつもり罪となる。故に、吾神道に、中臣三種等の秡を以て、身心を拂ひ清めて、罪咎を悔い、前非を改め、根元の清淨心にかへることを修行すれど、自己の神靈、天地神祇に感通し、願として成就せずといふ事なし。故に、善を積みて、高天原に昇り、惡を積めど、底根の國に沈む。神代のむかしも、大日靈貴神は、女神にて御座せども、御徳すく

れさせ給ふゆゑに、天柱を以て、上天にのはせたまひ、素佐鳴尊は、男体なりといへども、天上には、八つの大罪を犯し給ふがゆゑに、底根の國に逐はれ給ふ。人間またしかり。男子なりとも、罪あるぞ、陰に沈み、女子なりとも、神に仕へ奉り、常に秡ひ淸ければ、高天原に昇る。只、各々心身の淸きと濁れると、行迹の善と惡とによるのみ。何ぞ、男女の形体を以て、論ぜんや。願くは、いさぎよく、神祇の道を貴んで、陰濁をはらひ、きよめて、陽生を求め、女人を嫌へる佛法を去つて、女を愛し給ふ神道に歸せよ。萬國に優れたる女王國に生れ、貴き女体を得て、却て、自賤んみ、いたく忌み嫌へる佛菩薩に取りすがると、口惜く未練の事ならずや。吾天照太神を始め奉り、天神半女神にておはしまし、皆、常住不變の高天原に鎭り給ふ陰陽二柱の神義より、出雲八重垣の妻籠、天孫の沖津鳥の神詠等、みな、夫婦和合して、子孫繁昌の神掟、是ぞ誠の天地妙有の大道なり。彼の陰陽偏僻のをしへ、千代かけて契る縁で夫婦のなさけも、吾神道にあらずんば爭か、其の願を達せんや。此のことわりを能くわきまへて、神祇を尊びまつりて、萬事の事、正直を本とし、わけて、我、夫に二心なく、操正しくまもりたらは、天神地祇の神意に叶へ、家門繁昌、子孫長久にて、遂には、高天原に飛昇り、天祖の御許につかへ奉りて、常盤堅石の神遊びかぎりなき代の樂をなさんこそ、仰ぐべく願ふべき事とぞ。（をはり）

續人名（八）

釋法忍

家督の男子なく、むすめに、聟をとりて、家をさうぞくすること、世上に數多あることなり。されば、女の道は、たとへ、わが家へむかへたるをつとなりとも、わけへだてなく、隨分大切にうやまひしたがふべき事なり。しかるに、世上のありさまを見侍るに、家に付た

る娘は、大かたならず、入聟をそりやくいたし、うやまひしたがふ心なく、宵には、さきにいね、朝はおとよりおき、髪けはひも、おのが心にむかねど、幾日も取みだして居、なにかに付け、をつといけんをすれば、いらざる入聟の分として、とやかくやかまし、此の家はわが家なればねせやうと、おこさうと、こなたのこころ次第なり。それがいやなら、出ていつたがよい。などゝ、あられもないこと、たとへいはずとも心にはおもふなり。是、大成ひがことで、一つとして、女の道にあらず。すべて、聟養子ともに、女房は、その親より貰ひ家督は、夫婦へ讓られぬれば、娘の家督ばかりにもなく、そのうへ、われら、をつとにしたがふ身となれば、すゑは、かねて、わが身ともにをつとのものなり。されば、家の仕置、表向のつとめともに、家につゐさればとて、女の身として、いさゝかもなるべきや。すべてをつとのはたらきをもつて、身上そうぞくし、家內を養ふは、いかばかりをつとの恩義なり。

また、御大名樣、御はたもと樣がた、その外、御直參の御方樣かたへ、被下置候御知行、ならびに御切米、御扶持かた、御加增等も、みな、御家督、御相續の御方樣へ下され、その外、御家中がたとて、同前にて、御用向仰付らるゝも、右、同斷なり。しかれど、人のつまとなりては、そのをつとを、なにほども大切にいたし、かりにも、をつとの心にさからふべからず。たとへ家に付たる身なれども、私の志を出し、女の道をうしなふべからず。ずゐぶんまことをつくし、をつとの心置なきやうに取はからひ、その身をへりくたり、したかひうやまひ、夫婦むつまじく、子そんはんせうにさかえ候こそ、いとめでたき御事にておはしまし候。

女のこゝはおろかなるものから、ことさら、上下ともに色にはさそはれやすく、ねだみそねみ、りんきしつとのおもひありて、われながらもおもひとゞまりがたきものにや。これより、もろ〳〵のあくねんおこり侍

るにてれはしまし候。か丶ることをしのびとげざる時は、家もみだれ、をつとにもうとまれ、あへなくすてらる丶ものにておはしまし候。されば、いなどといふむしは、ねたむ心のなきゆゑに、子孫のおほきことをたとへて、詩經と申すふみに、婦人の物ねたみをいましめおはしまし候、むしすらかくのごとし。いかにいはんやにんげんにおいてをや。むしをたとへて、しつとのいましめをうくるは、女の身のいかばかりはづかしき事にあらざらんや。これらのことを、よく／＼おもひはかり給ひて、かならず／＼りんきしつとの心をさり給ふべきことゝかんえうにておはしまし候。

つら／＼、世のありさまをかんがへ侍るに、上つかたはしらず、世上の女の心はさだめなく、おかしきものはなく覺え侍りぬ。まづせけんのやうすを見き丶侍るに、女のをとこにまみえ、あいさつもしか／＼なりがたく、おもはゆげに、あさかはのひなたをいとふ風情なるも、をとこさへはづかしき事をはぢらはず、みめかたちいとやさしきも、心のうちどこやら、いやな所あり。人になじむもはやければ、さめるもはやく、すこしの事にもおどろき、ちいさき虫にもおそる丶かとおもへば、又こはがらぬことあり。いたつてかはゆがるかとおもへば、さいてのむほどにくかり、かなしむもつよけれど、かなしまぬもつよし。泣も、人にすぐれ、わらふも人にまさる。したしみもふかければ、うとくなるも明なり。かしこきやうにて、あさはかにたのみある樣にて、たのみなく、だまされやすうして、よく人をたふらかすま丶、うき世のばけものといふは、女なり。すでに佛も外面似菩薩、内心如夜叉と說給ふ。又、世のことわざにも、女の心と、秋の空は、夜の間に七度かはるといひ。七人の子はなすとも、女に心ゆるすなと申侍るなり。しかし、かくいへばとて、女は、一とうに、かくわるべしといふにも侍らはず、和漢ともに、古今貞女あり、賢女あり、義婦あり、孝女あり。これらは、日をおなじくしてかたるべからず。たゞよ

きも、おしきも、みちならぬ人へのいましめと御らんくだされたく候。

さゞこし草（六）

故　兒島頤齋

父のひとへに弟をあはれみ侍るに兄たるものの心得あるべき事

親の心により、兄を悪み、弟をあはれみ、或はおろかなる子はかはゆくして、心さまあしきものは、却て、深く愛し、何によらずこのものにのみわたへたく、思ふものあり。或は、他へ嫁しつけし娘の貧きをかなしみて、わが家のあるなきをかへり見ず、嫁子にもかくして、ひそかに袖にしておくるもあり。兄と生れ、家をつぎぬる身は、殊更心をつくし、父母の常々愛して、この子に家をつがせたし、或は、此の子にこれほど與へたしとおもふ風情と見ゑ、心のそこをくみて、露うらむる氣色なく、何となりともことよせて、こなたよりいひ出して、彼に家をゆづり、是に財をわけて、父母の思ひをやすめ、ねもころにもてなすこそ、子たるものゝ道なれ。

安永のころ、備後のくにに、五助といふ人あり。母は、繼母にて、其のうめる一人の子あり。母、つねに弟を愛し、五助を、ふかく悪みて、あしさまにいひなす。父も、つひに、其のことを信じて、ともにきびしくあたりけり。五助案じわづらひ、村隣なる孝子なにがしにかくと語りければ、何かし、懇にをしへけるは、父母、かくまでにくみ給ふは、多くは、家を弟につがせたくおもひたまふゆゑなるべし。とにかく、父母の望みにしたかひなば、不和なる事はあるまじといへり。五助、大きに悦び敎のごとくにして、その身は出で、外に家居せり。それより後は、何の障もなく、却て、實子よりも親みふかくなりぬ。むかし、北條泰時は、父、まかりてのちも、父、つねに弟を愛したりしゆゑに、

所領をわかつて、父の志しにかなふやうにと弟へ、多くあたへたりとなん。況や、父母の世にありて、弟を愛したまふをしりながら、いかてかそれに家をゆづらざらんや。泰時の孝狀。其のころ、政をきける二位の尼君も、ふかく感して、泪を落し給ふとなん。

主從心得草

訪諏　忠元　寄贈

あまい親子供かあいと氣儘させ
　老てののちの今は後悔

白き歯を見せぬ親こそ戀しけれ
　口をすぼめて世を渡る身は

チヨイ〳〵ト恥しめられて恨みたる
　人こそ今は知識なりけれ

是等の歌の心を、よくしつて、子供の躾を致すべし。無量壽經にいはく、父母教誨すれども、目を怒らして教を受けず。譬は怨家の如し。子なきに若ずとあり。此の心は、父母が行儀作法、一切の善事を、教ふれども、一ッも受ずして、皆逆ふ。たとへば、怨敵のごとし。子はなきが大いによしといふ事なり。かやうな子は、いくらあつても、親の爲には、一ッもならずして、苦勞をかけ、損をかけ、難儀をかける子ばかりなり。子はない方が、大いによいなといふ事なり。是に間違なし。かやうな惡性者でも、親はかあいがるけれども、他人は、つむをはいていみ嫌ふ。然るに親は、無性にかあいがり、ひゐきをするなり。あれは、あのやうに金銀を遣うやうな男じやなけれども、連がわるいからして、あのやうにどうらく者となつた。氣の少い内氣者にて、外へも出ぬやつなれども、隣のむすこが誘ひ出して、あのやうにどうらくにした。友達のわるいもいかぬ者じやといふ。又、向ふの方では、こちらのむすこを誘ひ出して、あのやうなだうらくにした、憎いやつじやといつて居る。兩方の親の、手前のむす

このひゐきばかりして居る。夫故、川柳が發句にも、兩方で連がわるいと親父いひトよんだも間違なし。實は、どちらも誘ひ出しはせぬ。誘はずとも、隨分と自分に飛出してゆく。よい事には間に合ぬか、わるい事には急度、一人前はつとめする男なり。人の飛ぶ所へは、何處へでも飛ぶ者共なり。他人は爪はじきして憎み嫌ふに、親達は、惡徒むすこのひゐきばかりして居る。親たはけに相違なし。我子の惡をしらずして、我子はよいが、人の子はわるいと計り云うて居る。大馬鹿といふべし。歌に

　我子をはよしとほめるもおやのぐち
　　ほめたでないの多くわるもの

とよめるも間違なし。おやたる者、我子を、あまりほむべからず。我子は、近所近邊の惡徒者の頭なり。夫をしらずに、あれは、内氣者、正直者にして、外へ出る事をきらひなりと思ひて居るは親だけに相違なし。我子の事は、少なりとも目が見えぬ。かやうな盲目にては、子供のしつけは出來ぬ筈なり。おやが智恵がなくて、あまいからの事なり。きびしいおやに出合ましては、中々だらうくも、不埒も出來る者にあらず。若わるければ、早速追出して、よい人を見立て跡をゆつる。是には、叶はぬからして、子息も、辛捧を致し、家業を出精して、親の名跡を繼やうになる。是誰か、仕合にや、子息の仕合は、又、親の仕合ぞや。何卒、子供のしつけをひどく致し、親子共に世の中を安心に暮すべし。世間の親たる者、此道理ある事をよくしるべし。

○司馬温公がいはく、父きびしけれど、子に功あり。父の子をきびしくせざるは、父のあやまりなり。師の嚴肅敎へざるは、師の怠りなり師父きひしくして、子の覺えざるは、子の科なりとあり。父きびしくければ、子に功あるに間違なし。父はきびしく、しつけを致すべし。

しつけなく氣隨氣儘に育てたる

子供の親はいつも苦をする
自然と親をたいせつにする
無學でも親がきびしくそだつれば

何卒惡人にならぬやう、善人になるやうに育てる、親の役なり。無性に金銀を溜めて、子にゆづるを、親の役とはいはぬ。唯、仁義禮智信を、よく守り、巳らが家業を出精するやうに敎ふべし。人の物を無精にむさぼりて、子に金銀を澤山に渡したればとて、夫で、一生遊んで居て、安心にくらすといふにはいかぬ。若、親のゆづり計りを賴みにして暮す子あらば、親のゆづりを失ひて、末にはなんぎするやつなり。（以下次號）

敎梯抄（十九）

新葉集雜下
正平八年うへのをのこども題をさぐりて、千首歌よみ侍りける次に寄日述懷をよませ給ける
後村上院御製
くもらじと思ふこゝろよおなじくは
はや日の本のひかりともなれ

夫木集雜
述懷のこゝろを　他阿上人
なげきには歎きはなきをよろこひを
もとむればこそ歎きとはなれ

同　同
寄枕述懷
後嵯峨院御製
わか肱をまくらにしつゝおもふかな
げにたのしみはこれに過じも

拾遺風体抄
寄筏述懷　公雄卿
いかだ士もわれにことゝへ水かみの
うかりし瀬々はいかに過きと

白川殿七百首

白川殿七百首歌の中に寄糸述懐　新大納言顯朝

つかへ來て色にいづらしくれなゐの
　こそめの糸のふかきこゝろは

同

同

寄箭述懐　皇太后宮太夫

くるとわくとも矢た挾むますらをを
　をさまる御代は手すさひやせむ

拾遺風体抄

秋述懐　法眼源承

とにかくに數にもあらぬ露の身は
　すてゝの後ぞおきどころなき

（集名逸）

述懐　慈寛法師

そむきなむやすかるべしと思ひしに
　捨てぞいとゝうき世なりける

嘉元百首

嘉元百首歌の中に述懐

法皇御製（龜山院）

かしこきも身の上しらずよそにてぞ
　おろかなるひとに誠といふべき

後稱念院（攝政太政大臣冬平公）

同

つとにおき夜はにいねてぞ君がため
　仕ふるみちはおこたりもなき

權大納言公顯卿

同

惠まれぬ人をもすてぬ御代におひて
　わが身仕へむ末をこそおもへ

同

權中納言俊定卿

こゝろより外にしやまのなけれぞ
　世のかくれ家の宿ももとめず

（集名逸）

藤原爲藤朝臣

數ならぬうき身世にふるなぐさめは
　きみに仕ふるたのみなりけり

延文百首

延文百首歌の中に　述懐

權大納言公蔭女

なけかしよ事こそかはれ世にふるは
人のこゝろのやすきものかは

權大納言忠季

同

わかこゝろ道たかはずばとだかりに
みどりの空をあふぎてぞふる

（未完）

辨似抄（承前）

赤松景福

くまで　くるまで

萬葉二十上　父母は祝ひてまたぬ筑紫なるみづく白玉とりてくまでに

此のくは來にて、斷止言なり。常格は、くるまでといふものをかく續けたれど、變格加行中の、一の變格ともいふべし。堀秀成翁の蘿蔓に、萬葉に歸りくまでといふが多しといへり。景福、同集を閲するに「われは祝はむ歸りくまでに」又「かひりくまでに」（かひりはかへると通音にて歸るなり。）等同例三四ありて、常格にいへるが、却て、少し。されど、集中偶くまでといへるが多しとて、そをやがて善しとのみすべからず。古風歌などにては、そもよけれども、常はくるまでといふ方、その調勝りて、聞ゆ。且つ、右のくまでの例は多くは、東の邊鄙の歌どもなるを思ふべし。

萬葉十九下　春日野にいつく三室の梅の花榮えてありまて歸りくるまで

千歳集　惜しからぬ命ぞ更に惜しまるゝ君が都にかへりくるまで

これらは、常の格なり。前にいふくまでの例は、只、加行變格に有りて、萬葉にも、他の活語は、皆、續體言にいへり。集中、日のくるゝまで、おひゆるまで

舟はつるまでなど、多かるが如し、後世にては更なり。

からす

伊勢物語　田舎なりければ田からすとて此男見をりけるに、

こは使令言にて、人をして苅らしむるなり。活は佐行轉用格下二段　からせ　からせ　からす　からする　からすれ

萬葉七　住の江の小田からす子

こは、其の人の自ら苅るなり。かるを延てからすといへるにて、良行四段、續體言なり（若し使令言にあらばからする子といふべし）首卷に、菜採須兒、卷十山田守酢兒とあるも、つむ子もる子といふ言にて同例なり。古は、かやうに延語にいへること多し。

こゝち

古今八　惜しむから戀しきものを白雲の立ちなむ後はなにこゝちせむ

後拾遺　かくれぬに生る菖蒲のうきねして果はつれなく成こゝちかな

住吉物語　萬はれぬるこゝちして云云。

是等は常の例にて心持といふことなり。

古今二　詞書　こゝちそこなひて煩ひける時に。

夢卷　關白殿御こゝちいと重し。

貫之集　詞書　馬のこゝちやみにけり。

是等は語の本義は、前のこゝちと同じけれども、其の用例異なりて、病氣をいふなり。さて、右の內、古今集なるは、そこなひわづらひなどありて、其の語意足らひたれど、只こゝちといへるも、其の義に成るなり。夢卷なるは、重病をいふ。貫之集なるは、馬の病、愈えけりとなり。（やみは休にて病みには非ず）竹取物語にも、此の例二つあり。是當時の言樣にて、文詞に多かり、

もが　もか

萬葉九　三栗の中にめぐれるさらし井の絶えず通はむそこに妻もが

古今十一　心がへするものにもが片こひは苦しきものと人にしらせむ

此のがは濁りてよむ、願辭なり。もがももがなしがななどいふも同じ。

萬葉八　足曳の山のもみぢ葉こよひもかうきていぬらむ山川の瀬に

此のかは清みてよむ、疑辭なり。後には、多くもやといふやうなり。古今集二、一目見し君もやくると櫻花、今日はまちみて散らばちらなむ、などいふが如し。

（未完）

競點歌（二十五回）

阿部光忠君撰

諏訪忠元寄贈

酒宴　美村

おもふどちくむやかたけの盃に
心のそこものこらさりけり

二三ノ句ヲうき世のちりをさけくめはナドシ玉ヒテハ如何

川島宗端

。へだてなき友とちよりてけふひと日
酒くむはかりたのしきはなし

天　川島さかえ子

いくつきの日かすをかさねてむつましく
酒くみかはしあそふけふ哉

牛山寛

竹の葉の千代をこめたる酒なれは
くめとも盡ぬまとゐ成けり

豊田三叔

おもふどちまとゐしてくむ盃に
ほとれもしろき酔こゝろかな

三四句ノツヾケヲ酒うたけ買にト改ムヘキニヤ酔心は酔心地ノ方ニヤ

。まとゐして汲む竹のはのたけなはに
　なりてみたれぬ人そまれなる人　　中橋隆美

たのもしなへたてぬ中の丈夫の
　酒くみかはすけふのまとゐは　　牛山晴皦

竹の葉の酒くみかはす樂しさは
　千代もつきせぬまとゐなりけり　　兩角政德

二句さけヲ露と改メ四句ヲちよもとおもふトシ給ヒテハ如何　　諏訪直子

。さかつきのかすを重ねて思ふとち
　酒くみかはすけふの樂しさ　　遊坐貞方

思ふとちうさも忘れて夜もすから
　くむとも盡ぬ竹の葉の酒

二句うさもトアルヲ、うさを°ト改メサテ、下句ヲくめとつきせぬ竹の葉の露ト改メハヤ　　玉身

もろともにもゝよわすれぬうまし酒
　としの初にくみてかはりぬ

諸共にうき世わすれてうま酒をとしのはしめに汲かはしつゝニテハ如何　　本間光義

、盃のめくるにつれておもしろし
　三筋にあはぬ唄も聞えて　　諏訪忠元

盃のめくるにつれて皆人の
　こゝろの色も春めきにけり

四句こゝろの色°はこゝろの花°トシ給フ方マサルヘシヤ

家兄遺文（六）

白松園主人

○山口の祇園祭

山口築山城趾に祇園社あり。建立の歳月は知らず。毎年六月十四日をもて、祭日と定む。七日の夜神輿御旅所に行幸あり。之を世に七日祇園といふ。かくて十四日の夜、はじめて本社に還り給ふ。この祭に山口町數二十許あるに、町毎に、みな曳車を出す、その車、四方三間、高二間ばかりの二段造にて、下段には、人を乗せ、上段には、人形を乗す。人形の造りざまは、みな往時の戰場を摸擬す。源平一の谷、あるは宇治川の軍など、名たゝる軍記を、そのまゝ寫し出せり。紙をもて高山深谷を作り、上に城櫓を建て廻らし、人形は大きさ、人と同しくて、甲冑を着せ、弓矢を持たせ。或は、之を躍り勇める馬上に跨がらせ、嶮崖峻坂の上に立つ。車をひく時は、人形ゆら〳〵と動きて、倒れけなれども、倒るゝことなし。人形の生ける樣なること、その場合の見るやうになると立てやうの巧みなるとには、誠に人の目を驚かす。通常山谷を作らぬはなけれど、此の車を名づけて、御山々々といへり。かくて、此の山彌よ高きを、いよ〳〵ほまれとし、町ごとに、その高からん事をきそへり。かゝれば、下段には、人の乗せたる上に、大きなる石俵などを積みて重しとす。されどなほ高きに過ぎて、崩るゝことあり。又、御旅所のある町より、大山とて出す。大きさ三抱、長さ四間ばかりなる大木を三つほど、大きやかなる葛もて、車に縛りつけ、上には福祿壽と、童兒二つとを載す。かくて若者ども數多上りて、采幣をとりてうちふる。車には大きやかなる繩、二條つけて、數百の若者にこれを曳かす。車のきしる音すさまじく、おそろしげなり。さて町々を引き廻りて、日比吝と呼ばれたる家へは、わざと車の木の頭をかけて、軒端をこぼつこと、年々かはらぬ事なし。かゝれど、その家へは、隣家の者ども

上下を着けて、御山のかゝりたる祝にとて、かしがましく罵るが例なり。さはれこは翁の物語にて聞きぬ。明治の御代となりては、かゝる事叶はずなりぬ。十四日になりて、この二十ばかり車、御旅所にうちそろふ。夜に入りてやがて神輿出でますと、大山を先きとして、車々御供す。神輿は、その夜かへり給へど、車は、町の中ほどにて止まる。夜あくれど、十五日にて、この日、みな社前にひき揃ふ。むかしは、此の時、國の守より、山奉行とて、車の撿使たちたりしぞ。かくて、その日の午後には、みなおのが町々に引きかへりておろす。此の時むかしは、大山には、棒入れとて、かしがましき事ありしとかや。そは車の棒をおろして、倉に入るゝ事なり。この三つの棒は、おの〳〵めしありて、三村に分ちあり。三村の者どもつどひきて、はやく、おのが蔓をうちきらんとて、きそふさま、見るめもおそろし。人々、この蔓のはじをもちかへりて、門にかけて魔鬼を拂ふ。右の有様なれば、みな月の照りはたゝくあつさもいとはず、詣づる人ひきもきらず。世にこれを祇園詣といふ。いにし明治十八年なりけん、天皇陛下山口に幸行ましませし時、恰も、その祭なりしかば、御旅館の御前へ車をそろへて、かしこくも、天覽に供へ奉りき。

○山口語

山口は、そのかみ、大内氏の城地にて、鴨の嶺、及ひ、築山の城趾は、今猶、纔に殘れり。築山は、義隆の住みし館なり。義隆、そのさが閑雅を好みしかど、公卿の流浪せられし人たちを圍ひおきて、之と共に、歌よむ事を朝夕のわざとせられしは、誰れもよく知れる事なり。かゝれば、その下々の民どもまで、おのづから、その風をまねびて、その語のふり、なにとなく、京めきたるさまになりたりとかや。今はいくとせも經て、そのにほひ、大方はうせつれども、なほいくばくか殘りたる所もあり。しかるに、今の京の言とは、異りたる所多かり。そは、我國に傳はりたる漢字の音は、昔、彼

の國より授かりたるまゝを、すならに少しもたがふることなきを、傳へたるに、まことの國は、今は、その音、大に異り。これと事は、全く同じにて、まねばれたるまことの京の言は、眞似ばれたるよそよりも、なは訛れるならし。今、そのひとつふたつの例をいはん。左に掲けたるは、我山口の俗言の大略を舉げたるにて、山間邊鄕に至れば、きゝわきがたき、あやしげなる言もすくなからねど、まづ、そのあらましを掲げたるなり。

東京にて左樣デスといふ所は、左樣でわります、又は、御座りますといへり。御座りますの方は、大切にいへるにて、御座候を、かくいふなるべし。人に答へをするに、東京にてへーといふ所は、都鄙を問はず、なべてハイといへり。尊者に向ひていふ時は、尤も音聲をはげしく短簡にいへり。京にもはたごやのはしため等が、客に答へをするにはハーイといふよし。我山口にもかくいへり。東國はなべて、へーイとされたる聲音にて、聞くもいまはじげなり。湖をこえて長濱わたりに至れば、すでにかくいへり。往古より武士の風として、下賤の者に答ふるは、ヲヽといへり。ヲヽは、古き書にも、唯々止白須などわりて、やと上の人に應へする詞なるを、我山口にては、またく反對なり。人の家を訪ふに、京あたりにて「御免ヤス」といふ所を、上等の人は御免を被りマシヤウ、中等以下は御内ニテ御座りマスカといへり。人の面前を過ぐるときは御イロシナサレといへり。こはいとおかしく聞ゆれど、もと御ユルシナサレなりしを、ユルをイロに轉じたるなり。すべて、京の言は巧みにいひまろめなれど、我山口はをさなくて、たど〳〵しきやうなり。併しながら、何方にゆきても、おほかたはわかりかぬることなし。物の盡きたるをミテタといへり、ミテタはミチタにて、滿の字なり。盡くるをみつといふは、もとより、甚しき相違なれども、古書に任滿而還などわりて、これは、期日の數の、一日二日とたちて、遂に終の日まで上り

みちたるにて、なは器に水をみたすとおなじ事なれど、畢竟日限の盡きぬる事なり。春みちて、秋みちて、などいへるも、みなしかり。此の言、もとはかゝる所にのみいひけんを、俗言の弊として、末のみに流れにけん。又、家々に、米、或は野菜などを洗ふに用ゐる、大きなる鉢に似たる籠あり。これを京にては、イガキといひ、東京わたりにては、ザルといへるを、我山口にては、ソーケといへり。ソウケならん。ソウケは、もとスヲケにて、簾苧笥の意ならんか。苧笥は桶なり。これ竹もて編みたる桶なればなり、九州わたりにはショケといふよし、こはソウケを重ぬて訛りたる者ならんか。

右に擧げたるは、他國よりも異にて、おのれ東國にきて、此の語を用ゐたるに、意通せざるがうへに、いたく笑はれたれば、その義をことわりて、こゝに擧げつるなり。されどこはおのれが愚考にて、かなへりや否やはしらず。

（以下次號）

宮古島の子守歌

まに生

宮古島は、沖繩縣廳所在地那覇を距る西南百八十七海里の海上に在り。一の稍大きなる島と小さき七の島嶼より成る。臺灣の此方にて先島群島と稱する者は、即ち、是等の島々に、八重山諸島を加へて云へるなり。

紀元二千三百十年の頃、始めて琉球に屬し、爾來、其の關係、恰も琉球の薩州に於けると同じ樣なりき。明治の聖代に至りて、沖繩縣管轄の下に、宮古島役所といふを置きて、之の地を治めたりしが、近き頃よりは、島廳といふに改め、島司を置くに至れり。又、明治十三年文部省令に遵ひて、小學校を設けられしより、今に於いては、其の敎化、頗る觀るに足るべきものあり。天雲の向伏すきはみ、蝦蜍のさ渡るかぎり、實に大御稜威のいたらぬ隈とてもなかりけり。

この島に就きては、言語風俗、歌謠及び、傳說等種々興

ある事多かれど、今は、唯、子守歌の一二をあげて、諸孃の一粲を博せむ。

其の一

一大樹だけ、生ればしうて
　島おそひ、村おそひ、生ればしうて
　ばのよまい、守りたる、姉てい
　　見あげふぃるヨーイ

大樹の如く、威儀堂々たる男と生れて居りて、國を治め村を治めて、名譽ある人となり、さて私をも、彼は、我を守り育てたるものぞと顧み下されかしとなり。おそひ蔽ふ意なり。大樹だけといへる縁あるのみならず治むる意あり。ふぃるクレヨといふと同じ。姉、彼の地にも、士族平民の別ありて、癈藩以前に於いては、其の別、ことに嚴重なりき。島の政治は、皆、今の士族の輩のみにて、執行し、平民は、唯だ、勞働して、士族に衣食をさゝぐるを以つて、終生の務とせり。(勿論、今は、然らず) 姉とは、即ち、平民の女の年上の者に對して用ゐる敬語なり。

其の二

一うばが島よ、姉の村よ、
　手やかめ、やば手や、かめ
　　かけこでやりや
　　　ねがいまちよ

れ前の國、お前の村を治めに行かむ故に（成人の後には）今より手を合せ、柔き手を合せて、（天に）願ひて、待つて居よとなり。うばのばは、羅馬字のVaと同じやうに發音するなり。前の歌のひとりとも、特別の發音なれども、説明しにくゝ、其の上諸孃には、さまで要なきことなれば、唯▲點を加へたるのみにてさしおきつ。るぎの類、皆、同じ。さて、此の歌は、前のにつゞけて、常にうたふ歌なり。島國とはいひたれど、里などいふ方、こゝには穩ならむか。

其の三

一ばんかもり、ぱどわあさば、ヨーイ、ヨイ

姉がもり、たけわあさば、ヨーイ、ヨイ
おやすぐれ、生まれやしうて、ヨーイ、ヨイ
主すぐれ子、生まれやしうて、ヨーイ、ヨイ
ばのよまい、もりたる、姉てい
思ひふィる、ヨーイ、ヨイ
姉よまい、こぎたる、姉てい
みあげふィる、ヨーイ、ヨイ

私が、守り育て丶程大くなさば、私が守りをして、丈延さば、賢明なる役人となりて、私をも守り育てたるものぞと信切になしくれよ。私をも守り育てくれたる人ぞと顧みてくれよとなり。おや、主役人に對する敬語なり。何役以上の人には、親といひ、以下には、主といふと、其の用ゐ方、嚴重なりきといふ。すぐれ勝れなり。姉子守は、いづれも年上の者なれば、自分にても、かくはいへるなり。こぎ子を搖りねかさむとするさま、舟漕ぐさまに、似たる所あるより、斯くいひたるならむ。舟を漕ぎといふにも、コギといふ。

（未完）

禽獸の言行

田端の隱居

花鳥の如く、おもしろきふしもなければ、ひくらしの如くすゞしき音もあらで、たゞ朝より夕べまで、キキ、、、よくしやべりつゞくる百舌鳥の如き人あり。蜑の刈る藻に住む虫のわれからと、音に泣く人あり。又、夏虫の我から身を燒くあり。世に雌鷄ばかりにくきものはあらじ。雄鷄の、やさしく、物などやらんとて、來々と呼ぶを、己が行かまほしき方に行きて、ふりむきもせず。物あるよ。こよ。此方にこずや、〳〵とて、己、雄鷄のしりにつき、何事も、雌に氣をつかひ從ふさま、見るも齒がゆし。此の鳥は、いたく淫けたる性なるよし。必竟雌鳥の遠ざかるも、之をさくるためか。何にはあれ。夫婦禮を失ひ、一家亂るゝは、男のつゝ

しまざるが故なり。雌鷄のめしたは、國亡び、家亡ぶもと丶云ふも、心竟は、雄鳥のつ丶しみなく、時をも忘れて、淫くる故なり。人として、雄鳥の如くなるべからず。さりとて、雌鷄の如く、又、夫をかろしむるも、はづかしからずや。

むかし、大藏の大夫藤原清廉は、猫を、いたく怖れし故に、猫おぢの太夫と付け丶るとかや。この清廉は、山城大和伊賀、三ヶ國に田を作り、器量の德人なりけるが、藤原の輔公、大和守にてあるときに、その國の官物を清廉つゆなさゞりけるを、輔公は之を責めとりてんと思へど、むげの田舍人にもあらず。諸司勞の五位にて、京にしおこなふものなれど、廳などにも下すべきにもあらず。如何してんと思ひ案じけるが、やがて、猫怖のよしを聞き、はかりて、之を招ぎ、一間に入れ、灰毛、班なる猫の長さ、一尺餘ばかりなるが、虎珀みがき入れたる眼したると、他に、五つの猫をさへそへて、一間に入れたるに、猫は、大聲になきて、清廉が袖をかき、この角、かの角を走り行く、清廉死人の如くになりて、ふるひ〳〵、遂に大和の國宇陀郡の家にある稻米、五百石を入るべき下文を書きて、はう〳〵に逃げ歸れりとなり。之は前世に鼠にてやありけむとをかしき事なり。後光明天皇は、性雷を畏れ給ひしを、かつて、己にかつは、須らく性の偏にして、克く難き處より、克つべしとの語をよみ給ひ、其の後は、雷の震ふにあたりて、靜座して、動き給はざりしとなり。成田信高の妻も、いみじく、雷をおそれけるが、さりては子たちの示しにならぬとて、忍びて、靜座したりと云ふ。憶病は、女子の病、つ丶しむべき事にこそ。

才くらべ

蓬生屋女史

武きもの丶夫の心をも和らぐと云ひけん和歌の德の



いみしきが中に、今川義元戰場にて、何某とかやをめして、先手の樣子を見て、急ぎまかりかへれと命じたり。何某、かしこまりて行きけるが、先手、はや、戰の半なるに行き合せて、のがれがたくやありけん。腰なる劔をぬきて、敵の首、一つをかきとり歸りて、見參に入れ、事のさま聞えしに、義元は、いたく怒り、樣子を見て、とく歸れとこそ命ぜしか。敵の首かき來れとは命ぜず。その身の働き、我には、忠の所、一もなし。軍法にまかせて、きつとはからふべし、とあるに、何某は、以の外の御怒りにしほれたる顔にて、つゝしみて、前に侍ふ人に向ひ、

かるかやに身にしむ色はなけれども
　　見てすてがたき露の下をれ

と、小聲に歌ひけるに、義元は、いよ〳〵怒り、己、何をつぶやくぞとありしに、近習のもの、かくと申す。義元、しばらくうち案じて、氣色やはら

ぎ、と丶かざる仕願なれども、急にのぞみて、家隆が歌を思ひ出せし事、名譽なりとて、ゆるされしとなり。歌の徳も、又、大なるものとや云はまし。

ねむけざまし

この頃唐人の寐言を集めたる小冊子を手に入候ままをり〳〵譯して埋草といたし申候この誌愛讀の方々夜の讀書に眠氣さしたるときの外は必御讀なさるまじく候

後　　咲

●不相應なるものは
醫者の病氣と　瘠肉の相撲と　肥大の新婦と　屠鶏家の念佛と　老人の放蕩と　教育家の不品行と　それからまだ〳〵

●手間のとれるものは
新婦の御挨拶と　貧乏人の掛金と　貧家の嫁どりと　孕婦の歩行と　履歴書を出したる後の拝命日とそれから…………

●障子越の判斷
○婚禮の當座に………これも前生からの御縁であろ………必是醜
○老書生差向ひになりて………昔、太公望は八十の時始めて文王に採用されたから………必是不達
○客來の家で………身分相應でございますから……必是不成禮
○新に家を搆へたるもの………住み喜くつて便利でねェ………必是小狹

●富貴らしき相あるは
厩に嘶く駿馬の聲と　お座敷に蠟燭が流すうれし涙と牡丹の花盛と　栗子の福れおんばいと　鶯の音と　讀書の聲と　花釵の途上に遺ちたると　高樓の上で吹く笛と　茶碾の音………

房州日記（第二）

柴田しづゑ子

ふく風の音よりも、大なる聲もて、その歌をうちうたひつゝ、なやめる人々を慰めたり。折しも、機關の方に、大なる響きおり。船の内なる人、さはぎいでたり。おのれも欄干のつなにすがりつゝ、行て見れば、機關の内、火おこりて、すでに、大事に至らむとす。男子らも、いまは全力もて、ともに救ひいたづけり。これを見るこゝろの内、筆にはしるしがたし。おのれが伴へる人々は、五十路の坂もすぎたらむほどの男子、さては、母と姉なる人のみにて、他は皆十七八歳なる男子のみなり。いづれも、うち伏しなやめり。身を投じてのがれむか。石を水に投せしに異ならず。いかにかせむと、こゝろもまどひて。

世の中のあらき波風わすられて
あやうき船とおもふけふかな

されど、この珍事は、幸にして、ほどなくしづまりたり。船長もいまは、こゝろをきはめて、拔錨せり。船は進行せり。すべての乘客、男子も女子もなやみふし、漁夫とおぼしき人すら、あへぎよわりたり。されどおのれは、いかにかして、伴へる人々を、救ひいでなむと、おもふこゝろのみ、さきだちて、なやめるこゝちは、あらざりしかば、船長を船子によせて、いふやう、この船とく浦賀につけ給へ、さならぬときは、絶息する人の多からむ。汝が職務とするところ、はたして乘客の安全を、希ふものならば、いと近き港につけて、荒き波風をさけて後、ふたゝび進め給へかしと、心のかぎりいひ乞ひたれど、彼の人、きゝ入れねば、猶いひつゞけんとする時、他の乘客なる男子は、彼に向ひて、汝は絶息せる客の、多くをのせて、そが房州に達せん後、誰に向つて、勝利を得るか、はやくも女子老人は、たすけて、陸に達せしめよと、聲あらゝかにいへば、されば、いま一時間もまち給へ。この船の、航

海のみちなる、上總の竹が岡といへる所に、船とゞめまゐらせんとなむいふ。この時はや午前三時なりき。やうやう心も靜まりて、いましばしとまちゐたり。そが内にも、伴へる人々の、助けよと、いきの下より呼ぶ聲の、身にしみわたりたり。この時風は、すこしばかりおだやかになり、東の空には、横雲たなびき、月もいまや、西に落ちなむとす。折しも滊笛一聲、耳をつむざきて、いかれる浪をやぶりたり。他の乘客の人々の、いへるやう、このあたり、たえず漁夫の船、三四十艘は、うかびいで、よもすがら、すなどりつゝあなるに、たえて船の形を見ざるは、いでこのあらしに、流れやしつらむなどさゝやきぬ。かくて船は、やう〳〵に、そが進行をゆるめぬ。暗號の點燈は、さしいだされつゝ、すゝみをとゞめぬ。ながめやる、彼方の岸より、三ッ四ッの小船こぎいでゝ、たつ浪をくゞりつゝ、此方をさして、くるさま、秋の木の葉のたゞよへるが如く、容易に近づくべくも見えざりけり。されどおのれは、あらうれしとて、その用意せむとすれば、初めて、目くらみ、氣もぬけたらむこゝちして、倒れむばかりなり。伴ひし人々は、今さら立つべくも見えねば、やう〳〵氣をはげまして小荷物の包などもとめんとすれば、はやく風に、吹き拂はれたり。船子は母をたすけて、おろしつ。小兒らは、他の男子達に助けられつゝ、やう〳〵滊船をいでゝ、端艇にとのり移りたりしが、大なる荷物は、かねて、安房の北條の里宛にあづけおきたれば、いまさら受取るべき勇氣もなく、小包は、皆失ひて、彼の蒸滊船の人々に、禮を謝せし後は、うつゝごゝろも、なかりけり。二時間ばかりにて、船はからくして、海岸につきたりしかば、あまたの船子いできて、綱ひきあげたり。船の内の人は、わづかに、生きたらむこゝちして、頭もたぐるもあり、母はいちはやく、船子に助けられて、陸にのぼり給ひしが、いづちゆき給ひけむ。かげだに見えずなりぬ。おのれは、他の人々を助けつゝ、猶船

子にたのみて、陸地にのぼり行きしが、右の方に、一つの茅屋あり。こゝにおのれは、やう〳〵こゝろもおちゐてあたりを見れど、小間物どもを、賣る家とも見えたり。さるに彼方は、はやくもさゝやかなる桶もて湯をすゝめ、いざ、こゝに息み給へかし。足はおのれが洗ひ申さむと。いとたのもしく、梅の湯などのませくるゝ嫗あるに、はじめて、夢さめたる心地して、母はいづこゆき給ひけむと、たづぬれど、さて今少しさき、たすけ參らせしは、御身の母御にましまししか。御心やすくおぼしめせ。わがむすこの負ひまゐらせて、こゝにのぼせたれど、そが苦しき汗は、肌へにわたり、口のあたりには、赤きもののさへ見えたるに、さてこそおはすらめと、こゝに家傳とたのめる妙藥をすゝめ參らせしかど、少しは御こゝろづよく見えながら、猶も頭は梅もてつゝみ、足をば綿につゝみ、おくなる床にふせしめたり。さても母御の事は、この老嫗にまかせおき給へ、御身もさこそよべのあらしに、勞れ給ひけめ。いざ、こゝに息み給へよといふ。實にいなか人のすぐなる言葉にも、そがまごゝろのあらはれて、いまさら、答へむやうもなく、たゞ、彼等がすなるまゝに、まかせおきつ。

（續く）

寡婦姉妹（上）

唐扇

都をば、霞と共にたゝずとも、秋風に、風邪ひかさるる憂もなき、昭代のありがたさ。朝とく上野にゆきて汽車といふものに乘らば、ねむけのさめきらぬ中に、奥州の果にも行かれぬべし。斯る世にも、いづくのすねものにか。麥稈帽子を頬深に冠り、書籍やうの小包を、脊と前とに分け荷ひて、白河の關所ありしといふ近くにたどり來りぬ。道の端に物賣る一軒家の前にて、何かうなづきながら、つと入りて床几に腰うち掛くれば、二人の女、客を迎ふる聲もまどやかに、お休みな

されませ、今日もお暑うなりました。イヤ暫間休ませて頂きませう、寡婦姉妹とは貴方がたがと、改まり問へば。はい左樣で御座ります、何御用かと、訝り答ふるは姉なるべし。私は東都の書生、生國へ歸る序、名所舊蹟を尋ね、人の知らぬ田舍話もきかんと思ひ、外途ながら、此地方へは參つたもの、承はれば感じ入つたる御身の上、都の塵に埋れても、腸は腐れぬ志るし、故鄕への土產にすれど、實を明して下さらぬかと、折入つて頼めば、何、妾共の身の上を……オホヽヽ、男入らずの世帶から、賢ない者は仇名をつけて、寡婦姉妹といひますれど、何のいはれも御座りませぬ、田舍の物を思召さば、山里は是でも茶、一口味ひられて、都では知らぬ味を御土產になされませ、お恥しやと差出づる茶を、一口にのみ乾して、是は結搆、倘結搆なは御こゝろざし、大略は彼の村で聞いて來たれば、隱さるゝだけが陋、いざ〳〵いはれを聞かせて下され。何もござりませぬと申すに……。嘘をいはるゝな、談話の中にも、それ妹御の眼の濕んだは、何よりの證據、それでも無いとおいひなさるか、一度いひ出しては退かぬ奴、それと心に感じては、朧氣には濟まされぬ性質、とんだ者に取付かれたと諦められて、素直にお明しなされませ、聞かぬ中は去らぬ、きく迄は何時迄も如此して居れば、交番へなり役塲へなり、訴へるとも屆けるとも、アハヽヽヽイヤ惡い事ではなからうにと、女の顏を凝視めしまゝ、動かねば、困じてや姉はうち首肯き、それまでの御望なら、恥しながら枯れのこりたる秋の尾花、雨に濡れ風に伏しゝ、今迄の來歴を、精しくお話し申しませう、素より智慧なき女の身、甲斐なき愚痴も交らうけれど、厭はず聞いて下されませ、さらばと解毛をかき上げつゝ、先づ迸る涙の雫を、爐の薪の煙にまぎらし、面を背向けながら語り出でぬ。

寡婦姉妹と人はいへど、寡婦に生れついた妾でもござりませぬ、初は彼の村の者、父樣は作男、御莊家の長屋に住んで居ました、妾を生むや、母樣は病氣なされ

て乳は出ず、泣痩せ枯れた妾の樣を見かねて、御莊家の御袋樣、未だ乳の多いのを幸ひ引取り育てゝ下されたとかで、吾が子よ〳〵と可愛がらるゝに、妾も御莊家の御袋樣と、幼い時から御側に甘えて、わらぬ我儘を申して居りました、さるに御莊家の若旦那、上は妾に二つ兄、次は妾に四つ弟、兄樣と呼び、勿體ないながら姉と呼ばれて、善い事惡い事、共に爲ずといふ事なく、畑に轉がれる西瓜は勿論、珍らしからぬ屋敷の菓物、數わるのも別けて喰べ、外へ出てゝは必ず二人、向家の不順權太、小川の鰌を掴まうとて、妾に泥をかけたのを、兄樣は腹立たれて、田の畔にうちのめし、泣かせて歸された位なれば、知らぬものは確に兄妹と思ひましたらう、小さい時はそうした中、夢にも年は取るまいもの、蕣も花咲く頃となれば、刀でも割かれぬ中の、吾から疎くなれる樣、顏みらるゝも心に止り、物いはるゝは何より辛きも、思はいや増しなづかしうのみなり、さて〳〵何と申さうか、妙な妾となりました、御方の樣子もをかしきは、同じ御心なればにや、二人して結ふ眞柴垣、互に間を隔てつゝ、止む無く隙にわひみては、面をさつと赤らめて、いふにいはれぬ嬉しい心、思のたけの愈々募るに、イヤ愚、何の迷が、先は村でも數への金滿家、妾は其處の下男の娘、とても成らぬ中ならん、よしや桂は焚かずとも、世の常の家に生れたなら、思の程も叶はうに、因果な妾かと、人知らぬ涙に呉れましたが、成ると成らぬは後の事、親の許さぬ戀はされずと、漸く女の掟を覺り、亂れし心の糸の緒を抑へて、涙を拂へる折しも、夢か現か先から緣の申入れ、お前に異存はない筈と、兩親の御言葉に、嬉しさに心も狂はんばかり、己が身をわれ知らず、何日しか其家の者となりました、玉の輿とやらは斯樣なことでござりませう、昨日に變る身の、朝は春の花陰に、霞の袖をひるがへし、夕は月の欄干に、雲の上衣をかざすより、尚樂しきは、中垣の隔てもなくなりて、睦しく語り合ふ心、すべてありとあらゆる樂を、

盡して、浮々と二年ばかりは送りましたが、風邪の氣味とて父樣は、床に着き給ひしが、初は假染なりし病の、中頃俄に重うなり、一月ばかりを煩はれて、遂に果敢なくなられました、其時夫は漸く二十歳、月の昇らぬ宵闇に、頼の燈火消えし樣でござりました、ことに家の内さへわからねば浮世は鬼の家住ぞとも、一向外知らざりし身は是非もなきことにて、折を覗へる分家の勘助、萬事力になりますれば、御心安く思召せと、慰め呉るゝ親切に、闇に迷へる夏の虫、光を撰ぶ遑なく萬事頼みし其際に、つひ謀られて家の田地總てわが物ぞやとのわげつらひ、兎や角爭ひたる果は、彼方よりする公沙汰、勝つべき筈の裁判は、如何せしものか此方の負、偖は大事と控訴して、名ある人々も數多添へ、倘取捌を願へるに、忽ち此方の勝利になり、やれ嬉しやと思ふ際なく、剛惡なは彼方の鬼、益々牙を嚙鳴らし、都の法廷に持出しゝに、あゝ神樣はまことにあるものでござりませうか、裏の實は如何でもあれ、表の證據は明いとかで、とう〳〵此方の負になり、畑はとらるゝ田はとらるゝ、其上藏の籾まで賣りて、彼方の經費を排はせらるゝ、瞬く隙に、失ひつくして、只殘れるものは住家ばかり、其の住家さへ人手に渡して、僅の代にて、立つる煙もいと細き、今日の伏屋の佗住居、變れば變る人の身の上、人間萬事何翁が馬とやら、ありし掟に漏れませぬ、伽羅の衾の微温は、臂を枕の夢成らず、肉と酒との味は、黎の羹いとをしく、窶れはてにし色艶は、飾る術なき夢の跡にて、身はかく迄に變りても。露變らぬは夫婦中、外の光に靡きなば常世の花に咲かましを、ものは闇なるわれ故に面の色香も窶れぬと、夫の情もひとしをやさしうなり、妾も亦照る日に色は黒みたまひし、是がありし妾が夫かと、思へば、いとしさいや增して、身が換らるゝものならば、妾男の業を執り、夫は春の風にも當てず、絹布ぐるみに藏ひおきたいわが心、世の中には間々ある事ながら、富貴く時のみ夫婦で、零落すれば離る樣

な心には、如何すればならる丶ものか、彼等は人に嫁くのでなくて、金に嫁ぐので御座りませう、さはれ其樂しみも、風に瞬く燈火の、消際にます光にて、忽ち後はぬばたまの黑白も分らぬ妾が心、如何なればかくいとも果敢なき習にて、生命の永久に、憂のみ長き世の中でござりませうか、いとしき夫もわ丶終に病の床のうき煩ひ、醫は假染と僞れど、唾液に交る血の色は、隱す術なき病の質、死の身に迫れる思にて、共に惱みし効なく、吐かる丶血潮の度毎には、世の樂の數消えて、慰む瀬とては更に無き今日の身上となりました、其時の妾の悲しさは、諸共にもと思ひしより、外に覺えはござりませねば、何卒御察し下されませ、いどゞ身をきる悲しさに、おのづから鳴る牙にて、腸嚙みしめ、流る丶血潮の涙には、怨恨の數々溢るれど、怨むでも甲斐なき事なれば、應分々々を思ひはやらで、過分の切望を遂げたる報と、只身一つに諦めました、後は十九歳の弟御、それを夫の代にせんずる親身の人の計ひなりしも、一度人にゆるし丶身の、夫の弟なればとて、今更反古にされ樣かとあくまで張る意地に、詮方盡きて、わが妹これを弟に妻せて、亡き夫の後をつがせ、妾をも離らせん考なりしも、離られんはどならば、弟御を拒みませぬ、夫の身體は亡くなりても、魂は妾に遺りてをりますれば、いはゞ妾は夫の身、されば何處迄も此家の者、今更さらん理なし、何の苦勞もなき世には、心盡しもなしとかや、不自由勝なる母樣の、側に孝行も致したければ、御厄介でもござりませうが、此儘おいて下されませと、妾の切なる頼みに、母樣も、それ迄の心なら夢にも離れとはいひませぬ、未だ年若き女の身の、行末一人で暮さんは、不便よと思ひたれば、他人の情にいひしこと、まことは離らせん意なし、さらば其方は母樣ぞ、私は祖母樣、夫婦は忰に花嫁御、世のある限り榮えよとて、中睦しき三夫婦の、二人の夫は亡き夢の、昔の憂さはうすらぎて、暫間面白う暮しました、それより後は其方の身の上、

妾が上の證しにあらねど、まづ〳〵順を追うてたも。

意氣（五）

白魚女史

樹、靜かならんと欲すれど、風やまず。子養はんと欲すれど、親またず。一作さんとやら、散步、散步もおもしろい、げにくれ竹の、一夜をあらそふ花も、山には多けれど、いのちさへあらば、來年も、また、似たる花を見られぬべし。今夕はやめて、折角にこられし、その柴をもち行かれよ。果敢なき事も、孝養の一つなりと、出んか、やめんかとためらひをりし梢の、にわかに木の間よりあらはるれば、おどろく母子、たゞ、夕日を顏にうつして、言葉もなかりけり。

どなた樣にか、誠に御信切なるお詞ぞへ、否もう、此處に、此のまゝ捨て行かば、流石に拾ひ歸る息子の心、つね〴〵のためしなるを、老婆心の一途に、すぐにとぞんじて、只今の爭ひ、はづかしやと、子のためにかくさんとする直き心、あはれに思ひて、梢は、否、吾こそは用らぬ世話と、かく老人は世話のやきたきもの。しかし、男と云ふものは、とかく散步のしたきものにて、もはや、たそがれ、早く歸りてと、娘どもの云ひしを忘れはてたり。また迎に來らぬまに、いざ歸らん。一作どの、ゆるし給へ。もて重からんが、其の柴、負ひ行き、とく歸へりて、芋でもさしくべ給へ。親のめぐみは、げに淺からぬもの、翁も、一枝をひろひ行きて、娘等に芋やかせやせんものとて、一枝二枝を拾ふもやさし。

思ひしにはまさりたる材料、今日こそは拾ひみてんと、梢、翌日、あさげを終るや、麓に至りぬ。

其處か、此處かと小さき庵りをのぞき入るゝ彼方より、油に汚れはてたる、しかも、肩も、膝も破れぬけたるうすき服を身につけて、滊車の線路の方に至りぬる若き男、見れば昨日の息子なり。こくびかたげて、氣も

ふるはざるさま、何を考ふるか。

彼はまさしく、彼方より出でたるよと思ひし門に至り、のぞき入るれば、昨日なげきゝりし柴の、そのまに戸口に立てかけありぬ。此處ぞと、心にうなづきて、梢つと門に立ち入れど、彼方には、例の、一作が出で行きしあと、父のかんしやく。罵る聲高くして、人來りしも知らず。

さても、うつくしき菫よな。ゆかりの色の此處は、殊にまさりたる心地、少女御にはあらねど、あまりのなづかしさ、心ひかれ侍り。案内も請はで、ゆるされよと、わざと大聲立てゝ、庭口にまわれば、誰れぞと云ひつゝ省る女房、さならんと思ひし昨日の嫗なり。梢は、なは、知らぬさまに、つく〴〵とあだばへのずみれをうち見つゝ、娘へのつとにせまし。一株をゆるしてよと云ひつゝ、はじめて家の内を見入れば、彼方は思ひがけぬさまにて、あいさつもえせず。梢も思ひがけぬさましして、こは〳〵、一樹の陰と、昨日は思ひしを、何のゆかりにか、重ね〳〵のゑにし、さても、昨日は失禮を致しゝよ。御子息は、何處にかおはせし。見まゐらする處、御主人は、御病氣のやうす、さてさて、おいたはしや。かく、ゆかり重ねては、他處に覺えぬ心地、御病氣は何にや。大分お長き事かなど、いつもは、口かず多からぬ梢の、ひとり詞をつゞけつつ、椽にすべり上りて、病者の傍らに至りつゝ、已は此の山中にすまふもの、不作法は、山の者の癖、ゆるされよ。昨日、一寸、妻君と御子息とにお目にかゝり、たゞならぬ心地したるに、今日、また、すみれの導くゑにし、見奉れば、御主人には、年齢も、似通ひ、遠からぬ住居、何となくゆかりありげに思はるゝも不思議。失禮ながら幾歳にはならせ給ふ。今年五十歳と、さりては、身よりは五つの兄上、御子息は、幾歳、もはや、廿歳を超え給ひしと、外にお子はれはさぬか、お一人子にては、嘸やさびしくおはさん、なれど、うらやましや、男子にて、身には女子ばかり。牛か、鷄な



らんには、價もよからんが、人の子は、男子に限れるよ。いや、おろかのなど、昨日お目にかゝりし時、利發げに見え給ひし。何、强情、强情は男子の意地。して、御主人には、もとより、此處のお住居とも見ね候はぬが、失禮ながら、もとは、何處に住まはせ給ひし。大坂にな。それは繁華の處に住まはれしよ。身も、もとは東京に住みしかど、十年前、此の山の奥にうつり候ひけるが、仁者ならねど山の住居ばかりよきものはなく、いつもちりの都の人々にはこりをり候。して御主人には大坂にて、何をなしをられし、おつとめ人でおはせしか、何、御商家と。それは思ひの外、いやもう、下等官員などになるものにはあらず。頭を下ばねば、上役の御氣げんはわしく、云ひたき事を云へば、上樣の御氣に障はる。一日、口をふさぎ、ともすれば頭を下げる。實に大口や頭痛もちにはくるしき處。御商法は、何をなしをられし。生糸商とな。それはそれは當世での、第一の業、フン浪花屋と仰せられしと、さては、儀助ぬしにておはせしか。それは、身のつねづね尋ねまゐらする人なりしよ。ゆかりの色にひかれしもうべ。已は、春川梢。名を申ずとも御承知もおはすまじが、とくより、身には、尋ぬる儀助ぬし。語りたき事もあり。承はりたきふしも少なからず。妻君、失禮ながら、酒かうて給はらずや。あまりにしやべりて、咽喉乾きぬ。アハヽヽ私は、大の猩々、之がためには、二里先きまで、人を走らすまが、なほまちどうでなど、ひとり、花鳥の春おもしろげなり。



野逕霜　東久世通禧

村すゝめあさる影だになかけりけり
かれ野か原のしものあけあさ

山家落葉　久我建通
山里にちるもみち葉をかきよせは
いはのたききに猶あまるらん

深夜時雨　鍋島直大
ふけぬれと眠られぬ迄さわかしく
木葉ましりにふるしくれかな

山路落葉　前田利嗣
柴人のをり／＼かよふやまかけの
みちたとるまてこの葉散るなり

籬殘菊　津輕承昭
くものいとかゝるまかきに冬懸けて
咲きこそにはへしらきくのはな

谷時雨　前田利聲
うき雲のたちおほひたる谷の戸に
風ふきたちてしくれふるなり

雨中落葉　長谷信成
夕日影さしたるまとにおとたてゝ
この葉ましりにふる時雨かな

菊
散りすきし野邊の千くさの花のいろを
まかきの菊にあつめてぞみる

夜聞水聲　宮地嚴夫
小夜ふけてかけひの水の音きけは
おのつからにもすむこゝろ哉

夜落葉　北郷久政
をり／＼に落つる木のはも澄みのぼる
月のひかりにみゆる夜半かな

社頭落葉　千葉胤明
廣前のとひらのうちのもみち葉は
いつ木枯のふきいれにけん

秋の田舍　下田義天類
みつはくむ老もすのこにきぬ解きぬ
こはるひよりの秋のあかたゐ

論語の句題。如在神といふことを

赤松景福

まのあたり神もきまさむ木綿手次
あかき心にかけてまつらば

故郷川　草野隆道

來てみれむわがふるさとは河水も
ところをかへてなかれけるかな

紅葉殘枝　鍋島榮子

冬がれのはやしのなかに色ふかき
もみぢ一枝ちりのこりたる

苔逕落葉　前田朗子

二つ三つ散る紅葉かなふゆきても
なほみどりなる庭のこけちに

藤原藤房卿　南鄕柳子

大庭ものとけからましくすのきに
かゝりしふちの花しちらすは

松間時雨　柳原愛子

松かげに落つるしつくにむらしくれ
はれても笠はとられさりけり

行路霜　小池道子

山かけのすきの下みちかせこえて
あさ行くそでにしもそちりくる

月照落葉　北島以登子

もみち葉のちる影見えて冴ゆる夜の
月はかれ木にかゝりけるかな

國旗　松平健子

もろこしを吹きなびかして日の御旗
とつ國までもかゝやきにけり

竹窓時雨　小川直子

木からしにもまるゝ竹の音だにも
わびしき窓にふるしくれかな

初霜　常磐井文子

ときはなる松の上葉にこのあさけ
初しもしろくおきわたしたる

以利沙伯　河村重子

あつもの丶鳥のにくこそ飛びたちて
勝ちはこりたるためしなるらん

外國より書のとゞきし時

玉づさにおもかげそひてはる〲と
きたあめりかのたより嬉しも

安東菊子

〰〰〰〰

明治卅二年十月三日熊本縣肥後國菊池高等小學校女子部落成式につらなりてよめる長歌

佐々豊水

御縣はあまたあれども。はし立の熊本あがた。國はしも許多あれども。あからひく肥の道のしり。うつせみの世にかぐはしき。菊の花菊池の郡。郷はしもさはにあれども。こまつるぎ隈府のさとに。眞木柱ふとしく建て。久方の天に聳ゆる。まなびしらまなびどころの。新しき花の瓦は。大庭の砂にかがやき。さにづらふをと女がともを。玉ぼこのさとしみちびき。兒等が手をとりてをしふる。こもまくら高きしらべは。ゆくかげの月日とともに。朝日のひてるがごとく。夕日のひかけるがごと。から衣たちぬひの業。ちりひぢの數をよむ藝。紅の色彩の術。海山をはかる理。とりどりの教師を。敷しまの大和なでしこ。ちちのみの父の命。柞葉の母の命と。なくごなすしたひきまして。朝つく日むかふつげ櫛。夕星のかゆきかくゆき。むらきもの心つくして。ゆく鳥のあらそふはしに。うづらなすふりにしさと丶。おく山のふかくふみわけ。うまごりのあやにともしく。女郎花さきこそにほへ。あまさかるひなにはあれど。うちひさす都にまさり。雲はなれとほき國べに。むら鳥のたちにしよき名。うみをなす長五百秋に。空みつ大和島根に。味酒すすしくのこり。箭筈嶽かけずくづれず。菊池川いやとほしろく。大御代を守山のへに。迫間川きよくたたへて。里人等おなじ心に。ことはかりはかりかはして。つきたてしこの小學校。百世くさ百代もおちず。春花のめでたからんと。

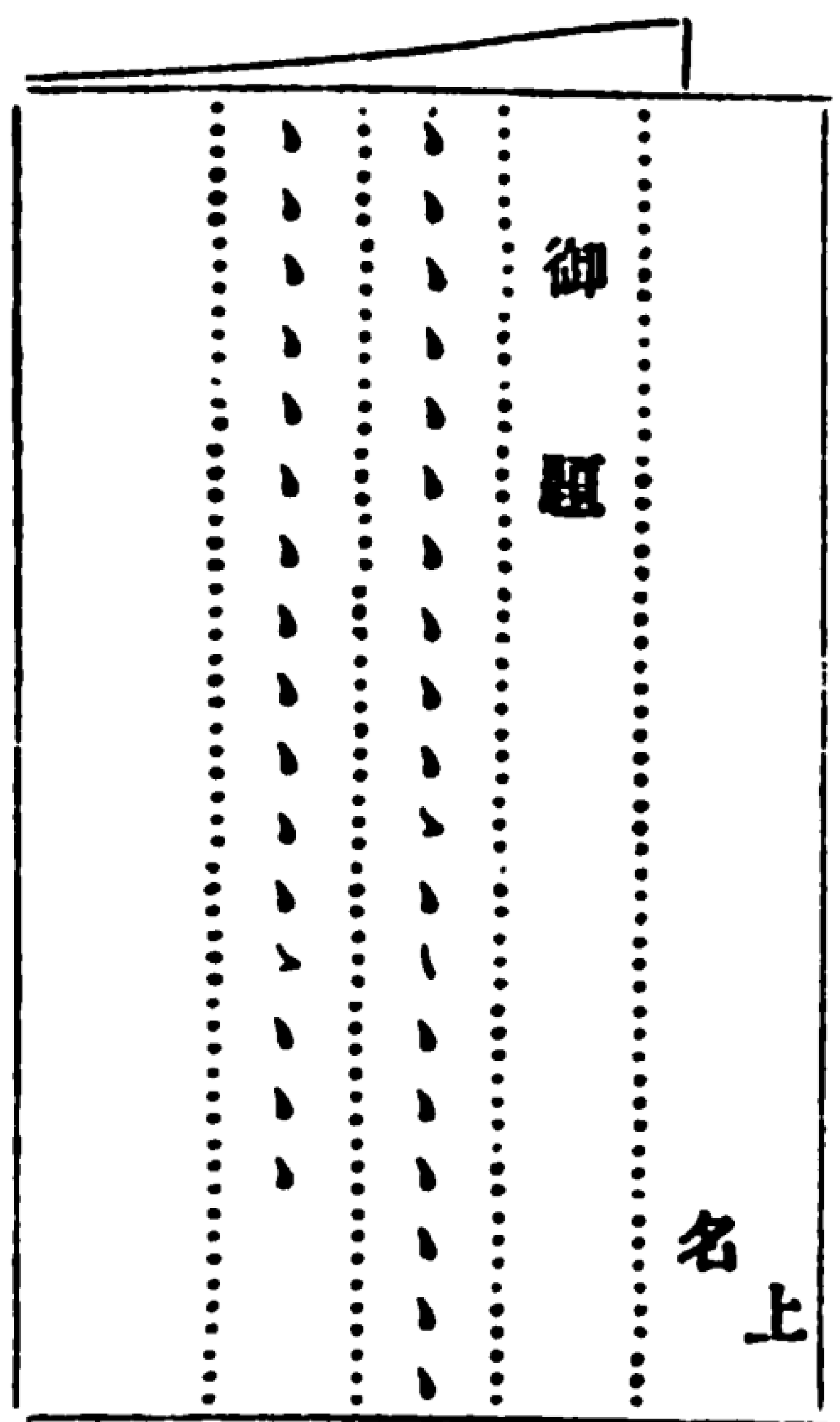
いははなすときはきかはに。秋草のむすびし蔦目。いはひつぎいく萬世も。ぬば玉の夜女のいすすき。かるかやのそそぐことなく。天津日の御翳となりて。かためたる戸窓の錯。うごかざらなん。



雜報

●歌御會始御題　明治卅三年御歌會始御題は「松上鶴」と仰出され、詠進書式竝に期限等左通定られたり。料紙は檀紙、奉書杉原紙、又は、美濃紙を用ふ。詠進は一月十日までに、宮内省御歌所へ差出すべき事

竪詠草（但シ五ツ折）



裏面書式

某府縣下某國某郡市某町村住
華士族又は平民
苗字　名
官位勳功爵チ有スル者ハ苗字ノ上ニ記スヘシ

●御救恤　本月七日暴風雨の節、千葉縣下、被害尠からさる趣、憫然に思召され天皇皇后兩陛下より、罹災者御救恤として、金千圓を下賜せさせ玉へり。

●行幸啓　近衛小機動演習天覽のため、十五日午後一時十五分、御出門、同二時上野發の滊車にて、栃木縣へ、行幸の御事を仰せ出されたり。即ち、仝日四時栃木停車塲御着、十七八の兩日演習を御覽ぜさせ玉ひ、十七八日還幸の御治定なりと承りぬ。又、皇后陛下には、十五日、御奉送として、上野停車塲へ行啓還啓の御途すがら、上野公園内にて、開設中なる、秋季美術展覽會にも行啓せさせ玉ふべき由、仰せ出されたりき。十三日、小松宮の御催にかゝる、能樂御觀覽のため、芝公園なる能樂堂にも、行啓せさせ玉ひき。

●東宮殿下の御西遊　かねて、記し奉りし如く、十月廿八日、江田島海軍兵學校に行啓、生徒の運用機關、航海、水雷術の作業等、御巡覽、又砲熕操練及撃劍、柔術、中隊の各操練等を御覽せさせ給ひ、廿九日には

宮島に行啓せさせ給ふ。翌三十日、かねては、舞子還啓の御豫定なりしが、特に一日御延引せさせ給ひて、淺野侯の泉邸行啓。此の日、御身には、黒モーニングコートに、高帽を召させ給ひき。當日淺野家舊藩士の、長刀、鎗、銃槍、劔術等御覽ぜられ、翌三十一日山陽鐵道に召させ給ひ、午後四時二十六分舞子停車場に御着、御機嫌、いとうるはしく、有栖川宮の御別邸へ還啓せさせ給へり。

●●●盲者擬漢　廣島市内駒場町に、吉野初彌とて三十七八歳の盲者あり。去にし二十六日、師團行啓の、御そなへを、世にも甲斐なき身の、何とかして、迎拜したしとて、家人に兩手を扶けられて、目にこそ拜まれね。心眼を開きて御列を迎へたるも、いぢらし。又田中靜樹とて、其行ひざま皆人擬漢よとあざみ笑へど、皇室崇敬の念いと篤く、態々山口より來りて、大手町の大通りに、鹵簿を迎へ奉り、十重廿重に打集へる無數の拜觀者をギロ〳〵と眺め入りて、警固の巡査に對ひ、畏くも　殿下には先年御いたつきに罹らせられしと承はりつるを、斯かる稠人群集を遠ざけぬとは、重々不埒たるべしと、堅く執つて動かず。終に、警察署に伴ひて署長より懇々説諭して、引取らせたりといふ。其情亦可憐なる哉。また、宇品へ行啓あらせらるゝや、、身にフロックコートを着したる六十餘歳の老翁、廣島の御幸通り中央路傍に拜伏して、御通過を待つ。還啓の時亦然り。數度の行還啓、一回も缺きたるとなし。殿下も特に御注視遊ばされしとか。されど、翁は飄然として來り、飄然として去り、其何人たるを知るものなしとぞ。

高辻侍從長　の歌に曰はく、

八隅知し、我大君の皇太子の、みともつかへて明石がた、舞子の宮に日をかさね、すま高砂の松風の、聲も靜に、村雨のふるも淸らに、昔人願ひし如く、罪とがも、あらでながむる浦々の、けしきゆかしく、ながめたのしも、

反　歌

罪なくて須磨のけしきをみむことを
　　ねがひし人にきかせてもかも

くさ〴〵記しまつるにつけても、そゞろに、感涙の催されて。

沼津還啓　十五日、舞子御發程十六日、沼津御用邸に還啓せさせ玉へり。御乘艦は、淺間艦なりき。

●有栖川宮御息所殿下　世にもあはれに果敢なきは生れて父母を亡ひ、親戚の賴むべきなく、偖は、治療の料なき家に生れて、身は疾病の苦しさに泣くなる幼きものが上なりけり。同じ國に人となりて如何でか、此等のものを救けであるべきや。然れども富まぬ我等には獨りの力にて、何程の事かならねば、此のたび、同志相集り何人にも爲し得べき方法を求めて、家中用に堪へざる廢物を、つゞまやかに貯蓄し、是を金錢にかへ育兒の資に充てんとこそなすなれ。」との主旨に依り今を去る十年のむかし、篤志の婦人相はかりて、起せるは即ち、婦人共立育兒會といふものなりき。始めは、誠に微々たるものなりしも、漸く會員の數を增し、會頭鍋島侯爵夫人を始め、幹事の役にあたりし人々の、少なからぬ盡力に依り、且つは、有栖川宮御息所殿下が思召もある事とて、今は基礎も堅く定まり、會員の數、凡そ、三千三百の上を起え、明治廿三年發起以來、力なき家に育てる病兒を治療すること數百に及び、婦人の會合とて、未だ、廣く世に知られざれど、社會の爲に致し、功蹟淺からず、思へば、會費の多くは、皆、これ紙屑、其の他の廢物を賣却して、得し金なるが積めむ、なか〳〵に驚かれぬる巨額なりけり。同會は、例年の如く、先月卅日第五回總會をば、神田なる青年會館に開きけるが、朝よりの折り惡しき小雨、午後に至りても、尚は、晴れやらざりしものから、集り來る婦人、頗る多く、鍋島侯爵夫人、戸田子爵夫人、其の他の幹事諸氏は、切りに準備を急ぎたりき。午後一時半過ぐる頃、有栖川宮御息所殿下成らせられ、直

ちに、式は始めたり。堂に集まれるもの丶うち、我等が目に際立ちて見えしは、大學醫院看護婦の指揮の下に立ちて、殿下の前に整列せる貧兒なり。此處に參集せし貧兒の數は、四十餘人、是等は、實に、皆本會の救助により、病苦の床よりすくはれしものにて、或は、祖母の手に、或は、姉の袂にすがり、もとより貧しき家の子とて、衣服の淸らなるも見えず、うち見るさまは、むさくるしきげなるが多かりしが、其のいと殊勝にさし控へたる、殿下が式場へ御出であるや、皆一時に、頭を垂れて、恭々しう拜禮をなしたるなど、ことにあはれに見えたりき。また、殿下には、其の汚くるしき姿せるものをも、更に厭はせられず、一々に親しく、其の顏色、體の樣子など見給ひて、有難き言葉の數々さへ下し給ひければ、兒を伴ひし女などは、何れも仰ぎ見で、うれしさの涙に咽びたり。斯くて會員一同に飴を出だし劍舞、講談、長唄の餘興あり。皆、歡びを盡して、散會せるが、殿下にも、何か差上げんとて、やれ奉書よ、三寶よと幹事だちが立ち騷げるを聽き給ひ斯る慈善の會合に、わが身にとて、特別の心くばりには及ばじ。三寶も入らず、奉書も無用なり。只だ、一同に配つべきものにてよしと仰せられ、軈て會果て丶後の御物語にも、會員一堂に會して、餘興の數々、さて、興少なきにはあらざりしかど、最も樂しう喜しぎ心地のせしは、彼の病兒等が、此の會の助に依り、健全なる身となれるを見しことにてそあれ。わが身か、今日の何よりの樂は、實に是れなりけりとのお言葉あり。幹事等が、勞を慰め給ひて、いとたのしげに雨の夕暮を立ち歸り給ひけるを、幹事は、馬車の行く方、遠く見送りまゐらせて、たゞ、皆感涙に袖をしぼりしとぞ。

●婦人のかゞみ　宮城縣登米郡吉田村字吉田三百八十三番地平民農亡高橋千代之助の妻つねえ（慶應元年七月生）は、孝貞の行をもて、去にし八月左の通り、同縣知事より賞賜せられたり。

登米郡吉田村高橋千代治婦

高橋つねゑ

平素孝貞の志厚く、舅姑の長病に侍し、看護承歡到らざるなく、殊に、夫の肺患に罹るや、藥餌療護、手を盡すと雖も、終に起ず、其の間、屢不幸に遭遇せしも、克く艱難に堪へ、纖手家計を支持し、益舅姑を慰藉し、專心孝養を怠らざること、茲に十一年、志操一日の如し、誠に奇特とす。仍て、爲其賞金三圓下賜候事

明治三十二年八月十四日

つねゑは、宮城縣登米郡上沼村平民千葉元洋の長女にて、明治二十年同郡吉田村の高橋千代之助に嫁ぎしが、舅千代治は 明治十九年の二月より中風症にかゝりて、病の床にあり、同じき廿四年の十二月中、姑かん女同疾にかゝりたるを以て、つねゑは、夫と共に慰藉奉養をつとめ、日夜看護到らざる處なかりき。されど、舅姑の病は、やう〳〵重くなり、加之夫千代之助も、明治廿七年の九月頃より、肺疾にかゝりたれば、つねゑは、一倍の辛苦を増しぬれど、いよ〳〵心を勵まして、看護をつとめぬ。さるを、あはれむべし。千代之助は、昨三十一年六月廿九日、つひに身まかりけれど、つねゑ女はいさゝかも心屈せず、舅姑に對して奉養看護に、いよ〳〵心を竭せり。あはれ身富裕にありてすら、かくの如きさまにいたれば、猛き心もひるむべきを、つねゑの一家には、その嫁ぎてよりこのかた、從弟清助は明治廿二年に、次男政夫は廿四年に、伯母ゑいは廿八年に、從妹はると、伯父萬藏とは廿九年に、四男鐵藏は卅二年に、いづれも病死し、長男陳平と、三男寛治とは卅年六月游泳中に溺死して、現今は舅姑と、伯父義藏が遺孤はしめとを餘すのみなれど、つねゑは、かくの如き一家の悲しき運命をまのあたりに看ながら、貧窶にも撓まず、赤貧洗へるが如き中にありて、節操いよ〳〵固く、他人の勞役に服して、いさゝかなる賃錢を得て、纔の糊口の資と藥餌の料とに充てつゝ、

辛き世を渡れり。以つて女の鑑とすべし。

●孝貞　片岡枝茂子は、熊本縣、肥後國、菊池郡、隈府町、大字、亘の平民片岡又十か妻なり。實父は、菊池郡、正觀寺村、古城立七といふ。枝茂子は文久二壬戌年舊熊本藩主より賞與せられたり。

菊池郡河原手永輪足村、又十妻

枝　茂

右者兼々心得方宜敷、第一夫へ能く事へ、老年の舅近年病氣に付て、看病行屆き、質素節儉を相守り、農業致二出精一近隣の交も深切に有之候に付　被賞、鳥目七百文被下置之

文久二年正月二十二日　奉　行　所

枝茂子は、文政十二己丑年の出生にて、今年七十一歳なり。（佐々豊氏水報）

●嫁のかゞみ　長野縣諏訪郡、上諏訪町字湯之脇旅宿業亡河西忠右衛門の妻女おふみ（五十七）と云ふは、同町字榊町、河西本左衛門の妹にて、安政五年に十八歳にて、忠右衛門に嫁したるが、性質温和にして、姑夫に能く事へ、且つ人の意に逆ふ事なく、一昨年の秋より、姑れ勝が、蹇痲質刺に罹り、殊にお勝は、八十餘歳の高齢とて、病後は、毫も、身の自由を得ず、殆ど、木偶の如くなるに、お文は厭ふ氣配もなく、日夜、其の枕邊に付き切りて、甲斐々々しく、看病を為し、且つ、姑、お勝の意を迎へて、少兒を見る如くに、種々慰み業を試みて、孝養を盡し、お勝の死後は、最と懇ろに、菩提を弔うて、始終を全うせしと云ふ。姑嫁、猿犬の諺にも似ず、生前死後に至るまで、孝道を盡しゝは、此れ亦、嫁たるものゝ龜鑑なるべし。

●孝女　島根縣莊原村福田こま（十九）、疾く、父を喪ひ、一人の病母に孝養を盡すこと八年一日の如し。同村敎員生徒三百餘名は、大に、其の善行を賞揚し、羽織地、一領を贈れりと。ひめたち、皆、このこまのでとく孝ならましかど、いかに、世は樂しきものならむを。

●貞淑　大分縣膳所かず、夫の病を看護すること三年、死後、獨力家政を處理し、遺子二名を鞠育して、各學業に就かしめ、曾て、他人より後指をさゝれたる事なし。一鄕其の貞淑を賞し、婦女等、仰で以て師表となす。此も傳へざるべからず。

●陰德家　盛岡市に於て、近來物價、頗る騰貴して、細民の困難一方ならざる狀況を察し、匿名を以て、金五千を圓巖手日報社に投じ、分配方を依賴したる者あり。世は皆、あなる名、或は、聞をのみ求めて、何ども物する中に、さてもうるはしき心なるかな。

●舊恩に報ゆ　岐阜縣小阪町佐藤整信州を經て、上京途中、病に犯され、群馬縣五十嵐勘衛方に雇人となること九ヶ月、徵兵檢査に合格し、近衛砲兵隊に入り、上等兵となり、遼東及び臺灣に轉戰し、負傷して國に歸り、小阪町郵便局長代理たり。此の頃五十嵐の妻、病死の報に接し、急行、喪に會し、舊恩に報ゆといふ。人は一粒の飯にも報いざるべからず

●樂しき家庭　伊豫松山の石工にて鴻田佐太郎男女五人の子あり。一家輯睦五子相勵して、父母に奉事し、長男より順次年少者に、讀書算術を授け、又、年齡に依りて、仕事を分擔し、一家中、曾て、荒き言葉を發したる者なく、家道日に豐かに、近隣羨まざる者なし。子をして、暗涙を呑ましむる親、親をして、常に心配絕えざらしむる子供、斯くも樂しき、家庭のはなしをきゝても、うらやましうはあらずやいかに。

●麒麟兒　石狩空知郡船本丈夫、年六歲、性怜悧活潑、未だ、就學せざるに、既に尋常小學三年生の學力を有し、群兒と戲るゝ時は、必ず、大將となり、年長者と爭ふや、勝を得ざれど、野外に臥して、家に歸らず。又、單身、各地に旅行し、用向と住所とを告げて、警官に案內を乞ふ。人、皆稱して、麒麟兒と云ふ。今樣に、十歲で、奇童といひなされ、廿歲ごろには、才子なり。三十歲、四十歲もすぎぬれば、たゞ人なみのはげあたま。麒麟たらむも、駑となりて、老いむも、た

い、幼きよりの教へ導きやうにあり。注意せざるべからず。

●珍らしき菊　静岡縣芝田佐吉、菊を作るに妙を得、毎年、珍花を咲かしめて、人を驚かす、今年、亦、三花壇を造る中に、一根九百二十輪の、大なる花を持たせたるあり。觀る者驚かざるはなしと。

●韓國烈婦　朝鮮國江原道の李允植の妻、鄭氏、其の仲兄李忠植が瘧疾に罹り、病危篤に迫るに當り、股肉を割きて、之を湯服せしめ、幸ひに、病癒ゆるを得たるが、後再び中風症に罹るや、又々指を斷ちて、血を服せしむれども、終に不歸の客となれり。鄭氏は慟哭喪に籠り、數月の間外庭の殯所に居て、專念追遠伸孝の道を盡す。外つ國のことながら、又、あまりに烈にすぎたれど、今日の人心をおもひ合すれば、うちすてがたくて、こゝにをさめつ。

●ペスト防豫法　嘗つて印度支那等にて、流行する由を聞きたる時だに、身の毛をよだてたりしペストは、不幸にも、神戸にて發生し、稍々蔓延の兆さへありと傳へらる。今、其の豫防法を聞き得たれば、左に掲ぐ、如何に、其の危險、虎烈拉、赤痢にも過ぐるとはいへ、人々相共に衛生をつとめ、豫防に怠なくば、流行蔓延せしめざる樣にするも難きことにはあらざるべし。唯人々の注意如何にあり。

▲ペストの徴候　感染後二日程を經過すれば、頸腋下、股等にグリ〳〵を生じ、之れに痛みを感ずると共に、忽に發熱し、頭痛を感じ、關節ダルク、次第に熱を増すと共に、苦病烈しくなりて、重きは、發熱より二日位にて死亡し、稍々輕きは、三日乃至四日位存命するを得べく、若し中途にて患腺膨脹し、化膿するときは、或は治療の効なきにあらぬも、十中の八九は死を免がれぬものと知るべし。

▲病毒の侵入所　ペストの病毒は、重もに、創口より侵入するものにて、多くは足部よりす。其の他手、又は、呼吸器より入ることあり。故に最も、之れに罹り

易きは、跣足にて歩行する人、呼吸器に故障ある人、手先などに創ある人にて、流行地に於ては、塵埃中に在るペスト菌より感染することあり。又、鼠より傳染することあり。流行地より輸入せる襤褸より生ずることもあり。

▲其の豫防法　其の豫防法としては、患者ある家と交通せざること、汚穢物を遺棄すること、衣服臥具は、能く日光に曝し、其の汚れたるものは洗滌すること等、一般傳染病に關する注意を怠るべからざるは勿論、特に、左の諸項に注意せざるべからず。

一、跣足にて歩行せぬ事　跣足は勞働者等に多く見る所なれど、ペストに取り、これ程危険なるはなし、跣足にて歩行する人は、自分は氣付かざれど、自然足の裏に傷を生ずるものなれは、病毒は、遠慮なく、此創口より侵入すべし。

一、創所の手當　手足に限らず、總て身体の極微少の創にて、別に手當を要せざる程にても、石炭酸水にて、時々、其の部分を洗ひ忘れても、其の儘に置べからず、殊に小兒には母親にて、能々注意さるゝを肝要とす。

一、鼠に注意する事　鼠は、動物中、最も、ペストに感じ易きものにて、一疋、其の病に罹れは、之れと同棲するもの、之れと咬合ひを爲すもの、皆、其の病に感じ、遂に人に及ぼすものなれは、若し、鼠の死骸を見出さば決して、之れに手を觸るゝことなく、先づ手袋を嵌め、箸などにて、他に移し、之れを燒き棄つべし、又、鼠の大小便も危険なれば、食物に混ぜざる樣注意すべし。其の他蚤、虱等も、媒介物となるものなれは、衣類寢具は、殊に注意して、常に清潔ならしむべし。

●大流星　世界が破壞すとか何とか大に人驚せし流星もさて、其の時になれば、案外にて、何事なく先以つてめでたし。山平理學士の談とて、中央新聞に出でたるを轉載す、時によりてかゝる談を記臆するも要なきことにはあらじ

◎流星の美觀　本月十四日の天變といふ事に就いてゞすか、いや是れは、決して心配するやうな事では無いので、彼の墺太利のフワルダといふ僧さんが、新聞か

なにかに出して、事々しく說き立てたものですから、或は地球が破壞されてしまふとか、或は彗星と地球が衝突するとか、大層心配するものを出すやうな事になつたのです、が、斯ういふ事は、今始めてあるので無く、已に天文臺などでは、充分承知して居る事で、決して、危險な憂ひはありません、獨り危險の憂が無いのみで無く、實に美觀だらうといふ事です……勿論、私はまだ見ない談で、而かも、尙は確然としたことは知れ無いもの丶事ですから、斯うあるとは言へませんが、確に斯ういふ現象があるべき筈です、是れは卅三年四分の一毎に、此の現象があるので今年から三十三年前の千八百六十六年の時にもあり、また千八百三十三年にも矢張り斯う云ふ事があつたのですね、そして、其の記錄を讀んで見ますのに、餘程美觀であつたやうです

◎流星の數●●● 是れは、此處にある此の圖のやうで（精密なる圖を示されたれど新聞には兎ても精細には寫し能はねば兎に角其の大星の形のみを描き置きたり即ち圖の如し）星が固まつて居るらしいですね、其の四方へ飛んで居るのが、皆流星なんです、斯ういふ風ですから、明に見る事ができれば、餘程美くしいものだらうと思はれるぢやありませんか、千八百三十三年の時なんかは、其の飛ぶ星の數を算へたらば、丁度三時間に七千もあつて、六時間の流星の數は、兎てもかぞへきれなかつた相です

◎流星の本体●●● 此の流星の本体は何んなものであるのだか、未だ知る事はできませんが、併し、其の大きさは、極く小さなものです、是れが落ちて我々の地球に達したらば、面白い研究もできるのですけれども、ずつと以前から、斯ういふ現象があつて、流星が夥しかつた事は幾度もありましたが、何時も、それは途中で消えてしまいました素より、流星の光の發しるのは、空氣に觸れてからの事ですが、是れは、屹度其の途中でヽすね、焰えてしまふものだらうと、思ひます、こ

んなものですから、如何に多くの流星があつたからつて、更に驚くことはありません

◎驚愕の手紙　大分、此の事に就いては、心配して居るものがありますかして、寺尾さんへなり又天文臺へ、態々手紙を送つて、一体是れは何ういふものであるか地球が破壊するといふやうな事は無いか、衝突は眞個にあるのかと、何人も尋ねて來るものがありました、此の現象を來たす譯ですが、それは斯うです……

◎地球と流星　卅三年めに來るといふ現象は、即ち此の圖のやうで（是れも大略を寫し取りたるに止まれど說明に便なる爲め此處に揭げ置く、楕圓形をなせるは是れ地球の軌道にして白點は即ち地球なり外の彎形をなせる線は彼の流星の軌道にして黑點は即ち大流星と知れ）此の流星が圖中の處へ來る時、丁度地球が其の軌道をめぐつて、此の點へ來るのです、其處で衝突する、破壊するといふやうな說が起つたのですね、併し、斯ういふ星は、幾らも他にあつて、此の八月にも、矢張りこんな樣な現象を來しました、簡單に言へば、誰れにでも能く分るやうにと言へば、其の譯は、先づ斯うですね、……流星の運動ですか、……さやう、此の流星も斯ういふ軌道を通つて、常に動いて居るのですよ

◎彗星と流星　此の流星が、何ういふものであるかといふことは、餘程むつかしいことで、何は慥に知る事はできませんが、今年も、丁度此の流星が通つてから、一つの彗星が見える筈なので、或は此の十一月の流星なるものは、彗星の集まつたものか、或は彗星の頭か、尾か、兎に角彗星の一部では無いかといふ議論で、何うもさうらしく思はれるです、彼れ是れと言つても、此の十一月の流星の事については、何しろ地球に大關係があるといふ事でも無いのですから餘り力を用ひられては居りません

◎流星の研究　が、此の十一月の流星の事を、色々と書いたものもありまして、それを讀んで見ますと、いよ〳〵此の大流星は、彗星の一部分で無いかといふ考

へを高めます、或る人の研究で——ずつと前の事ではありますが、一つの慧星があつて、夫れを能く見て居ると、或時は一つとも見えるし、其の次には、また夫れが二つに割れたやうに見えるし、また其の次ぎには、非常に、星が降つて來たといふやうな事が書いてあるのです、研究すれば、餘程面白いものであるかも知れません……此の星が我々の眼に見える時と場所ですかさやう、その現はれる處は、丁度此の邊にあるのです……………

◎流星群の位置　此レオニック群星の、われ〳〵の眼に見られる時の位置は、さうですね、此の圖が無くつては一寸分りませんが（左の圖は即ち其の一部分を目分量にて寫し取りしものなり）……上の方にあるのは、是れか北斗星で、其の下に七つあるのは七曜星です、そして、其のズツと下に、二個の大きな星があるでしやう、此の二個の星の中半―少し横の―處に見える星即ち此の黑點が、レオニック群星なのです、ですから、北斗から七曜星の中半二つを通してゞすね、更に直線を引いて來ると二つの大きな星がある、その星の横を見れば可いのですよ

◎見得る時間　流星の見えるのは、十三日から己に接近して居るのですが、最も能く見える時間といふのは、十六日の午前三時頃で、定めて此の時は盛んに星が降り、非常の壯觀を天の一方に見られる事ができるだらうと思ひます、併し、此の流星の見えるのは、十三日から十七日までゞすから雨が降らず、空さへ曇らなけれども、五夜ながら見る事ができるのです

◎素人の觀測　斯ういふ事ですから、世間でも、大分氣を注けて見るだらうと思ひますが、其の序に觀測をやると可いですね、たとへば、星の飛ぶ數を算へて、廿分の間に幾つとか、最も澤山飛んだのは、何時何分だつたとかといふ事を、觀測するのです、是れならば、誰れだつて出來ますからね　（圖觀測談とは次號に）

●ペストの蔓延各地の警戒　ペストの豫防法につい

ては、別項に記しゝが、蔓延の兆ありといへど、注意のために、猶かき加へつ。いづれも〳〵、心して一日も早く、撲滅せしめむことを期せざるべからず。

▲神戸出張中の警視廳第三部勝見第一課長より、十六日播州飾磨に疑似症一名發生すと、山根第三部長に宛て電報ありたり。

▲大阪のペスト豫防　梅田停車場川口波止場等に臨時撿疫部出張所を設け、嚴重なる取締を爲し、市内に大清潔法をも執行する準備中なり。

▲神奈川縣警察とペスト　昨日午後一時より、市内の各署長を警察部に召集し會議を開き、外國航よりする者は長濱撿疫所有ど、内地航海船には何等取締り非ざるより、水上警察署をして、入港船を取締り、棧橋に繋留せしめ、上陸者は一々診察を爲し、各警察署に衛生主任を置き、衛生上に關する諸般の取締りを爲す事、尚神戸より横濱に下車する旅客に就ては船舶より上陸するものと同樣の取締りを爲す事等に就き審議したり。

▲ペストと横濱の勞働者　ペスト地方を經由し、横濱に入港する貨物も尠なからず、勞働者の手を要する者多きを以て、波止場人足の如きは、成るべく跣足を禁じ、萬一の襲來を防がんとて、市役所より勞働者の多き衛生組合に向ては、特に注意を與へたり。

▲ペストとベルツ博士の注意　ベルツ博士は、書をジャパンメール社に送り、神戸に於ける黒死病の源因は、何れより來りしや、知る能はざれど、或は内地に流行を見るやも知る可からず。全體日本の家屋には、鼠の至つて多きが、此等は彼病毒傳播の媒介上、最も危險なれど、毒藥、又は、猫を以て、急に鼠族を絶すを勉む可しと言へり。





教の庭

十一月廿日兼題　仙人

天　　　甲府市山田町　名取正代子

ちりの世にたつさはりなき仙人は
　おのつからにや千代も經ぬらむ

地　　　長崎市西山七十一番戸第二號　日高かず子

仙人やよもきかしまにかへるらん
　なみ路をわたるあしたつのこゑ

人　　　石川縣金澤市油車六十三番地　永山豐子

ふしのねの高きよはひの山ひとは
　へにけんとしをしるやしらすや

秀逸（七首）

松やしる鶴もやゑらんやまひとの
　みねのいはやにいくよへぬると　松山　長谷川松衞子

春秋とかはるうきよをよそにして
　おいさへゑらてすめるやまひと　下谷　椎野ぬき子

鶴にのりくも路をたとり遊ひつゝ
　たかきよはひをこゆるやまひと　三河　石川久子

あし鶴にのりて雲井にゆくもあり
　ひとはいかなるみちをふむらん　肥後　黑田明子

仙人はれいすゑなすのくすりにて
　いくたひつるをかひならすらん　肥後　友永章子

いはの上の松の千年もやまひとの
　こゝろにはなほみしかゝるらむ　三河　永井さい子

浮世をばよそになしつる仙ひとの
　千代のすみかやいつこなるらん　肥後　田代艶子

（以下原稿到着順）

しら雲のふかきたにまのいはむらに
　やまひさいかにさしなへにけん　石井登子

仙ひさのくすりたくらんくもふかき
　みやまのおくにけむりたつなり　立田原富子

ちりの世をさほくへたてゝおく山に
　こゝろしつけくくすりたくなり　立田原直子

しらくものかゝる深山にやまひさは
　いく千代かけてくすりたくらん　田代綾子

世をそむきたにまにすみて我ひさり
　しつかに德をつみやすらん　金子苔生子

木の實食み水の葉まさひて仙ひさや
　なにおもひてにのりをさくらん　佐加井さき子

世をすてゝおのかまゝなる山ひさも
　身にしむかせはさむけかろらん　那須昌子

かきりなきよはひのさけさやま人も　村崎包子

うき世のほかにくみかはすらん

峰たかみ今日もけむりのたなびくは
またやまびとのくすりたくらん
下田鉛子

老もせていけるくすりや得たるらむ
くもゐるやまにいくむふるひと
山田稻子

よのうさをよそに見なして幾千とせ
身をやまふかくすめるやまびと
中村壽枝子

年つきのたつをもしらでやまふかく
ともなふものはまつにすむたつ
服部倫子

雲にのりこゝろのまゝにかけるとふ
うへやまびとはたのしかるらん
佐々小[illegible]子

三千年になるてふもゝのみをはみて
くものかけはしわたるやまびと
佐々有鄰子

はるあきのくるゝもしらでやま人の
たなひくくものうちにあそばん
東野さく子

のりてゆくたつのはごろもきる人は
くものあなたやすみかなるらん
河村君子

田鶴かせにうきよのちりを見下して
うらやましくもあそふやまびと
山根久子

みやまつのいはまにすめる仙ひとは
こゝろのいかに深くやあるらん
坂田彌代子

くも深きたか嶺にけふもくすりほる
仙ひとやあるたづのこゑすなり
佐加井みよ子

あしたづにのりて通へるやまびとは
世に知られざるよはひなるらん
志葉田久子

世をうしと山にいるひといかばかり
たのしかるらむすみよかるらむ
羽室象子

世のうきをしらでさきはの山おくに
よはひをのぶるひとぞやすけき
徳永萬壽子

さきはなる松にならびてはるあきも
しらで世をふるあはれやまびと
小森田輝子

うきことはしらですぎにし山びとの
こゝろのおくやくまなかるらん
澤田春子

おもひいるみ山のおくにすむひとは
よはひもながく千代やたのしむ
澤田染枝子

いのちさへあかむとすらん仙ひとの
老いすしなすによをすくしなは
横山柳子

そらにふくたよりまつとふ仙ひとも
あらしさきかはなにこゝちせん
横山寸賀子

風さむみよし野のおくのやまびとは
更け行くつきをいかに見るらん
加納鈴子

世をのがれつきゆきはなをともとして
こゝろおきなくくらすやまびと
勝河照子

みつのしますむ山びとのよはひこそ
まつとつるとにひとしかるらめ
木谷ひで子

つるかめのよはひかされてはる秋を
しらでとしふるふじのやまびと
大谷美子

はる秋のながめをよそに三千とせの
よはひをまつにちぎるやまびと
石川ろい子

とことはに鶴とかめとをともとして
あそぶやまびと老いせざらまし
石川樂子

三千年も老いせのさきくやまびとの
のむさけわれももとめねまほし
石川南江子

雲にたつけふりのもとややまびとの
くすりたきぬるいはやなるらん
竹村竹里子

菊のつゆ作くくすりとやなりぬらん
わらはながらに千代をふるとは
上田みどり子

むかしより千代のよはひを重ねつゝ
戸塚文子

もゝのはやしにあそふやまひと

あし田鶴にのりてあそべるやま人の
こゝろやいかにたのしかるらん
戸塚鐵子

あめつちに身をはたくへてやま人の
こけのいはやもすみよかるらん
内田さく子

みちとせにはなさく桃をかさしにて
かすみのほらに住むややまびと
諸井くり子

くたり來しそのやま人もたをやめも
あなはつかしとおもひたりけむ
伊藤千代子

やま人はいつこのおくにこもるらむ
ひらくる世にはみしひともなし
伊東いと子

ひと日にはいく千里をやかけるらむ
たつにのりてもあそふやまひと
河合縫子

ひとしらぬ法をとかめとやまひとの
ちりの世さけてすまふなるらん
富田嘉子

白きくのおふてふやまにすむひとの
ちよのすみかやいかにのどけき
宮武文子

くもにのりかすみに浴みてやま人の
老いせでいく世住みわたるらむ
目黒佐喜子

あしたづにのりてかよへるやま人の
こゝろやいかにのどけかるらん
荒木なみ子

ありかさへつれにいづことしら鹿の
ながきよはひをたもつやまびと
都水春子

うらやましとほくはなれておく山の
かぜと月とをともとする身は
横手こう子

人里をさけてしづけきやまのおくの
つきゆきはなに千代や經にけむ
今井まん子

くもとはたかすみをのみて時のまに
よもきかしまにかへるやまひと
青木たま子

さしなみのおもてによせぬやま人は
いはやのきくのつゆやのむらん
賀茂笹子

まなつるをさゝとなすてふやま人の
千代のかすこそしられさりけれ
服部蔦子

やま人もおいすしなすのくすりをも
ありとはきけとみるよしをなみ
加藤數子

言の葉にありときゝつるやまひとの
むかしのすかたみるよしもかな
由井浪子

つるにのり雲にのほりてやまひとは
うき世をよそにすみくらすめり
二宮春抜子

はるあきを知らですごせる仙ひとは
ときはのまつをかさしとやする
福原菫子

やまひとは山のいつこにいほしめて
老いす死なすのくすり堀るらむ
名取よし子

ときはなるまつにも老はあるものを
老いす死なすややまに住むひと
坂田喜美子

あたらしきみ世となりては仙ひとも
見るべうもなくなりにけるかな
高芝すみ子

峰たかきくもまになにをなかむらん
うちはかざして立てるやまひと
北原季子

しらきくのはなさく秋をいくちたび
くりかへしけんとこしへのひと
八木沼里子

あしたつにのりて行かふやまびとの
とまりやつきのみやこなるらん
戸倉信子

み空とふたつをなつけてこゝろをも
みをものせつゝあそふやまびと
藤村幾子

やまひとのゆくへやいつら雲きりに
まかひてとほくあそふなるらん
吾妻ちか子

色も香もつきぬためしに引きいてて
綾脇ます子

うれしきあきのきくのやまひさ

さきの間に海路わけつゝふれよせて
よもきがしまにかへるやまひさ　伊賀なを子

千代よろずかはらぬ松のさしなへて
みやまかくれにすめるやまひさ　山田きよ子

たにかはの音のみさもさやまひさは
世をしらくもにかくれてぞすむ　田中睦子

春あきもしらでさしふるやまひさは
さきはのまつぞちよのさもなる　牧瀬かう子

さひみはやいつのよなるか仙ひさに
みれのおひまつふたはなりしは　羽田三緒子

みち年の長きつきひを知らずく
はこやのやまにすめるひさかな　三木露子

くもにのり風をおこしつやまささに
住むひささへやたのしかるらん　駒澤松子

よをいさひ酒もたばこもうちやめて
ながいきせんさいのるやまびさ　渡邊三子

世をのがれ三山がくれにすむひさは
つれにはなみるこゝろなるらん　川口德子

をのの柄もくちはつるまで年をへて
やまにすみけんひさもあるかな　中原虎子

うきこさをわすれてすめる山びさも
しげきよわたりくらしかぬらし　佐藤三子

おほそらを行きかよふてふ仙ひさの
いへゐはくものいつこなるらむ　岡村多豆子

あしたつにのりてみ空もかけるてふ
やまひさこそはうらやましけれ　村上みさを子

やま人のこしにそへだるたのしさは
そのなりくのさけにこそあれ　萩原寧子

うつゝ世のうきをのがれし仙ひさも
木のはふるよはいかにきくらん　中澤千野子

ひさかたの雲井にあそぶやまひさは
うきさししらで千代や經ぬらむ　山田靜子

萬代を經さもおいせぬやまひさの
すみかはいつこたつね見まほし　山田婦美子

鶴にのりくもゐをかけるやまひさは
こゝろやすくも世をわたるらん　德永廣子

十一月廿日兼題　新嘗祭に客を招く文

天　香川縣高松市田町二丁目二百八十五番戸　宮武文子

時雨降る神無月の末つころとなりぬれば、足り穂の稲のなべてみのりつゝ、蒼生のよろこびにたへざる時なりけり。されぞにや、わが大君には、かむみてぐらを、あまつかみくにつかみにまつらせ、ことしの新しねを捧げて、ことほぎ給へることは、古よりの例にてぞおはしける。われらも、公民の末にくは、りたるものなれは、此のみまつりの日をよろこびむかへて、遠近のうから、友垣などをうちまねき、手製りのにごりさけ、園生に生ひたるくさくのものどもをとりあつめ、さては、琴三絃唱歌洋箏などの合奏をもして遊ばまほしうなむ。同じくは心のともと、うちとけてと思う給ひ侍るを、もしうべなひたまはずは、あたら庭の白菊も、薫をうしなひ、櫨の紅葉も色あする心地やし

侍らむ。いでやかひあるかへりごと、とみに聞かせたまへや。あなかしこ。

地　山口縣都濃郡末武下村　村上みさを子

あすは新嘗の御祭とて、ことしの新穀もて、神の御前に新嘗たてまつる日になん。今は、わせもおくてもかりはてゝ、秋のたのみもおぼつかなからず。されど庭のきくのさかりは、過ぬれど、紅葉の色は、一日〳〵にこくなりゆく頃なれは、この時をも、いたづらにすごすべきにあらず、いざと硯ひきよせて、したしき友のかたにことすくなに、明日はかならずときこゆる、ふみのはしに、

わせもかりおくてもかりつ新ざけを
　しぼりて君を今はまたなん

といひやりつるを、其のかへりことを、いかにとまつもをかしくなむ。

人　伊豫國松山市三番町　由井浪子

あすなん神代ながらのみわざとて、新なへをかしこかれどわか　大君の親ら　皇大神の大前にたてまつらせ給ひ、御饌にもきこしめさせ玉ふとかや。かくもかしこき日にしあれど、賤かやの、そをまなぶとにはあらねども、初しねを、神の御前にそなへ、かはらぬ御代のゆたかなる宴をひらかんと思ひ立ち侍りぬ。御さわりもおはしまさずば、立ちよらせたまへや。御つれには、中垣のへたてなき方〳〵のみなれは、じきによりては、うたの席ももよほさまほしく、かへすぐ〳〵も、御車めぐらし玉へよ。あなかしく。

（以下原稿到着順）

中村さく子

春もすぎ夏もくれ秋も早や殘り少く相成候處、あなた樣には、如何に渡らせ給ふらん。こゝ許、皆々つゝがなくすごし侍れは、他事ながら御心やすめ給ひてよ。さて、こゝ許、今年は、近き年に、まれなる豐年なりしも、治まれる御代のおかげと、こゝに當年の新穀を奉獻し、新嘗祭を期して、豐けき年を祝ふと共に、祖父の賀致し度、何も御座なく候へど、祝酒一こん差上度、夕つ方より、御令孃樣、御つれまし、御來臨の程、ひたすら待入候。あまりは、御目もじのふしにと讓とめ。かしこ。

河村君子

かけまくもかしこき、十一月廿三日の新祭嘗には、神宮總裁賀陽宮殿下にも、當地に御來臨あそばされ、その祭典、いとおごそかの由聞き侍る。まいて、我が地も、當年はことの外豐饒にて、いさゝか新穀の祝ひ致し度侍れば、是非とも御こし下され度、かくはまれき奉るになん。かしこ。

河原芳子

錦さばかり照り匂ひし紅葉々、今は殘りすくなにちりもてゆき、籬の菊花、色やう〳〵うつろひ、吹きすさぶ木枯しの風、いとゞ身にしみわたる昨日今日、御許には、いかにすぐさせたまふらむ。すこやかにましますとは、先つ日の御玉章にて承りはべれば、いみじくよろこばしきことにこそ。なほ、豐けき秋のさまなどかきそへたまはりしが、其の樣、まのあたりみたらんごとく思はれつ。國のため、はた御許あたりの土地のため、いかにめでたきこととならむと、よろこびてうわさし侍りてなん。さて來る二十三日は　兩大神宮の新嘗祭にて、かしこきのり

の御使などわたらせたまひて、行なはせたまふに、近きわたりに、なかしき催しものなどあることなれば、さぞにぎはしく候はんな。いそがはしうはおはしまさんが、この御祭を幸ひに、せひ〳〵御こしれがはまほしくて、かくなん。かしこ。

二宮春枝子

今日は、新嘗祭にて新穀を　天皇陛下親ら　皇大神にすゝめさせ給ひまた御親もきこしめし給ふいともめでたき御祭の日にし侍れば、いづれも軒端に日の御旗かゝげて、ひたふるにことほぎ奉るなり。されば、わらやの軒も、いさゝか祝のまうけなくてやは。見處もなき庭の菊も、ときにしあれば、老せぬ秋をほこりがほに、今を盛りと咲きいで、木々の梢は紅葉して、赤き心に、君が代を祝ふやうなるに、何となうこゝろもすが〳〵しうおぼね侍る。かくめでたき日をむなしうすぐさんも、くち惜しきわざに侍れば、おもふどち打つどひ、おきあまる思の露に、水茎をそめて、ほぎ歌さゝげまほしう、硯短册抔とりそろへ、誘ひ參らす。いかておぼしたゝせ給はずや。御はらからたちにいざなはせ給ひて、みくるまよせたまふとの仰言のうけたまはらまほしう、かうおごろかしまゐらするになん。かしこ。

佐々有鄰子

足引の山ふところの、柴の打戸も、波うちよするあまが伏屋も、今日の吉日の足日は、朝廷の新嘗祭日なれば、旭旗押立て、あからひく朝より、すみそめの夕にいたるまで、心々に供奉りし、新穀の米粟をはじめ、酒魚を、わが氏神の廣前よりおろし侍りて、うからやから、へだてなき友どちうち集ひて、宴席をひらき侍れば、御親父樣、御母公樣をも、御一同に御來車のほど、くれぐれも御願ひ上げ侍る事のよしを、貴娘樣より御とりなしをねぎ奉る。無禮のわざとな見すてたまはで、正午時ころに御着坐のほどをねがひ侍るになん。あなかしこ。

徳永廣子

昨日まで、千種の花さかりなりし、野邊のけしきも、いつしか面かはりて、さびしくおぼねはべり、今日しも新嘗祭に をはしませば、豊にみのるたなつものを、　皇大御神の大前に供奉りて、　天皇のみみづから御祭の式を行ひたまへる、吉日の足日なれば、伏屋の田廬も、氏神に新穀の　粟を供へ、おろしの神酒、まゐらせたく、おもひ侍るに、此のころの時雨に、四方の木末も、紅の錦ひきはへしここちし侍れば、皆樣御そろひ入らせたまひてよ。御歸さは、道すがら、紅葉の木かげのみに侍れば、御遊びがてらに御來車のほどまち奉るになん。あなかしこ。

中澤千野子

今日は、我　天皇陛下親ら新米を　皇祖太神にすゝめ玉ひ、御親らもなめさせ玉ふ、いとも、目出度御祭りの日になん。されば、昨日迄、山に畠に、いとまなかりし山里も、戸毎にかゞへる日の御旗に、朝日花やかにてりあひて、常はわびしき賤が家も、萬代うたふ歡の聲、滿ち渡りて、年の豐かなりし樣、推しはかられて、いと〳〵嬉しうなん。さるからに、我身も心あひの友二人三人打集ひ、新しぼり汲みかはしつゝ、はるかに、尊き大御惠を仰ぎまつりて、此の、よき日を祝ひ樂しみ侍らんとてなん。何も御もてなしは御はし侍らねど、ひるつ方より入らせ玉ひなんや。山家料理の新なめも、また、御慰みになり侍らんかとて、こふ懸かし侍るになん。あなかしこ。

稲原菫子

十一月二十三日は、新なめの御祭りとて、しろしめすごとく、かけまくもかしこけれど、禁中にては、今年の新穀を、　皇大神宮にすゝめさせ給ひ、御親らをもきこしめさせ給ふやふ、いともめでたき御日なれば、大御惠みの露にうるほふ民草の、賤が伏屋も其の日はことほぎまつらんため、形ばかりながら、祝ひのむしろ開かばやと思ひ立ち侍れば、よしや君には、外樣にかれ事おはしますとも、まげて御車をめぐらし給ひてよ。まづは案内まで一筆かくなん。かしこ。

名取正代子

知らせ給ふ如く、あさての廿三日は、かしこくも、我が　皇帝陛下の御親ら今年の新穀を、皇祖大神にすゝめさせ給ひ、又、御身みづからも、皆

めさせふ　いともめでたき御祭日に侍り。さても雲の上の御有様は、推し量り参るだに、なか／＼かしこうこそ。かゝるめでたき御日なれば、おのれら、下々の民草も、いかでことほぎ参らでやはと思ひ侍るまゝに、賤が家にても、例の親しき、たれがし、くれがしの君、打ち招きて、いさゝか、うたげのむしろをひらき、御祝の心ばかりを表しまゐらせて、折よくも今をさかりの菊の盃、とり／＼にくみかはさばやと思ひたち侍り、いかで、其の君にも、御子様方御めしつれさせられ、午過る頃より、是非に御車まげさせ給ひてよ。さしたるあるじまうけは侍らねど、たゞ／＼、ことしの新稲のみのりよきを、餅飯にものしてまゐらせたく、さては例の面白き合せ物などして、心ゆくかぎり、此の日をいはひまつらんの心ざしになん。まげてのぞませ給はらば、こよなううれしうこそ。

坂田彌代子

何時しかとまち遠かりし菊の花も、今はおほかた、なごり少うなりつらん。さるを、霜にのこされて、ところ得がほにわが庭に匂へるさま、いとあはれに見侍りしも、かく奥まりたる伏屋は、とふ人更に侍られば、花の心もいとほしくおもひ侍りぬ。折しもあれあすはことしの新穀を、天皇陛下御親ら　皇太神宮にすゝめ給ひ、御親らもきこしめさせ給ふ御祭の日になんなりぬる。されば四方の民草は、日の御旗高くかゝげてひたぶるに、ことほぎ奉る、いともたうときかぎりなり。そも我國はみつほの國にて、米をもて、我等人草の命の種とすれば、かしこくも、世々の　帝ことに大御心を用ゐさせ給ひ、とし／＼、秋のみのりを祈らせ給ふなるに、ことしはすくなからぬ、風雨もありしことゝて、皆人みのりのほど、おもひわづらへるも足穗の稲を刈りあげ給ひて、御祭を行はせ給ふとは、うれしきかぎりになん。かゝるたふとき日にひとりすくさんも本意なければ、二三人の友がきよりつとひ、こん年の祈事もし、海山の御話もせまほしく思ひたちはべりぬ。何のもてなしも侍られど、午前十時よりふりはへさせ給ひてよ。もしいぶせき所をしもいとはせられずは、宵にわらはのよろこびのみかは、菊の幸それいかに。

八木沼里子

ことしはわきて、雨風の災多かりしものから、たなつもの、みのりいかにと、皆人の、おもひわづらへるも、杞憂とやらにて、八束穗の足穗の稲の、こゝかしこ、ゆたかにとりいれられけるは、げに、大御代のみめぐみありがたさに、むせぶのほかはあらずなん。されば、來る十七日の神嘗祭には、初穗を、大神のみまへにそなへまつりし後、うからやからうちつとひて、この豊年をいはひまつらんとす。あはれ、御許にも、御老人様御とも／＼、午後三時よりふりはへくるままげさせたまはんことをねぎまつるになん。あなかしこ。

長谷川まつゑ子

時雨がちなる此頃、いよゝ御平にこそ。けふはことしのとちめの御祭とて、門毎に打ひらめく日の御旗のかげ、世をうき秋のけしきともなく、いとのとやかに見渡さるも、實に治まる御代のしるしになん。かしこき御あたりの、神代ながらの御有様まねび出さんも、なか／＼おほけなくかしこけれと。下が下なる身にも、人なみ／＼に祝ひまつらはやと門田の面にかりとりし、にひ米もて、こゝろばかりのものとゝのへはへりつ。よろつとし祝きのたまひて、いそきおはし給ひてよ。さては暮ぬほとに、大御影御前に、ほぎ献奉らんとてなむ。あなかしこ。

木村きく子

いつかはと存じ候ひしかと、世の常ことにては興も薄からんと存じ候ほとに、繁かりし虫の音も枯れ、茂しかりし木々も、皆あらはに相成候て、そゞろに物さびしう存じ候を、幸明日は、新嘗祭につき、私方にても、心ばかりの祝のむしろ催さばやと存じ、又、近き邊の法師を招き、筝琵琶など承はり度と存じ居り候へば、外に御約束おはしまさずば、御祖母堂に、御姊子をも御つれ立ち御車まげさせ給へよ。私の嬉しきのみならず、法師も、此の上の面目と存じ候。先づはとりもあへず御招き迄。

菊地はゝろ子

秋野

なく虫のこゑも哀れにきこゆなり
淋しき秋の野邊の夕暮

山奥月

世をすてゝ住めるみ山の奥にさへ
つきの光はさしそへたてぬ

枯野

霜はかりあためく色もなかくに
枯れて哀れの深き野へ哉

斷魚に遊ひし紀行

元井無味子

己れ用ありて、川本の里に、やどりおれば、名にしおふ斷魚溪の、勝を探らんには、こよなき幸になん。されば、いつ和一日の閑あれかしと思ふ事、久しかりけり。此頃は、よき日和の續きしそが上に、秋のも中の事とて、一日旅にはよき頃にしあれば、けふの日曜こそ、久しき間の、望をとけん事につけて、天の賜ものなれと、一人の友かきな語らひ、相ともに、一もとの杖を曳きつゝ、川本のやどりをあとにして、そが勝景の所をさしてぞ、歩み出しける。けふも又よき日和とて、風強くも吹かず、山田のおしれ刈上る賤も、所々に見ゆ。

美くしき秋の實りはかり上ぐる
賤が笑貌にあらはれにけり

秋の事とて、路の上に、自から落くる木の實、又は木の葉など多かりけり。路は鄉の川に沿ふて、近き年築きたてられければ、小石の未だ埋もれかれし所もありたり。

新らしき道をきづかぬ里もなし
開け行く世ぞうれしかりける

鄉の川を上る小舟の數を算ひ、又は竹の筏を流す賤が、赤き毛布をかぶりたゐ、怪しき振を笑ひなごして、進み行く程に、一里を隔てたる因原の里にはつきぬ。こゝは人家五六十軒を列れ、田畠も少しは開けてありけり。路傍の小店に、暫らく休ふ間に、友の人の年魚のうるかを購ふ約をなし、懷をさぐりて金ぶくろを忘れいでしに心つき、そが約をとり消して、店の女の末に笑はれつ、草履を購ひ、下駄と穿きかひなごして、こゝより、江津に至る路をはなれて、左に入り、溪川に沿ひし路を進みしが、こゝは人の通りの少なければ、醜草路にはびこり、又いまだ調はざる所も多かりけり。二人ともに初めての路なれば、所々にて斷魚にはいくばくあると、人に尋ぬれ、又は松の木の間に見ゆる初紅葉の花やかなるをほめ、

山ひめの今しもにしき織りそむる
色は見ゐけり松の木の間に

など口づさみして行けるが、今まだ路の普請にとりかゝりて、岩けだかくわだかまりたる所に來かゝりて、進む事ならぬなり。あともどりして、下なる舊路に出てゝ、路しらぬ旅はおかしき事もあるものかと、語ひ笑て溪川のひつゝ行きしが、路きはまりほとりに出たりければ、いざ面白し跣足になりて渡りくれんと水に入れば、底なる石の滑つきて、いと危ふければ、わざと歩みをゆるめて、やうく向ひの岸につきて、又人にこゝよりいくばくやあるかと問へば、此の山を回りなばそこなりと、答ふ

ろに、いさみ立しまゝ、足の駒に鞭打て、歩みを早めければ、あなうれしや目ざしの斷魚溪はそこらに見ゆる所まで、恙なくとゞきけり。まづ一ふくと路傍に坐やく火をかりてたばこ吸付て進みしが、小き稻荷の祠あり休みもやらず、尙進しが、名にしおふ勝景はこゝにぞありける。先づ仰きみれば千丈もあるならんと覺ゆる巖は、屹として右と左のひらにそびえ立ち、其下には深靑き光ある玉の如き平かなる岩の敷きてあれば、いそぎて右の側れる岩のすそをは歩みて、そが上に出しが、こはそもいかに人ちがらもて、けずりたらん如き痕ある巖にて、中ほどに一筋岩さけて、おのづから川をなし、水晶より淸らかなる水は、勢よく流れてありけり。又所々に抒もて穿ちたらん如き、くぼみあり、こゝにも水たゞよひけり。又進みしが丸木橋あけ、そを渡りて歩む　に、小高くなりて、こゝは岩の色白く、光りさへます〱淸らかなり、その右には、けはしき巖聳片となく、そばたちぬ、其の間にかげありて、かしらより流れ來る水は、此の岩の間二丈もあらんと見ゆる下に落こむ、こゝ面白しと覗けば、あな恐しや下には幾億萬の白玉を一時に碎きたらん如き、水沫は飛上りとび下りて、そのいとちいさきは、水烟となりつゝ上りければ、折しも、日光かゞやきわたりけるに、その巖の間に虹のかけ橋ぞ見えたりける。又その水のくだくる音のものすごき事、いはんかたなし、實にこゝこそ斷魚の名ある所なれと、暫しは岩に腰かけて、魂もうばゝれて、見守りけり。こゝよりさがりて千疊敷の巖のあたり、蛇の目、手かた、七色の岩、鮎返しなど、名あるかしこゝの巖の上を　たどりつゝ、二時あまり費しぬ。

人ちからなと及ぶべき魚きりは
　神のしわざのあとにこそあれ

魚きりの淸き流れをくみあげて
　けがれし心あらひすつべし

魚きりの世にすぐれたる氣色こそ
　言の葉ぐさも及ばざりけり

音すごく水の落こむ岩ふつは
　魚きりの名にそむかざりけり

沫なして水の落こむ岩の間に
　虹のかけはし打わたしけり

實に斷魚溪のおのづからなりし、勝れたるけしきの、天か下に名高きも理なりと、二人語らひつゝ、もとの稻荷の祠に詣でゝ、上に揭けし嘉永四年皐月某かものせし、斷魚溪の賦、又は奉納の俳句をよみなどして、暫くやすらひ、いざ歸らんともと來し路をたどりつゝ、歸りには、通りきぬる路にしあれば、人に尋ぬる事もあらず、いそぎてぞ歩みけるほどに、斷魚より三をへだつる路をも、三時あまりに、川本のやどりになんつきにける。あはれけふの日曜ほどよきあそびせし　たぐひ少ければ、

秋の日の日歸りたびは特さらに
　面白くこそ覺えらるなれ

ともしびのもとに、筆とりてけふのあそびのあらましをば、かくはしるしぬ、

秋の夜の更ゆくまゝに啼虫の
　聲のみさゆる山のやどかな

女鑑十二月兼題

五日發行の分

歌　社頭落葉

文　勤倹

十一月廿三日限

廿日發行の分

歌　煤拂

文　埋火

十二月五日限

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題

姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所

姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總べて文字は分り易き樣、漢字は楷書、片假名は普通の平假名にて別々に離して認むべし。

○書式に違ひたるは總べて沒書とす。

○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得。

三輪田眞佐子著

第八版

女子の本分 全

定價 金二十五錢

郵稅 金六錢

本邦固有の道德に基きて、我が國の婦女が盡すべき本分を明にせるもの、之を三輪田眞佐子女史の「女子の本分」となす。本書が女子社會に如何に珍重せらるゝかは、世間既に定評あり。敢て贅せず。再版三版忽ちにして賣り盡し、四版五版猶需要を充すに足らず、從て出れば從て盡き、諸嬢が一日千秋を以て待ち給ひし第七版は今や漸く其成を告ぐ。購求せんとする諸子は、此の際至急申込まるべし。所載極めて廣大、試に其の目次を示さん、

目次

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

總裁小松宮大妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

大日本女學會

第三回講修期を開き
新たに會員を募集す

●本會は女子教育の普及發達を圖り賢良貞淑の品性を涵養せんことを目的とし女學の講義錄を發行して希望者に配布す●講義錄に掲載する女子必須の諸學科は華族女學校及女子高等師範學校教授其他博士等各專門名家の受持に係り初學の人々にも解し得らるゝやう極めて平易懇到に講述したるものなれば齊家保育の務に任ずる婦人の必讀の書にして殊に女學校の設けなき地方に住み又は父母の許を離れ難き事情のため志を抱きながら學ぶべきよすがなき女子に於ては此上なき良師友なり●學期は二個年にて講義錄掲載科目は（學科）修身禮法國文作文漢文歷史地理算術博物理化生理衛生家事經濟家庭教育割烹裁縫習字圖畫（科外）史傳お伽譚詞藻質問應答雜錄雜報也●講義錄は每月一回發行紙數菊判百六十頁以上●會費は一個月貳拾錢全期分四圓八拾錢別に束脩貳拾錢●詳細なる會則希望者へは申越され次第送呈すべし

東京麴町區土手三番町廿八番地
大日本女學會

第壹卷十一月十日發行

新刊

家庭の鑑

菊版美本

全一冊

定價金拾五錢

郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の緑褒綬賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれは皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれは其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の敎育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書冊無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
(電話新橋八八)
國光社

生田目經德編

標注 雅文消息集 全

菊版美本
全一冊
定價金廿五錢
郵稅四錢

日用消息文の摸範は中古文にとらざれば雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契沖、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學ひ日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさば益を得ること必大なるべし。

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所　國光社

女子のとも

毎月二回發行●定價一冊拾錢●六冊五拾七錢●十二冊壹圓拾錢●無郵稅●郵券代用一割增

天長節發行 第五拾四號重要目次

口繪寫眞版 野口小蕙女史筆 菊の圖二頁大其他二枚

出版物の勢力を論じて家庭の注意に及ぶ		高瀨代次郎
挿花	女子高等師範學校講師	近藤嘉三
料理法	女子職業學校講師	増田順子
刺繡	仝	金山つね子
造花		堀口千代子
持統天皇		松野栗堂
星の話		かはかみ
古今名作詳釋		戲庵主人
落葉のはきよせ		李酒舍主人
蟲のこゑ		すがのや
浦つたひ	華族女學校監	下田歌子
常宮周宮い御兩所を日光なる離宮に伺ひ奉りし時		小川直子

◎大附錄(三十餘頁)◎

千代の雫(一名菊のはなし) 松本道別

◎懸賞募集廣告あり◎

發行所 東京市神田區鎌倉町二番地 東洋社

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直の事送

○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に書郵送料添附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	拾錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十二年十一月十九日印刷
明治三十二年十一月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛

東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地
印刷人 並木良雄

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
(電話番號新橋八八) 國光社